OLYMPIC × ATHLETE

OLYMPIAN

2010

果敢に挑んだ17日間

一丸となったチームジャパン

Contents

特集：バンクーバー冬季オリンピック
果敢に挑んだ17日間
ー丸となったチームジャパン

巻頭グラビア 04

94人の存在証明。 17

Voice of Team Japan 38
橋本聖子／髙橋大輔／田畑真紀／佐藤信夫

バンクーバー現地リポート 46

バンクーバー冬季パラリンピック 48
「もう一つのチームジャパン、バンクーバーを席巻!」

［バンクーバー対策プロジェクト］集まれ、戦え、チームジャパン!! 50

「MY OLYMPIC」の11年を振り返る 52

古橋廣之進さんが次世代の若者に伝えたもの 56

「東京オリンピック・パラリンピック招致」を振り返る 60

第13回オリンピックコングレス at コペンハーゲン 64

日本体育協会・日本オリンピック委員会創立100周年記念事業 66

JOC 活動報告 67

Cover photo by PHOTO KISHIMOTO

OLYMPIC × ATHLETE
OLYMPIAN
2010

チームジャパンの結束力が生んだ感動。

1988年カルガリー大会に続き、カナダで冬季では2度目となる第21回オリンピック冬季競技大会が、2月12日から28日までの17日間、バンクーバー市を中心に開催され、世界のトップアスリートが集結する中、チームジャパンは国民の皆様の熱い声援に支えられ、全力で競技に臨むことができました。
私どもJOCは、今後とも日本代表選手をはじめ世界のトップアスリートによる最高のパフォーマンスを通し、オリンピックの感動とスポーツのすばらしさをより多くの国民の皆様に感じていただけるよう、各競技団体と力を結集し、選手強化とオリンピックムーブメントの推進に努めてまいります。
今後とも、なお一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

竹田恒和
財団法人日本オリンピック委員会 会長

 photo by Hiroyuki Yakushi

17日間

photo by Hiroyuki Yakushi

果敢に挑んだ

―丸となったチームジャパン

第21回オリンピック冬季競技大会(2010／バンクーバー)

The XXI Olympic Winter Games, VANCOUVER 2010

With Glowing Hearts

カナダ・バンクーバーを舞台に展開された「第21回オリンピック冬季競技大会」。
この決戦の地に、205人(選手 94人・役員 111人)のチームジャパンが乗り込み、一丸となって世界を相手に激戦を繰り広げた。
その中にはメダルを掴んで歓喜した選手もいれば、一方で悔し涙を流した選手もいる。
すべての選手にそれぞれのドラマがあり、それは多くの人の胸を躍らせ、そして熱くした。
ここではその記憶に新しい、氷上の興奮、雪上の感動をいま一度振り返っておきたい。

photo by PHOTO KISHIMOTO

『メダルが欲しくてたまらなかった』

スピードスケート男子500m銀メダリスト――長島圭一郎

『終わったときは悔しくて、でもメダルは嬉しくて…』

スピードスケート男子500m銀メダリスト――加藤条治

加藤選手は、研ぎ澄まされた平衡感覚で、カーブを駆け抜けた
photo by AFLO

銅メダルを獲得後、嬉しさと悔しさの入り交じる気持ちで仰向けに倒れた加藤選手
photo by AFLO

長島選手の闘志と気迫に満ち溢れるラン

 photo by AFLO

photo by Hiroyuki Yakushi

『日本初のメダル。それを誇りに思う』

フィギュアスケート男子シングル銅メダリスト ―― 髙橋大輔

 photo by Hiroyuki Yakushi

photo by PHOTO KISHIMOTO

『長いようで、あっという間の4分間でした』

フィギュアスケート女子シングル銀メダリスト――浅田真央

『メダルが欲しかった。4度目のオリンピックでその原点に戻れた』

スピードスケート女子チームパシュート銀メダリスト――――――田畑真紀

photo by AFLO

『私の脚がもう少し長ければ…』

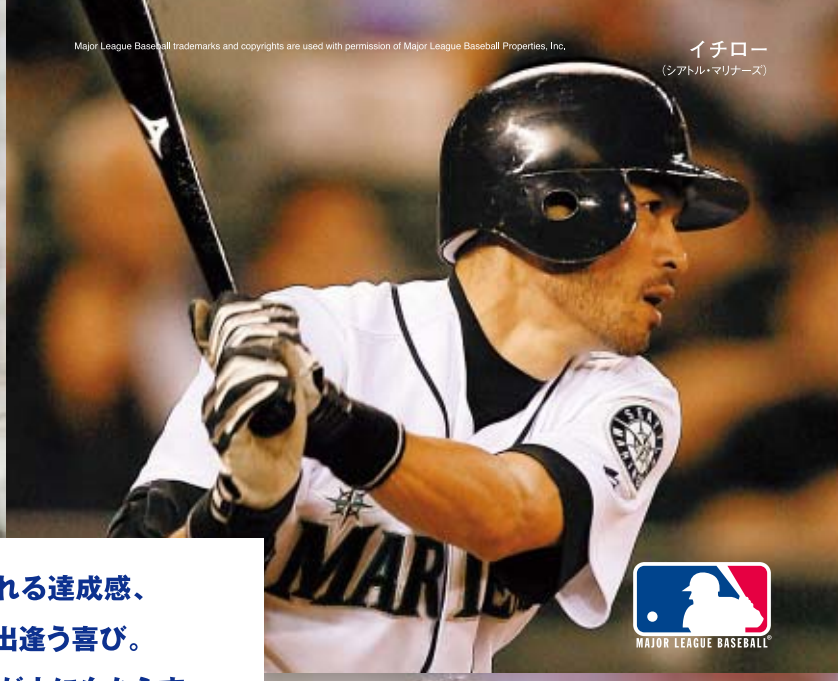
同――――――穂積雅子

photo by AFLO

photo by AFLO

『自分の成長を感じながら駆け抜けたオリンピックだった』

同――――――――小平奈緒



挑戦の先に生まれる達成感、
成長した自分に出逢う喜び。
それはスポーツが人にもたらす、
とても大切でかけがえのないもの。

明日は、きっと、できる。

ミズノは、スポーツを愛する
すべての人の挑戦を
これからも応援し続けていきます。

• www.mizuno.co.jp • 0120-320-799

明日は、きっと、できる。

MIZUNO

チームジャパンが残した足跡

94人の存在証明。

バンクーバー冬季オリンピックでの日本選手の活躍は、熱い興奮と、深い感動を生んだ。ここでは、日本代表全94選手が雪と氷に残した足跡を振り返ってみたい。

photo by AFLO

フリースタイルスキーの新鋭遠藤尚選手。日本の男子モーグルで、オリンピック史上最高位の7位入賞を果たした

SKI JUMPING

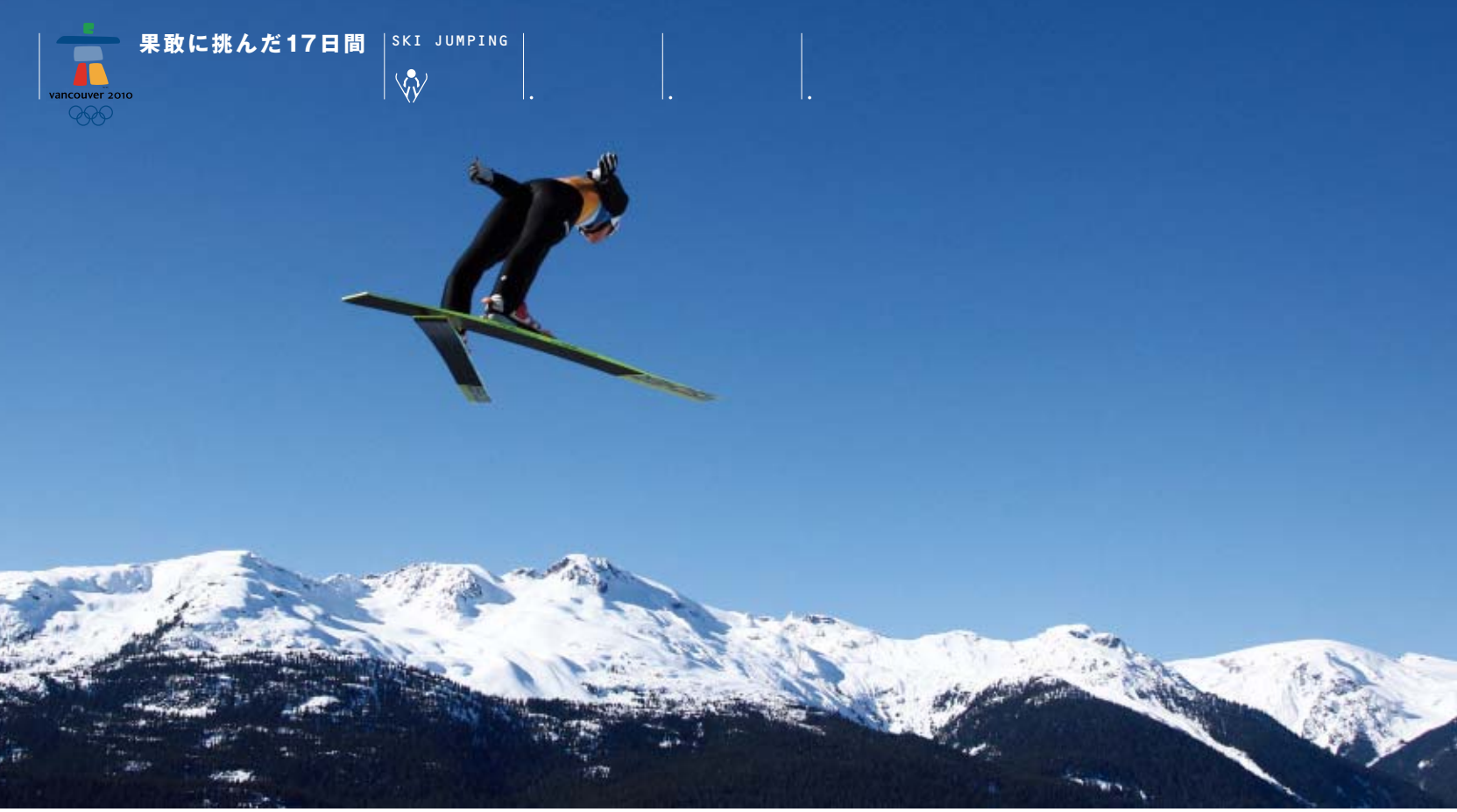
[スキージャンプ]

目標にした団体メダルへは届かずも、ベテラン葛西が健闘。

ノーマルヒルは出遅れた葛西選手だが、ラージヒルからは大ジャンプを取り戻す。「戦えるのに、辞めるわけにはいかない」と、現役続行を決意

photo by PHOTO KISHIMOTO

94人の存在証明。



個人戦では「シックリこない」と首を捻り続けていた20歳の栃本選手。3番手として出場した団体では128m、132mとジャンプを揃え、大舞台での度胸の良さを取り戻した　photo by AFLO

1998年長野大会以来のメダル奪還を狙ったチームジャパン。1月後半からのワールドカップをキャンセルし、入念な調整を行って臨んだが、最初のノーマルヒル個人は伊東大貴選手の15位が最高。ウィスラーのジャンプ台に吹く風をすぐには掴めなかった。

そんな中、意地を見せたのがベテラン葛西紀明選手だった。ノーマルヒルでは助走の滑りに苦しんだが、次のラージヒルまでにはそれも克服。1本目こそ急に低くなったスタートゲートへの戸惑いと弱い追い風に押されて21位にとどまるも、2本目はさらにゲートが低くなっても135mの大ジャンプで8位に順位を上げた。

「優勝者シモン・アマン選手（スイス）は138mだから、彼以外の選手とは戦えるレベルくらいになったという自信がついた」

1本目も同じくらい飛んでいれば銅メダルだったという悔しさはあるが、大舞台で世界レベルまで調子を上げられたことに喜びを感じていた。この結果で日本チームは92年アルベールビル大会から続く個人戦連続入賞記録を更新した。

調子が戻らなかった岡部孝信選手がメンバーから外れた団体戦は、葛西選手の健闘で5位。だが現役続行を明言した葛西選手だけでなく、伊東選手や初出場の竹内択選手や栃本翔平選手がチームを引っ張り始めれば、復活はあるはずだ。

日本代表選手団記録

葛西紀明 Noriaki Kasai
（1972年6月6日生まれ）

ノーマルヒル	17位
ラージヒル	8位

伊東大貴 Daiki Ito
（1985年12月27日生まれ）

ノーマルヒル	15位
ラージヒル	20位

竹内 択 Taku Takeuchi
（1987年5月20日生まれ）

ノーマルヒル	34位
ラージヒル	37位

栃本翔平 Shohei Tochimoto
（1989年12月21日生まれ）

ノーマルヒル	37位
ラージヒル	45位

岡部孝信 Takanobu Okabe
（1970年10月26日生まれ）
※ 不出場

日本代表チーム
（葛西、伊東、栃本、竹内）

ラージヒル団体	5位

（左）昨年の世界選手権で銅メダルを獲得した団体は、全選手が2本目の飛距離を伸ばすチームワークで5位。（左から）葛西、栃本、竹内、伊東選手（下左）個人戦は、全員が微妙な追い風に苦しめられた。調子はまずまずだが試合で力を出し切れなかった竹内選手（下中）わずかなズレもあり、爆発できなかった伊東選手（下右）調子が戻らず出場機会無しに終わった岡部選手の練習風景

photo by PHOTO KISHIMOTO

photo by AFLO

スキー

[ノルディック複合] NORDIC COMBINED

エース小林が入賞。団体は実力の差を見せつけられる。

昨年2月、チェコ・リベレッツで行われた世界選手権の団体で14年ぶりの金メダルを獲得したチームジャパン。今大会でも、94年リレハンメル大会での団体金メダルと河野孝典選手の個人銀メダル以来のメダルを目標に掲げて臨んだ。河野コーチは、バンクーバー大会では日本代表ヘッドコーチとしてチームの士気を盛り上げた。

最初の種目、ノーマルヒルでは小林範仁選手が7位入賞と健闘。団体へ希望を繋いだ。ノーマルヒルに続いて行われたのが、最も期待のかかった団体。小林選手、渡部暁斗選手に加え、高橋大斗選手、加藤大平選手の4名が出場した。前半のジャンプで4位と好位置につけ、後半のクロスカントリーは一走に加藤選手、二走に高橋選手、三走に渡部選手、アンカー小林選手のオーダー。だが、スタート直後から果敢に飛び出す強豪国のスピードについていくことができず、順位を2つ落とし6位に終わった。

団体終了後、高橋選手が「持っている力は出し切ったと思います」と語った。その言葉の通り、選手たちは各々、力は出した上での結果だったと言える。それだけに、まずは個人種目で上位争いができる実力をつけることが重要であることをあらためて実感させられた大会となった。それが団体を戦う上でも、今後の課題となる。

photo by PHOTO KISHIMOTO

（上左）高橋選手は団体の前半ジャンプで136.5mの大ジャンプで貢献（上）小林選手はノーマルヒル後半のクロスカントリーで残り1km付近でトップに立つ果敢な走りを見せて7位入賞を果たした

（左）ラージヒルで日本勢最高の9位に入った渡部選手（下）09年2月の世界選手権で個人2種目で一桁順位を記録していた湊選手はラージヒルに出場

photo by AFLO

加藤選手はノーマルヒル、ラージヒルの両方に出場するも入賞ならず

photo by PHOTO KISHIMOTO

94人の存在証明。

日本代表選手団記録

小林範仁 Norihito Kobayashi
（1982年5月4日生まれ）

ノーマルヒル	7位
ラージヒル	27位

渡部暁斗 Akito Watabe
（1988年5月26日生まれ）

ノーマルヒル	21位
ラージヒル	9位

加藤大平 Taihei Kato
（1984年7月30日生まれ）

ノーマルヒル	24位
ラージヒル	30位

湊 祐介 Yusuke Minato
（1985年3月15日生まれ）

ラージヒル	26位

高橋大斗 Daito Takahashi
（1980年12月16日生まれ）

ノーマルヒル	27位

日本代表チーム
（小林、高橋、加藤、渡部）

ラージヒル団体	6位

日本代表選手団記録

恩田祐一 Yuichi Onda
（1980年6月24日生まれ）
男子スプリント 17位

成瀬野生 Nobu Naruse
（1984年7月8日生まれ）
男子15km 49位
男子パシュート15kmC＋15kmF 39位
男子50km 35位

男子日本代表チーム
（恩田、成瀬）
男子チームスプリント 13位

石田正子 Masako Ishida
（1980年11月5日生まれ）
女子30km 5位
女子パシュート7.5kmC＋7.5kmF 20位

夏見 円 Madoka Natsumi
（1978年7月2日生まれ）
女子スプリント 27位
女子30km 31位

福田修子 Nobuko Fukuda
（1980年7月29日生まれ）
女子10km 52位

柏原理子 Michiko Kashiwabara
（1991年3月14日生まれ）
女子10km 61位

女子日本代表チーム
（石田、夏見、福田、柏原）
女子4×5kmリレー 9位

女子日本代表チーム
（夏見、福田）
女子チームスプリント 13位

photo by AFLO
男子スプリントのエース恩田選手は準々決勝で敗退した

photo by AFLO

photo by PHOTO KISHIMOTO

photo by AFLO

チームスプリントにはトリノ大会8位と同じコンビ、夏見選手（上左）と福田選手（上右）が出場したが、連続入賞はならなかった（左）成瀬選手は男子50kmなどに出場（下）初出場の18歳、柏原選手にとって次につながる経験となった

石田が日本人過去最高の5位入賞。期待のスプリントは低調に終わる。

冬季オリンピックで今回最多の12種目が行なわれるクロスカントリーで日本唯一の入賞を果たしたのが、30kmクラシカルの石田正子選手の5位。これは日本のクロスカントリー全種目を通じオリンピック史上最高の成績である。

石田選手は2007年の札幌世界選手権30kmクラシカル13位、昨シーズンのチェコ・リベレッツ世界選手権10kmクラシカル8位、ノルウェー・トロンハイムでのワールドカップ30kmクラシカル3位など、次々と日本最高順位を塗り替えてきた。「誰よりも多い」と言われる練習量に裏打ちされた着実な歩みは、バンクーバーでもとどまることを知らなかった。

日本のクロスカントリーのスタッフは、監督、コーチ、ワックスマンなどの人数が海外の強豪国の半分以下に過ぎない。少数ながら役割を兼務しつつ試合に備えた。30kmのレース中、石田選手から「スキー板が上りで止まらない」と報告を受けると、雪質に適したワックスを塗ったスキー板を俊敏に用意。5位入賞はチーム全体の勝利でもあった。

一方、近年の大会で好成績を残してきたスプリント系の種目では、女子の夏見円選手が27位、男子の恩田祐一選手が17位など、実力を出し切れない結果に。ソチ大会に向けて強化を進め、スプリント種目では巻き返しを図り、そして初のメダルを目指したい。

一時は30位前後まで落ちたが持ち前の粘り強さで追い上げ5位入賞の石田選手

photo by AFLO

スキー
[クロスカントリー]
CROSS COUNTRY SKIING

photo by AFLO

初出場の村田選手は「今シーズンでいちばんよかったです」と自ら語る滑りを見せて8位入賞。ソチ大会へ向けて飛躍が期待される

photo by AFLO

海外のトップクラスに劣らないスピードで見事7位入賞を果たした遠藤選手

94人の存在証明。

photo by AFLO

photo by AFLO

photo by AFLO

（上左）1998年の長野大会から数え、オリンピック4度目の出場となった附田選手（上中）初出場の西選手（上右）予選トップのタイムをマークした尾﨑選手（下）全員が決勝に進んだ女子では伊藤選手が予選15位から3つ順位を上げて12位の結果を残した（右）里谷選手は決勝で転倒したが果敢な滑りに会場から拍手が送られた

photo by AFLO

photo by AFLO

スキー

[フリースタイル モーグル]

FREESTYLE SKIING

上村は4大会連続入賞。ホープ遠藤&村田が入賞でソチへつなぐ。

photo by AFLO

フリースタイル・モーグルで最も注目を集めたのは、07―08年のシーズンにワールドカップ種目別総合優勝をなし遂げ、2009年には猪苗代で行われた世界選手権で金メダルを獲得している上村愛子選手だった。

女子は、開会式の翌日となる13日に実施。予選で5位につけて迎えた決勝だったが、上村選手は得意とするターンでわずかにミスが出て4位となり表彰台には届かなかった。しかし、初出場の長野大会から7、6、5、4位と一つずつ順位を上げての4大会連続入賞である。長期間にわたり世界のトップクラスにいる証であり、称賛に値する結果だった。

上村選手に加え、5大会連続出場の里谷多英選手、トリノ大会に続き連続出場の伊藤みき選手など4人全員が決勝に進出。その中で、19歳で初出場となった村田愛里咲選手が美しいエアを決めて8位入賞を果たした。

女子の翌日に行われた男子でも、4大会連続出場の附田雄剛選手、初出場の西伸幸選手ら3選手が決勝に進み、同じく19歳の遠藤尚選手が7位入賞。トリノ大会での決勝進出者が女子3名（入賞1名）、男子1名（入賞なし）だったことと照らし合わせても、チーム全体の底上げには成功したと言える。特に、19歳の若手コンビが活躍したことは、今後に向けて明るい材料となった。

photo by Hiroyuki Yakushi

4度目のオリンピックで初のメダルを狙った上村選手だったが、あと一歩のところで涙を飲んだ

日本代表選手団記録

遠藤 尚 Sho Endo（1990年7月4日生まれ） 男子モーグル	7位
西 伸幸 Nobuyuki Nishi（1985年7月13日生まれ） 男子モーグル	9位
附田雄剛 Yugo Tsukita（1976年7月18日生まれ） 男子モーグル	17位
尾崎 快 Kai Ozaki（1987年7月30日生まれ） 男子モーグル	24位
上村愛子 Aiko Uemura（1979年12月9日生まれ） 女子モーグル	4位
村田愛里咲 Arisa Murata（1990年10月17日生まれ） 女子モーグル	8位
伊藤みき Miki Ito（1987年7月20日生まれ） 女子モーグル	12位
里谷多英 Tae Satoya（1976年6月12日生まれ） 女子モーグル	19位

ALPINE SKIING

[スキー アルペン]

悔しい結果に終わった皆川選手。持ち味である攻めのスキーを見せた

日本代表選手団記録

佐々木 明 Akira Sasaki
(1981年9月26日生まれ)
男子回転　18位

皆川賢太郎 Kentaro Minagawa
(1977年5月17日生まれ)
男子回転　途中棄権

photo by AFLO

前回のトリノ大会では、皆川賢太郎選手が3位と100分の3秒差の4位で、湯浅直樹選手も7位入賞を果たしたアルペンスキー男子回転。今回は出場2選手が、世界ランキングが下位だったことから本番のスタート順位も遅く、苦しい戦いを強いられた。

当日は雨まじりの激しい雪も降り、雪質も軟らかい最悪のコンディション。スタート順が遅くなれば遅くなるほどコースは荒れ、不利になる状況だった。そんな中、27番スタートの佐々木明選手は難しいコースをミスなく滑り、トップと1秒62差の14位につける上々の滑り出しをした。だが、さらなる上位を狙って攻めた2本目はミスが出てしまい、順位を18位に落とした。

一方、39番スタートの皆川選手の1回目は、佐々木選手より条件が悪い中での滑走。それでもメダルを獲るためには勝負をかけなくてはいけない。攻めのレースをしたが、スタート直後に、無念のコースアウトとなった。

今大会からの新種目。男女の日本第一人者が挑戦し、決勝に進出。

photo by AFLO

（上）決勝1回戦、瀧澤選手は2位射程圏につけたが中盤のジャンプミスで失速（下）終盤に勝負をかけた福島選手はスピード過剰で2位に接触しそうに

photo by PHOTO KISHIMOTO

日本代表選手団記録

瀧澤宏臣 Hiroomi Takizawa
(1973年9月13日生まれ)
男子スキークロス　29位

福島のり子 Noriko Fukushima
(1979年10月18日生まれ)
女子スキークロス　22位

[スキー フリースタイル スキークロス]

FREESTYLE SKIING

今大会が初の正式種目となったスキークロス。ワールドカップ通算3勝で2003年には総合王者にもなった瀧澤宏臣選手と、ワールドカップ表彰台経験のある福島のり子選手が出場。ただ、ともに万全ではなかった。

福島選手はシーズン直前の合宿で右手首を骨折。瀧澤選手も1月のワールドカップで転倒して臀部を強打するアクシデントに見舞われていたからだ。それでも瀧澤選手は26位で、福島選手は21位で予選通過と意地を見せた。続く決勝トーナメント1回戦では2人とも、2位に上がるチャンスをつかみながらもわずかなミスを犯して3位。悔しい敗退となった。

最悪のコンディションのなか攻めた日本勢。皆川は途中棄権、佐々木は不完全燃焼に。

photo by AFLO

結果に満足していないが、昨季のケガを乗り越え出場した佐々木選手

94人の存在証明。

photo by AFLO
1月のワールドカップで11位、15位と力をつけてきた土井選手。自分の力は発揮できた

photo by AFLO
新しいことに挑戦中でなかなかタイムを出せないという竹内選手。上を狙う過程での悔し涙だった

photo by AFLO
昨季はワールドカップ10位台の健闘もあったが、今季は調子を合わせられなかった野藤選手

photo by AFLO
昨季の世界選手権では6位に入賞し、メダルの期待もあった家根谷選手

SNOWBOARD

スキー

[スノーボード]

パラレル大回転、スノーボードクロス

photo by AFLO
ドクターストップにより、やむなく棄権した藤森選手。残念な結果だった

日本代表選手団記録

野藤優貴 Yuki Nofuji (1987年6月11日生まれ) 男子パラレル大回転	27位
竹内智香 Tomoka Takeuchi (1983年12月21日生まれ) 女子パラレル大回転	13位
家根谷依里 Eri Yanetani (1984年6月7日生まれ) 女子パラレル大回転	21位
土井奈津子 Natsuko Doi (1979年3月15日生まれ) 女子スノーボードクロス	14位
藤森由香 Yuka Fujimori (1986年6月11日生まれ) 女子スノーボードクロス	棄権

クロス藤森、涙の棄権。パラレル大回転の竹内は不完全燃焼の13位。

隠れた注目種目ともいえたスノーボードクロスとパラレル大回転。前回のトリノ大会では、スノーボードクロスの藤森由香選手が7位入賞を果たし、パラレル大回転の竹内智香選手も9位と、メダルまであと一歩の位置にいた。

藤森選手のバンクーバーへの道は平坦ではなかった。2009年9月のワールドカップでは5位になったものの12月には腰椎を骨折。驚異的な回復で復帰し、本番1カ月前のワールドカップでは9位と復調を示した。しかし本番4日前の公式練習で転倒し、頭部を強打して入院。ギリギリまで試合出場を懇願したが、最後はドクターストップという結果になった。一方、土井奈津子選手は攻める滑りで決勝トーナメントへ進出し、準々決勝は3着で敗退したもの、14位と健闘した。

パラレル大回転の竹内選手は昨季、ワールドカップで2位を4回、世界選手権も4位と優勝を狙えるレベルにまで上がってきていた。バンクーバーでは予選こそ10位で通過したものの、決勝トーナメントは1回戦で敗退して13位に。

初出場の野藤優貴選手は落ち着いた滑りをみせ、結果こそ27位だったもののソチ大会につながる滑り。2大会連続出場の家根谷依里選手は、1本目は好感触で終え、2本目でミスが出て予選敗退。「世界一になるまで辞められない」とソチを目指すことを誓った。

photo by AFLO

SNOWBOARD

前年世界チャンピオンとして挑んだ青野選手。メダルを手の内に入れたかに思われたが、最後のジャンプの着地で踏ん張れず

メダルへの期待大も、國母、青野ともに最後の着地ミスで8位、9位に。

スキー スノーボード ハーフパイプ

2組に分かれて行われた予選では青野令選手が3番目の得点を出し、國母和宏選手は4番目の得点で通過したスノーボードハーフパイプ。昨年の世界選手権覇者青野選手と、1月末の冬季Xゲームズ（スーパーパイプ）で3位の國母選手という実力者2人の好発進でメダルへの期待が一気に高まった。

だが、決勝では、彼らの得点はなかなか伸びなかった。1回目は國母選手が最後の大技で転倒し、青野選手は最初のジャンプでバランスを崩す。ともに大技を温存して臨んだ予選より、10点以上低い得点で9位と8位となったのだ。

それでも、青野選手が予選で出した43点台さえ出せば、2人ともメダル圏内という状況で迎えた2回目。國母選手はまたしても最後の大技の着地後に手をついてしまい、35・7点と得点を伸ばせず、その時点で7位。続く青野選手も「メダルは確実」と思わせる演技をしながらも、最後のジャンプの着地後にこらえきれずに転倒。1本目の32・9点にとどまった。

結局、最終順位は國母選手が8位で青野選手が9位。連覇を決めたショーン・ホワイト選手（アメリカ）には届かないにしても、ともにメダルに届く実力を持っていただけに、惜しい結果だった。

一方、女子は、昨年の世界選手権4位の山岡聡子選手がメダルを狙ったが、惜しくも準決勝どまりだった。

photo by PHOTO KISHIMOTO

photo by AFLO

photo by AFLO

（左頁左）20歳の工藤選手は準決勝敗退（左頁右）中島選手は横2回転を入れて決勝を狙ったが、転倒で涙を飲む（左）高さにこだわった村上選手は、転倒と着地の乱れで予選敗退(中)昨年の世界選手権4位の山岡選手は、メダルを狙うも準決勝敗退（右）最年少19歳の岡田選手は、予選敗退と厳しさを味わった

photo by PHOTO KISHIMOTO

決勝では回転軸をずらして3回転する大技「ダブルコーク」を武器にメダルを狙った國母選手だが2回とも着地ミスで無念の8位に

日本代表選手団記録

國母和宏 Kazuhiro Kokubo
(1988年8月16日生まれ)
男子ハーフパイプ 8位

青野 令 Ryo Aono
(1990年5月15日生まれ)
男子ハーフパイプ 9位

工藤洸平 Kohei Kudo
(1990年2月9日生まれ)
男子ハーフパイプ 14位

村上大輔 Daisuke Murakami
(1983年5月18日生まれ)
男子ハーフパイプ 27位

中島志保 Shiho Nakashima
(1978年8月12日生まれ)
女子ハーフパイプ 13位

山岡聡子 Soko Yamaoka
(1974年5月29日生まれ)
女子ハーフパイプ 16位

岡田良菜 Rana Okada
(1991年1月5日生まれ)
女子ハーフパイプ 29位

photo by AFLO

photo by AFLO

FIGURE SKATING

大ケガから復帰後、多彩な技と演技に幅が出た髙橋選手

スケート

[フィギュアスケート]

浅田銀、髙橋銅に日本中が興奮。シングルは全6選手が入賞の快挙。

男女6選手とも入賞、髙橋大輔選手のアジア男子初のメダル、浅田真央選手の銀と大活躍。アイスダンスのリード姉弟も光る演技を見せるなど、フィギュアスケート勢は輝かしい成績を収めた。

髙橋選手は一昨年の大ケガを克服しオリンピック出場。以前は確実に成功させていた4回転ジャンプを「意地でも入れたかった」と挑戦。後半はステップや表現力の冴える滑りで他を圧倒。銅メダルに輝いた。

浅田真央選手は、ライバルキム・ヨナ選手（韓国）との決戦に挑んだ。強いプレッシャーを受けながらも、今大会出場女子選手のなかではただ1人トリプルアクセルを3本成功させるなど、攻めの姿勢を見せた。結果は、ミスのない演技を見せたキム選手に軍配が上がり、浅田選手は最初こそ悔し涙を見せたものの「メダルを持って帰れることが嬉しい」と気持ちを切り替え、ソチ大会に希望を繋いだ。

安藤美姫選手と鈴木明子選手はともに演技をまとめ、それぞれの世界観をアピールする滑りを披露。小塚崇彦選手は4回転ジャンプに初成功し、意味のある8位入賞。織田信成選手は途中、靴紐が切れるアクシデントがあったものの最後まで滑り終え7位と健闘した。

日本代表選手団記録

髙橋大輔 Daisuke Takahashi（1986年3月16日生まれ）	男子シングル	3位
浅田真央 Mao Asada（1990年9月25日生まれ）	女子シングル	2位
織田信成 Nobunari Oda（1987年3月25日生まれ）	男子シングル	7位
安藤美姫 Miki Ando（1987年12月18日生まれ）	女子シングル	5位
小塚崇彦 Takahiko Kozuka（1989年2月27日生まれ）	男子シングル	8位
鈴木明子 Akiko Suzuki（1985年3月28日生まれ）	女子シングル	8位
リード・キャサリン・マーガレット（1987年6月5日生まれ）**&リード・ロバート・クリストファー**（1989年7月7日生まれ）	アイスダンス	17位

安藤選手は持ち味である女性らしい演技で魅了した

photo by AFLO

photo by AFLO

photo by AFLO

photo by AFLO

94人の存在証明。

（左上）銀メダルを胸にした瞬間は複雑な表情だったものの、周りの笑顔を見るうちに喜びを実感できたという浅田選手（右上）織田選手は股関節の柔らかさを生かしたジャンプの着氷やスピンの姿勢が持ち味（右中）鈴木選手は弾けるような笑顔とステップで観客に勇気とパワーを伝えた（右下）深いエッジに乗ったイーグルは小塚選手の見せ場（左）アメリカ育ちの日本人、リード姉弟は躍動的な演技で初の大舞台を舞った

photo by AFLO

photo by AFLO

女子3000mリレー準決勝に臨んだ（左から）伊藤、桜井、小澤、酒井の4選手。実力伯仲のカナダに何とか競り勝つことを前提に、A決勝に懸けていただけに悔やまれる

（上左）個人種目は1000mに懸けていた伊藤選手だが、予選第5組3位で敗退（上中）高御堂選手は、1500mでのメダルを狙ったが、思惑に反して前へ出られなかった（上右）3種目出場の藤本選手は、500mでは得意のスタートダッシュが決まらず予選で姿を消してしまった（下左）エースの桜井選手は不完全燃焼。個人3種目とも予選敗退に（下右）小澤選手は1000m準々決勝進出も、狙った1500mは予選で失格に

photo by AFLO

photo by AFLO

photo by AFLO

photo by AFLO

photo by AFLO

94人の存在証明

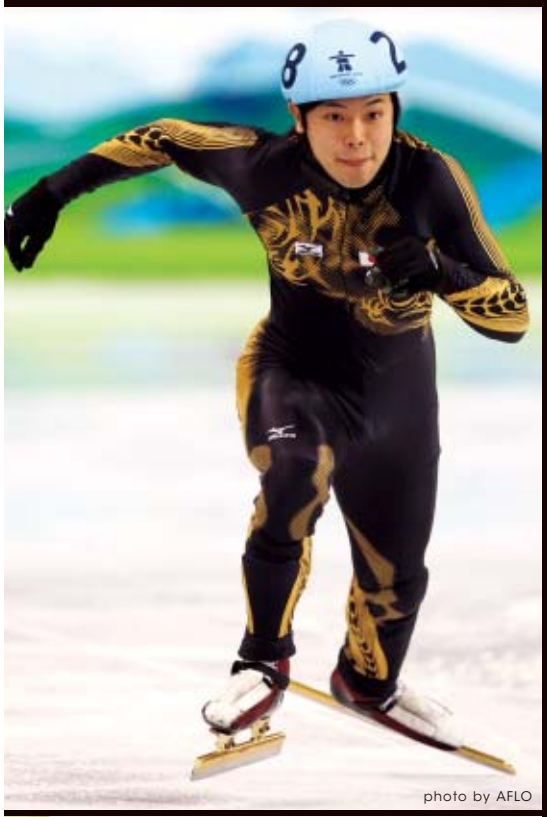


photo by AFLO

photo by AFLO

photo by AFLO

SHORT TRACK SPEED SKATING

[ショートトラック]

スケート

女子リレー7位入賞も、個人種目入賞ならず、課題を残す。

2年前からのナショナルチーム編成と、韓国の金善台コーチの指導で実力アップの手応えを持って臨んだショートトラック勢。期待された女子は、競技初日の13日に、気合が空回りしてしまう結果となった。メダルを狙っていた女子3000mリレー。伊藤亜由子、小澤美夏、酒井裕唯、桜井美馬の4選手で臨んだ予選は、スタート直後のポジション争いで中国とカナダに押し出され4番手のスタートになってしまう。エースの桜井選手が前を追走したが順位を3位に上げるのが精一杯。上位2チームが出場できるA決勝進出へ向けて攻めの滑りをする中国とカナダには追いつけず、B決勝進出になってしまった。さらにこの日行われた女子500mでは桜井選手と酒井選手が予選敗退。男子1500mでも吉澤純平選手と藤本貴大選手が準決勝敗退と、決勝進出者がなく終わった。

女子は、11日後の3000mリレーB決勝でも本領を発揮できなかった。2番手につけて最後で抜く作戦が裏目に出て順位を落とす。入念に練習してきたタッチでは、大混乱の中に突っ込んでしまう展開でミスが出て残り3周で酒井選手が転倒。A決勝でトップでゴールした韓国が失格になって日本は7位となったが、反省ばかりの結果になった。

個人戦では入賞ゼロという屈辱の成績だった。強化の方向性は正しいと思えるだけに、それをどう続けるかが課題だ。

（上）得意の500mでは予選を2位でクリアした吉澤選手だが、準々決勝では力を発揮できず（中）1500mでは、落ち着いたレース展開で日本選手個人で唯一B決勝へ進出した貞包選手（下）リレーでは主力選手として滑った酒井選手だが、日本チャンピオンとして臨んだ500m予選では、B決勝で1、2位になる中国とカナダの選手と同組になりわずかに及ばない3位だった

日本代表選手団記録

吉澤純平 Junpei Yoshizawa
（1985年3月16日生まれ）

男子500m	14位
男子1500m	18位

貞包紘子 Hiroko Sadakane
（1986年5月16日生まれ）

女子1500m	12位

酒井裕唯 Yui Sakai
（1987年12月7日生まれ）

女子500m	17位

藤本貴大 Takahiro Fujimoto
（1985年3月13日生まれ）

男子500m	26位
男子1000m	27位
男子1500m	17位

小澤美夏 Mika Ozawa
（1985年8月9日生まれ）

女子1000m	15位
女子1500m	33位

桜井美馬 Biba Sakurai
（1989年6月8日生まれ）

女子500m	27位
女子1000m	23位
女子1500m	28位

高御堂雄三 Yuzo Takamido
（1988年1月11日生まれ）

男子1000m	20位
男子1500m	29位

伊藤亜由子 Ayuko Ito
（1986年9月29日生まれ）

女子1000m	18位

女子日本代表チーム
（桜井、伊藤、小澤、酒井、貞包）

女子3000mリレー	7位

photo by AFLO

男子チームパシュートの出島選手（左）、平子選手（中央）、土井選手（右）。7－8位決定戦でスウェーデンに敗退

SPEED SKATING

94人の存在証明

photo by PHOTO KISHIMOTO

photo by PHOTO KISHIMOTO

スケート

[スピードスケート]

銀2、銅1のメダルを獲得し、4年前の雪辱を果たす。

5大会連続出場でありチーム最年長38歳の岡崎朋美選手から、日本スピードスケート史上最年少の15歳での出場となった高木美帆選手まで、幅広い年齢の選手で構成された日本スピードスケート陣。4年前のトリノ大会では、期待を集めながらも、84年のサラエボ大会以来、6大会連続で獲得してきたメダルの系譜が途絶えることになり、「惨敗」と評されることもあった。「この雪辱をバンクーバーで果たそう」の合い言葉とともに、この4年間、強化に取り組んできた。

その意気込みが最初に成果となって表れたのは、大会4日目の2月15日に行われた男子500mだった。優勝候補が10人近くいると言われ、激戦が予想される中、長島圭一郎選手が銀、加藤条治選手が銅と、2つのメダルを獲得。長島選手は、1本目

photo by PHOTO KISHIMOTO

田畑選手（左）、小平選手（左から2人目）、穂積選手（右）は、控えの髙木選手（右から2人目）の首にメダルをかけて喜びを分け合った

（左頁左）長距離2種目に出場、5000mで9位と入賞にあと一歩に迫る滑りを見せた石澤選手（左頁右）500mの2本目のレースで6位から逆転し銀メダルを獲得した長島選手（右頁左）500m銅メダルの加藤選手（右頁右）3種目に出場した吉井選手は500mで5位入賞と健闘した

photo by AFLO

photo by AFLO

こそ6位にとどまったものの、2本目で会心の滑りを見せて逆転での表彰台。トリノ大会では、自身の力を出しながら500mで13位に終わるなど、実力のなさに涙した。あれから4年、屈辱をバネにしてのメダル獲得だった。

加藤選手もエースとして注目されたにもかかわらず500mで6位に終わったトリノ大会からの巻き返しに成功。最初こそ銅メダルを悔しがっていたが、一夜明けるとメダルの重みを実感している様子だった。

大会終盤の2月27日には、トリノ大会から採用されたチームパシュートで女子が銀メダルを獲得する。決勝こそわずか0秒02の僅差でドイツに敗れはしたが、26日の1回戦の対韓国から、ペース配分をコントロールするなど司令塔的な立場にいる35歳のベテラン田畑真紀選手を中心に、シーズンを通じてトレーニングや実戦を重ねてきた小平奈緒選手、穂積雅子選手のチームワークが光った。

また、チームパシュートのメンバーの小平選手が1000、1500mでともに5位となり、近年の充実ぶりを証明した。一方、穂積雅子選手も3000mで6位、5000m7位と2種目で入賞するなど、中長距離種目は短距離に比べて世界の壁が厚いと言われるだけに、健闘が光った。

SPEED SKATING

94人の存在証明

photo by AFLO

（上）髙木選手にとって初のオリンピックは苦さも含んだ大会に（1段目左）500m日本記録保持者の及川選手は13位（1段目右）30歳で悲願の初出場の新谷選手（2段目左）両親もスピードスケート選手の羽賀選手（2段目右）2大会連続出場の杉森選手（3段目左）急成長の若手、名取選手（3段目右）太田選手は17位（4段目左）5度目の出場の岡崎選手（4段目右）力走を見せた小原選手は1000m17位

日本代表選手団記録

長島圭一郎 Keiichiro Nagashima
（1982年4月20日生まれ）

男子500m	2位
男子1000m	37位

加藤条治 Joji Kato
（1985年2月6日生まれ）

男子500m	3位

平子裕基 Hiroki Hirako
（1982年8月6日生まれ）

男子5000m	19位
男子10000m	11位

及川 佑 Yuya Oikawa
（1981年1月16日生まれ）

男子500m	13位

太田明生 Akio Ota
（1984年9月3日生まれ）

男子500m	17位

小原唯志 Tadashi Obara
（1983年5月15日生まれ）

男子1000m	17位

杉森輝大 Teruhiro Sugimori
（1982年9月15日生まれ）

男子1000m	26位
男子1500m	26位

出島茂幸 Shigeyuki Dejima
（1982年5月13日生まれ）

男子5000m	27位

羽賀亮平 Ryohei Haga
（1988年9月17日生まれ）

男子1000m	29位

土井槙悟 Shingo Doi
（1983年8月23日生まれ）

男子1500m	30位

男子日本代表チーム
（杉森、土井、平子、出島）

男子チームパシュート	8位

小平奈緒 Nao Kodaira
（1986年5月26日生まれ）

女子500m	12位
女子1000m	5位
女子1500m	5位

吉井小百合 Sayuri Yoshii
（1984年11月28日生まれ）

女子500m	5位
女子1000m	15位
女子1500m	26位

穂積雅子 Masako Hozumi
（1986年9月11日生まれ）

女子3000m	6位
女子5000m	7位

石澤志穂 Shiho Ishizawa
（1986年10月23日生まれ）

女子3000m	15位
女子5000m	9位

新谷志保美 Shihomi Shinya
（1979年8月10日生まれ）

女子500m	14位

岡崎朋美 Tomomi Okazaki
（1971年9月7日生まれ）

女子500m	16位
女子1000m	34位

田畑真紀 Maki Tabata
（1974年11月9日生まれ）

女子1500m	19位

名取英理 Eri Natori
（1985年9月23日生まれ）

女子3000m	21位

髙木美帆 Miho Takagi
（1994年5月22日生まれ）

女子1000m	35位
女子1500m	23位

女子日本代表チーム
（小平、田畑、穂積）

女子チームパシュート	2位

photo by AFLO

photo by PHOTO KISHIMOTO

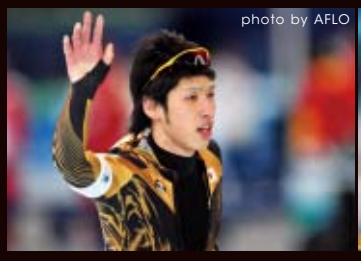


photo by AFLO

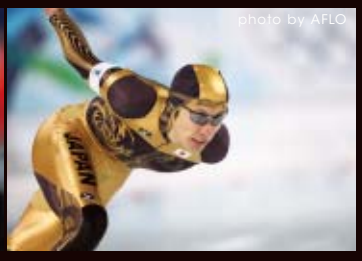


photo by AFLO

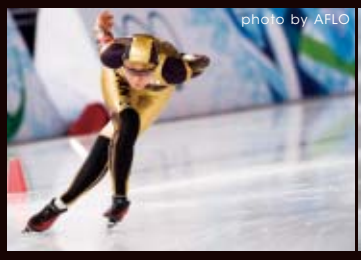


photo by AFLO

photo by AFLO

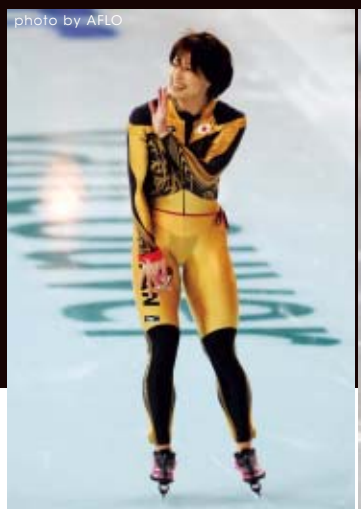


photo by AFLO

photo by AFLO

[カーリング] CURLING

強豪への善戦、劇的な逆転勝ちも後半失速で8位。

日本代表として出場したのはチーム青森。トリノ大会に出場した目黒萌絵選手、本橋麻里選手に加え、2002年のソルトレークシティー大会を経験している石崎琴美選手、初出場の山浦麻葉選手、近江谷杏菜選手の5名で挑んだ。

トリノ後、豊富な海外遠征など、かつてない充実した強化を図っての大会。初戦はアメリカに9−7で勝利し、成長ぶりを示す。2戦目では優勝候補のカナダと対戦。最後は逆転されたものの、9エンドまで6−5とリードするなど追いつめ、まずまずの出だしとなった。

2勝2敗で迎えたロシア戦では、第5エンドまでに0−6と大差をつけられながらも、チームワークで劇的な逆転勝利。これで勢いに乗るかに思われた。だが、ロシア戦と同日に行われたドイツ戦に6−7で敗れると、続く強豪のスイス、スウェーデンに連敗し、最終戦のデンマークにも敗れる。準決勝進出はならず、結局8位で大会を終えることになった。

全般を振り返ってみれば、アイスの状態を読み切れず、最後までショットの正確性を欠いたことが大きかった。強豪国は大会の序盤で読み取り、対応することに成功していたが、敗れた試合ではその差が表れた。

目黒選手は「力不足」、本橋選手は「経験不足でした」。大舞台での経験のなさを選手それぞれが痛感している様子で、それがアイスへの対応に苦慮した根本の原因ともなった。

photo by AFLO

photo by AFLO

photo by AFLO

（上）緊張感あふれるゲームが続いた（右）近江谷選手は初の大舞台で今までにない重圧を感じた（右下）懸命にメンバーに指示を送るスキップの目黒選手（下）予選最終日のスウェーデン、デンマーク戦は本橋選手がサードを務め、石崎選手がリード、山浦選手がセカンドとして出場した

日本代表選手団記録

目黒萌絵 Moe Meguro （1984年11月20日生まれ）
近江谷杏菜 Anna Omiya （1989年10月12日生まれ）
本橋麻里 Mari Motohashi （1986年6月10日生まれ）
石崎琴美 Kotomi Ishizaki （1979年1月4日生まれ）
山浦麻葉 Mayo Yamaura （1984年4月29日生まれ）

女子カーリング 8位

photo by PHOTO KISHIMOTO

photo by AFLO

全3種目出場も、女子2人乗り16位が最高。

photo by AFLO

(左)ソリを新調したくても費用不足。古いソリしか持っていない日本チームは、男子4人乗りでは借り物のソリに塗装し出場した（右）公式練習では転倒もしていた女子2人乗りだが、本番では無事完走

日本代表選手団記録

鈴木 寛 Hiroshi Suzuki	(1973年12月13日生まれ)
小林竜一 Ryuichi Kobayashi	(1976年11月23日生まれ)
土井川真二 Shinji Doigawa	(1979年10月25日生まれ)
宮内 優 Masaru Miyauchi	(1984年6月13日生まれ)
男子日本代表チーム ボブスレー男子2人乗り	(鈴木、小林) 21位
男子日本代表チーム ボブスレー 男子4人乗り	(鈴木、小林、土井川、宮内) 21位
桧野真奈美 Manami Hino	(1980年1月8日生まれ)
浅津このみ Konomi Asazu	(1986年10月23日生まれ)
女子2人乗り日本代表チーム ボブスレー女子2人乗り	(桧野、浅津) 16位

94人の存在証明。

[ボブスレー] BOBSLEIGH

ボブスレー

ボブスレーは、海外の強豪チームとの財政的な差を、努力だけでは埋められない結果となった。高速で技術的にも難しいコースで、各国は予算をかけてスピードと安定性を兼ねそえたソリを用意。その条件下でも女子2人乗りは転倒なくゴールし、有力チームの転倒や失格が相次ぐ中、16位まで順位を上げた。しかし男子2人乗りは21位、2大会ぶり出場の4人乗りは転倒もあり3本目まで完走したものの21位だった。

一方、スケルトンは過去2大会とは違い、今回は世界選手権と同じ4本滑走で行われた。越選手がソルトレークシティーでは8位、トリノでは11位になっている男子は、世界の大幅な進化を目の当たりにする結果に。ベテラン越和宏選手は上位選手の失格で辛くも最後の4本目に進んだが20位止まり。さらに初出場の田山真輔選手も滑りにバラツキが出てしまい、大きなミスなく健闘したものの19位になるのが精一杯だった。

またスケルトン女子は、小室希選手の滑走直前での失格で衝撃が走った。国際連盟の規格をクリアしたことを証明するステッカーを剥がしてしまったのだ。高いスプリント能力を持ち、それまでの公式練習では11～15位のタイムを出していただけに残念な失格だった。

両種目ともに、長期的な視野を持った強化や選手発掘、環境整備などへの取り組みの必要性が浮き彫りになる結果だった。

SKELETON [スケルトン]

ボブスレー

photo by AFLO

日本代表選手団記録

田山真輔 Shinsuke Tayama	(1982年10月18日生まれ)
男子スケルトン	19位
越 和宏 Kazuhiro Koshi	(1964年12月23日生まれ)
男子スケルトン	20位
小室 希 Nozomi Komuro	(1985年5月29日生まれ)
女子スケルトン	失格

photo by AFLO

開拓者・越のラストランは20位。

(左) スケルトンでは日本の草分けでもある越選手。最後のオリンピックへ懸ける気持ちは大きかったが、世界の進化には大きく立ち遅れる結果に（中）小室選手（右）越選手が立ち上げたチームに所属し、スケルトンに専念して力を伸ばした田山選手。先輩を超えて世界へ挑む新たなキッカケになる大会だった

photo by AFLO

日本代表選手団記録

小口貴久 Takahisa Oguchi (1979年1月11日生まれ)	
男子1人乗り	30位
原田窓香 Madoka Harada (1985年12月15日生まれ)	
女子1人乗り	26位
安田 文 Aya Yasuda (1982年12月18日生まれ)	
女子1人乗り	失格

LUGE [リュージュ]

厳しさを味わった日本チーム。

初出場だったトリノは13位、その後のイタリア留学でひと桁順位も視野に入れた原田窓香選手に期待が集まったリュージュ。だが彼女は今季、ソリの調整に戸惑い続けていた。シーズン序盤は新調したソリで臨んだが、調整が不十分で結果を出せず、古いソリの使用も視野に入れての挑戦だった。本番ではその迷いを引きずったことと、スタート地点がジュニアの位置まで下げられて、技術的な難しさが多少軽減されたことも影響したのだろう。結局、滑走の出来にバラツキが出てしまい、26位と思わぬ結果になった。

安田文選手は、1本目で装着した重りの重量オーバーで失格。長年追い求めてやっと手にした大舞台への切符。だがそこでの活躍はならなかった。

photo by AFLO

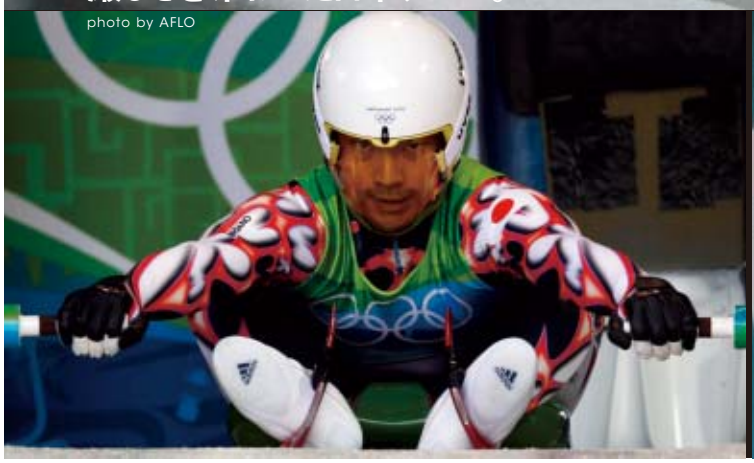


photo by AFLO

photo by PHOTO KISHIMOTO

(上) 8位以内入賞の可能性も持っていた原田選手だが、本番に調子を合わせ切れず、2回目の挑戦で厳しさを味わった (下左) 3回目の出場だった男子のエース小口選手 (下右) 安田選手

photo by AFLO

photo by PHOTO KISHIMOTO

ベテランと新人で挑んだ大会。鈴木が将来性をアピール。

日本代表選手団記録

井佐英徳 Hidenori Isa (1976年7月30日生まれ)	
男子スプリント	68位
男子20km	83位
鈴木芙由子 Fuyuko Suzuki (1989年1月13日生まれ)	
女子スプリント	44位
女子パシュート	54位
女子15km	53位

(上) トリノ大会に続き2回目の出場の井佐選手 (下) 初出場の鈴木選手は、射撃センスに期待

強化が成功した98年長野大会では高橋涼子選手が6位入賞を果たしたこともあるバイアスロン。前回のトリノでは男女ともリレーにも出場していた日本だが、今回の出場は男女1名ずつ。それ自体が世界との差を表す状況なのだろう。そんな中でも初出場の鈴木芙由子選手は健闘した。最初のスプリントでは44位になって次のパシュートの出場権を確保。昨年の世界選手権女子スプリント95位、女子15km87位からは大きくステップアップする結果を残し、次への希望をつないだ。

BIATHLON [バイアスロン]

Voice of Team Japan

選手時代より遥かに強いプレッシャー 初めての胃痙攣に。

日本人最多となる7大会の夏冬オリンピックを経験した選手として、そして初の女性の団長として。橋本聖子団長は選手への敬意と愛情を持って17日間を一緒に戦った。その胸の内を語る。

「初めて団長という立場でオリンピックに参加しました。選手の時は、自分のレースだけに集中すればよかったのですが、団長となると、競技者や監督やコーチ、医療スタッフなど全員が気持ちよく、ひとつの輪になってオリンピックに臨むためにはどうすればいいのかを考える必要がありました。

団長という立場で感じるメダルのプレッシャーは、選手時代より遥かに強いもので、初めて胃痙攣を起こしました（笑）。最初は上村愛子選手のスタートの時、2回目はスピードスケート男子500mで、長島圭一郎選手と加藤条治選手がスタートラインに立った時。うずくまりたくなるくらいの痛みに襲われましたが、力でねじ伏せました。選手時代に胃痛は経験しましたが、胃痙攣は初めてのことでした」

バンクーバーでは、選手との一体感を重要視した。

「今までは他競技の選手同士が、顔を合わせることはほとんどありませんでしたが、昨年の夏、各競技団体の選手を味の素ナショナルトレーニングセンターに集めて合宿を行い、『チームジャパン』として、トレーニングや勉強会、懇親会をしました。この合宿の結果、選手の仲間意識が生まれてお互い連絡を取るようになり、バンクーバーでも選手同士が励まし合う雰囲気が生まれました。

私もバンクーバー入りしてから、選手村のレストランなどで選手と会う時間をできる限り持って溶け込むようにしましたし、『チームジャパンのみんなでメダルを獲るんだ！』と、一丸になっているのが実感できました。その一体感は選手にとって心強いものだったと思います。

4年後のソチ大会に向けても、1年に1度でも冬の各競技団体のナショナルチームが一堂に会する機会をつくるべきだと思います」

団長として経験したオリンピックは、改めてオリンピアンの世界を感じる場になったという。

「私にとって、今回は本当の意味でのオリンピアンについて、改めて考える機会となりました。

私は小さい頃からオリンピックが大好きで、中学時代にオリンピック憲章に触れ感動しました。オリンピック憲章には、『オリンピズムとは人生哲学であり、肉体と意志と知性の資質を高めて融合させた、均衡のとれた総体としての人間を目指すもの』とあります。

つまり、人間という生き物は争うことから逃れられない性質を持っているけれど、血を流すのではなく、汗と涙を流して肉体と精神を作り上げていこうという思いが込められているのです。さらにオリンピズムの求めるものは『努力のうちに見出される喜び、よい手本となる教育的価値、普遍的・基本的・論理的諸原則の尊重などに基づいた生き方の創造』とあります。つまり、オリンピアンには夢や感動を与える力だけでなく、それを与えられた子どもたちが自分たちの生き方さえも変えるほどの教育的力があると言っているんです。

開会式でのIOCロゲ会長の『責任なくして栄光はない』という言葉に、すべてが凝縮されていると痛感させられました。だからこそオリンピアンはロールモデルとして、誇り高く謙虚な人間になり得るのではないでしょうか。その言葉を胸に、選手が真摯に競技に取り組む姿を見て、本当の意味でオリンピアンの世界を知りました」

団長として軸足にあったものは、選手を守ることだった。

「団長としてどんなことがあっても選手を守るという事も大事にしていました。選手を叱咤することも守ることに繋がっていると思っていますから、分からない選手には、なぜそれではダメなのかを教える厳しさも必要です。努力をしたいという我がまま

橋本聖子

日本代表選手団　団長

『チームジャパンみんなでメダルを獲る』という一体感を感じられた。

応援に訪れた競技場では、役員同士、また選手とも抱き合うシーンが何度も見られた

photo by AFLO

PART 1

photo by PHOTO KISHIMOTO

「責任なくして栄光はない」。オリンピアンは、誇り高く謙虚な人間になってこそ、子どもたちへの教育的な力がある。

ならば良いけれど、そうではない我がままは絶対に許してはなりません。厳しく言う勇気と、どんなことがあっても選手を守るという決意で、団長を務めました」

観戦中には、何度も役員と、そして選手と抱き合う姿が見られた。

「ついつい選手や役員と抱き合っていました。やはりオリンピックという舞台では、言葉よりも体からにじみ出るものがあると思いますし、抱き合うことで頑張りを確認し合えます。帰国した後も、選手や役員と久しぶりに会うと、自然と抱きしめてしまって、一般の方から不思議そうに見られる時もありますね（笑）」

韓国の躍進は、橋本団長をいい意味で刺激したという。

「韓国の躍進は脅威ではなく、日本もやればできるんだと思いました。身体的には日本人と変わらないのに、韓国の選手と日本の選手が全然違うのは〝目〟と〝体の中に詰まっている力強さ〟です。そこにこれからの課題があると感じました。

韓国の選手には、すべての競技において礼儀礼節が行き渡っていると感じています。もともと日本は、秘めたる思いを持つという国民性に強さがあったはず。チームジャパンとして、強い魂を取り戻す教育を示していく必要性を感じました」

4年後はソチ。アウェーをホームにすることが大切だと語る。

「次の冬季オリンピックの舞台はロシアのソチです。選手は4年に1回しかないオリンピックを、4年間毎日イメージして準備するわけです。だから競技役員、監督、コーチも毎日ソチをイメージしてやるべきことを考えなければ、次のメダルには繋がりません。選手のトレーニングと併せてソチという地域の研究をすることも必要だと思います。

例えば、チームジャパンで毎年ソチでの合宿ができれば素晴らしいでしょう。たとえ現地で日本食を料理しても、水はソチの水。4年前から、ソチの食材や水、空気を体に入れてあげることで、選手にはアウェーではなくホームの感覚でソチ冬季オリンピックに臨んでほしい。すべての人がこれ以上やることがないという状態になって初めて金メダルに繋がるのです。そうしないと100分の1秒の世界は縮まらないという思いを持ち、スタッフと選手が一体となって努力できるようにする事が、JOC理事としての私の仕事です」

photo by AFLO

橋本聖子
Seiko Hashimoto

1964年10月5日生まれ。北海道勇払郡早来町（現：安平町）出身。スピードスケート選手としてサラエボ、カルガリー、アルベールビル、リレハンメルと4度のオリンピックに出場。アルベールビルでは日本人女子史上初の冬季オリンピック銅メダル（スピードスケート女子1500m）を獲得。また、自転車競技でもソウル、バルセロナ、アトランタの各オリンピックに出場。男女を通じ日本初の夏冬オリンピック出場者である。また7度のオリンピック出場は日本最多記録。（財）日本スケート連盟会長、参議院議員。

Voice of Team Japan

ファギュアスケート
男子シングル　銅メダリスト

髙橋大輔

プレッシャーに勝つ、面白さと不安。自分を試し、何かを超えたい

photo by PHOTO KISHIMOTO/JOC

悪いことは次への階段、「怪我は必然だった」。

前回のトリノ大会では8位と実力を出し切れず、その2年後には男子シングル世界最高得点をマークしながらも、オフには右足膝をケガ。そこから1年半にわたる復活劇で、オリンピックの表彰台に立った。

「身体にとってはハードなことでした。けれどメンタルに関しては、2年前のオフはモチベーションが上がらず空回りしていたので、ケガをしたことでスケートを出来る喜びを感じオリンピックに行くことができたと思います。あの時は、3年間教わってきたコーチとの別れや新しい振付師を探したり、技術的にもやることが山積みで、頭が整理できず練習に身が入らなかった。身体が出来ていないのに試合が近づいて急に無理してのケガでした」

オリンピックに焦点を定め、手術して1シーズン欠場する道を選んだ。

「手術してもギリギリ間に合うタイミング。だから怪我も必然なんだと思うようにしました。悪いことは大抵、次に進むのに必要な場合が多いものですから」

リハビリでは、身体全体の改造に着手。その半面、これまでと身体感覚が変わってしまった。

「氷に乗ると何かが微妙に違う感覚になっていました。特にジャンプは、長年毎日やって身体に染み込ませていた感覚があって、『行ってしまえ』という思い切りが僕の成功パターンでした。でも今度はすごく神経を使って、もっと前とか後ろとか考え失敗するようになったんです」

シーズン前半は思うような結果が出ない日々が続いた。

「何があっても経験だと思うようにしようと言い聞かせていました。でも一番焦ったのは試合前のアップのとき。試合の時だけ特有のすごく身体が動いて軽くなる感覚があるはずなのに、そうならない。でも、12月の全日本選手権フリースケーティングでやっとその感覚が出たんです。『ああ、これ』って。やっと自分の感覚が戻ってきた瞬間でした。オリンピックも世界選手権もその感覚が出来て、楽しく滑ることができました」

一方、オリンピックに向けて結成した、各方面の専門家による〝チーム髙橋〟も、仕上がりつつあった。

「この1年はリハビリからしっかり身体を作って、栄養士や技術コーチ、トレーナー、専門の方が集まったチームを組みました。このチームが暗黙の了解で動けるような結束力は、ちょうどオリンピックに間に合うように出来たという感じでした。ニコライ・モロゾフコーチに教わっていた時は彼の指示にみんなが合わせて動いていたのですが、今度は自分が最初に意思を決めて、それで回りが動いてくれる。自分の発言や行動に責任がある立場

表彰式から一夜明け会見。次世代を担う小塚崇彦選手と織田信成選手にメダルを見せる

点数を待つキス&クライで。長光歌子コーチは、恩師であり第二の母のような存在

PART 2

やっと自分の感覚が戻って「ああ、これこれ」って！嬉しくなりました。

になって、人任せじゃなくなった事は何かに影響したかもしれませんね」

そして迎えたオリンピックの舞台。何を感じて氷上に立ったのか。

「トリノのリベンジでもないし、オリンピックに出られた喜びでもない。このプレッシャーに勝てるのかという面白さと不安がありました。自分を試したい、何かを超えたいと。もちろん、目指していたのはトップ。3位を目指していたら5番、6番になるもの。だから『表彰台に立つぞ』ではなく『表彰台に立った』というイメージで練習しました。でもバンクーバーで公式練習が始まったらみんなの調子も良くて『ああ、自分も調子合わせてきたけど、みんなもちゃんとやってきたんだ』って。正直、現実的にはメダルは厳しいなと思いました。だから、もう自分のやりたいことをやる。自然体で行こうとかえって思えました」

ショートプログラム「eye」、フリースケーティング「道」、共に納得いくプログラムに仕上がった。

「僕は、音楽のイメージを感じ取って、それを表現するタイプ。『eye』は昔からやりたかった曲だったので世界観に入り込めましたし、映画『道』も切ない暗さが共感できる曲。ステップのところは（道化師らしい）明るい音調になるけれど、その裏にある哀愁とかが感じられるメロディで、それを表現したつもりです」

フリースケーティングでは4回転ジャンプに挑戦し渾身の演技だった。

「4回転ジャンプは、自分は（ケガの前は）出来たという気持ちがあったので挑戦しました。メダルを獲れたことは嬉しいですが、演技内容は満足いくものではなかったので、悔しさと嬉しさが入り交じる気持ちでした。オリンピック後に引退と決めていたのですが、やっと自分という感覚が取り戻せて、楽しくなって来たところです。だからイキイキしているスケートが一番伝えられる状況である限り続けていきたいと思い直しました」

最後の舞台と決めていたはずのオリンピックは、むしろスケートの魅力を再認識する場所になった。

「オリンピックは本当に国がひとつになる。メディアもみな取り上げて、街にも国旗が溢れて、日本人が勝ったら『僕、日本人なんです』って言いたくなる。そういう力があると思うんです。テレビを見る側だった頃は元気をもらいましたし、今回は一体感と誇りを感じることが出来ました。それにスポーツは、目標を達成出来ても出来なくても、試合の時の究極の緊張感や集中を体験する、そのプロセスは人生で生きてくる。僕も、何があっても『死ぬわけじゃないし』て思って前に進めるようになりました(笑)。だからもっとスポーツの魅力が伝わるように、国や色々な方々から更なるサポートをいただいて、日本全体が盛り上がっていけばいいなと感じました」

これまでは、いちアスリートとしてスケートを見てきた。しかしこの1年で考え方は変化した。

「ここ1年は引退後のことを考えながら練習していました。実は結局まだ、やりたいことはみつかっていません。ただ、『繋ぐ』ということを考えるようになりました。まだスケートの人気が今ほど無かった頃も知っているので、こうやって注目される事は幸せだと分かっています。でも成績を出して繋いでいかないと注目は途切れてしまい次世代の選手は辛いことになる。だから繋げるために、僕は成績を残していきたいですし、スケートに憧れる子供達をもっと増やしたいです」

オリンピックの魅力を、そしてフィギュアスケートの楽しさを次世代に繋ぐために。高橋選手は新たなステップを踏み出した。

高橋大輔
Daisuke Takahashi

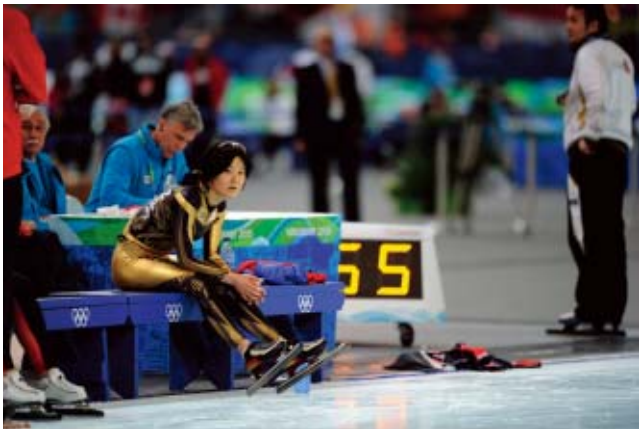
1986年3月16日生まれ。岡山県倉敷市出身。2002年世界ジュニア選手権で日本人として初めて優勝。世界に認められたのは2005/2006シーズンから。グランプリファイナルで日本人男子初の表彰台を経験しトップグループ入り。トリノ冬季オリンピックで8位入賞、2006/2007シーズンには世界選手権銀メダル。ところが負傷により2008/2009シーズンを棒に振ることに。2009/2010シーズンに完全復活。バンクーバー冬季オリンピックで日本人男子初のメダルを獲得。世界選手権では日本人男子初の世界王者となった。

Voice of Team Japan

スピードスケート　チームパシュート●銀メダリスト

田畑真紀

氷に立てることの幸せを再び感じることができたレース。



4度のオリンピックに出場している田畑選手。その経験値は、チームパシュートの際に他の2選手にとっても心強いものだった

一人だとフルスイングしちゃって空周り、でも仲間がいることで冷静になれる。

4回目のオリンピックを田畑真紀選手は、初めて思い残すものもなく迎えられた。自分のオリンピックへ懸ける思い、求めているもの。すべてをクリアにして臨めたという。

「今までのオリンピックを振り返ると、みんなフルスイングをしていたんですね。『ここまでやったんだから力を残したくない。全力だ!』って感じで。特に1500mに関しては思い入れが強かったけど、他の種目でも周りの期待を感じるとそうなってしまって…。だから今回は、フルスイングしないでいこうと思っていたんです」

2002年ソルトレークシティー大会は、前年に1500mで世界記録に迫るタイムを出していたにもかかわらず本番では力を発揮できないまま終わり、精神面での成長が必要だと感じた。そしてトリノ大会は、シーズン前のケガで出遅れた。それから4年を経ての今季。3000mと1000mの不調が、逆に幸いしたという。

「開幕戦の3000mで失敗してワールドカップ出場権を取れなかった上に、オリンピックの最終選考会では1000mも失敗。それが1500mだけに集中するきっかけになったんです。私は欲張りだから、そういう状況がないと種目を絞り切れないんですね。これしかないという方が自分は力を出せるタイプというか。だから、精神的に万全な態勢でバンクーバーに入ることができて、公式練習ではかってない絶好調でした」

公式練習のラップタイムで組み立てれば、1分54～55秒という、標高が高くスピードの出やすいカルガリー並みの記録が出ていた。

「羽田雅樹コーチも『速すぎる』と言って、本番では、1分56秒中盤から57秒台頭の抑え気味のラップを設定していました」

ところが2月21日の1500mは、2分00秒12で19位と惨敗した。

「本番は『何が起こったんだろう?』と思うくらいにひどくなっちゃたんです。もう落ち込むしかなかったです。結果を出すことを前提でたくさんの人のお世話になっていたし、わがままを言わせてもらってトレーニングをしてきましたから。そこで結果を出せなかったというのは、スケート人生の中で一番悔しかったし、悲しかった…」

選手村へ帰るといても立ってもいられなくなり、1時間ほど外の川辺を、目的もなしに走り続けた。

「その時、いつもメンタルトレーニングでお世話になっている先生に『ダメでした。悔しいです』と電話したんです。そうしたら先生が、『オリンピックでは出る人の99%が悔しい思いをして、1%の人だけが喜べるんだ。でもあなたにはまだ1%の可能性が残っている』と言ってくれて。それで『アレッ、その1%ってパシュートなのかな』と思ったんです」

冷静になると、スケートを始めた子どものころを思い出した。

「小学1年の時、地元に氷上祭というのがあって、そこで優勝して金メダルをもらってから、『毎年メダルが欲しい』って思ったのが選手生活のスタート。でも翌年は個人種目では転倒してしまって、リレーの方でメダルをもらえたんです。それがすごく嬉しかったことを思い出して…。そしたら、私にはまだチャンスが残っているって、気持ちを切り替えられたんです」

2日間氷を離れ、ひたすら自分のスケートについて考えた。

「3日ぶりにリンクへ行って氷に上がった時に、すごく嬉しかったんです。長野のオリンピックは、代表に選ばれながらも直前に骨折して出場できなくて。その後、久しぶりに氷に乗った時にスケートを滑れるだけですごく嬉しかったことがあって、その時の感覚に、『アッ似てる』と思いました。それに、すでに個人種目で金メダルを獲った選手たちも、みんな3月のワールドカップへ向けて練習をしているのを見て、『やっぱりみんなスケートが好きなんだな』と思ったら、励まされました」

26日からのパシュートは、新鮮な思いを持って臨めた。準々決勝こそ、個人種目の失敗レースを思い出して緊張したが、それを察した小平奈緒選手が無言で握り拳を突き出してくれ、それを自分の拳でガツンと突くと緊張感は一気に無くなった。

photo by PHOTO KISHIMOTO/JOC

PART 3

子どもの頃、リレーでメダルを獲ったことを思い出して「そうだパシュートがまだある！」って。

「一緒に滑る仲間がいたことで、変なフルスイングがなくて冷静に滑ることができました。でも2日目の準決勝はヒヤッとしましたね。決勝に脚を残しておこうと、余裕を持って勝てる相手なら力を使い切らないでおこうとして…。勝っているから大丈夫だと思ったら、ゴール寸前のコーナーを抜けた時は同じくらいのタイム。ゴール後は『まさか負けてないよね』と焦りましたよ」

決勝は、緊張より気合が勝った。対戦相手はトリノ大会優勝のドイツだったからだ。しかも、コーナーのポイントを蹴ってしまえば失格になるため、メダルが確定したという安心感もなかった。

「残り2周で1秒72リードしたから、滑りながら『やばい、金獲っちゃうじゃない』と思いましたね。でもそこが落とし穴なんですね」

結果は、0秒02差で2位。

「負けが分かった瞬間は、もちろん悔しかったです。でもすぐに、1500mの失敗後に知人が送ってきたメールの『悔しくても、今まで頑張ってきた自分を褒めてあげなさい』という言葉を思い出したんです。勝負である限り勝ち負けがあるのは当たり前。0秒02差という勝負ができたのは、自分たちの力を出し切り、互いが信頼し合ってレースができたからだなと。だから後輩たちにも、それが出来た自分を褒めてもらいたいと思って、私が真っ先に喜んだんです。個人で獲るより嬉しい気持ちになりました」

世界ランキング上位の選手がいないチームでも、メダルを獲る可能性があるチームパシュート。田畑選手はこの種目の面白さを、あらためて伝えることができたと喜ぶ。

「嬉しさと悔しさはまだ半分ずつ。みんなが喜んでくれているシーンが入っている日本のテレビ映像は見返しても嬉しいのですが、レースだけの映像を見るともう悔しさが先行して見られないです」

彼女の勝負師魂の火は、まだ消えていない。

「短距離ではなく、日本人が獲っていない中・長距離で金メダルを狙うからこそワクワクするし、新たな道を切り開いていけるから面白い」

念願のメダルは手にしたが、個人のメダルという宿題は残った。その宿題をどうするのか。結論は、まだ出していない。

田畑真紀
Maki Tabata

1974年11月9日生まれ。北海道勇払郡出身。1994年リレハンメル冬季オリンピック出場。1998年長野大会は代表に選ばれるも直前に左足首を骨折し棄権。2002年ソルトレークシティー大会、2006年トリノ大会に続き、オリンピック4回出場。1500mを主軸に、1000mから3000mまで世界トップレベルを誇る。1500m日本女子記録保持者。バンクーバー大会では、1500m19位になるも、チームパシュートで小平奈緒、穂積雅子とともに銀メダルを獲得。35歳でのメダル獲得は、日本人選手の冬季オリンピック史上最年長記録。

日本代表選手団 フィギュアスケートコーチ

佐藤信夫

指導法を確立するだけではない。どうやって伝えるかを考える。

親よりも長い時間一緒にいる、だからこそ人間教育の場でもある。

基礎を徹底した指導法、生き方をも含めて指導する人間力が買われ、2009年にアジア人コーチ初のフィギュアスケート殿堂入り。世界が認める一流の指導法とは何か。

「教えている基礎技術は誰に対しても同じです。ただ、その教え方、伝え方は、相手によって、また時代によって変わってきました。選手への伝え方、かける言葉はとても重要です。若い頃は熱血指導と言われて、空回りの失敗といえる指導法もたくさんありました。もちろん今でも年に数回、怒鳴ります。途中で投げ出してしまうような子には、めいっぱい怒りますよ。一方で、小塚崇彦選手のように大人になる時期の選手には、頭の中で噛み砕いてから伝え、選手が自分で耐えながら答えを出せるようにするのも大切です」

有名選手を指導する一方で、スケートを始めたばかりの小さな子どもとの時間も大切にしている。

「1日5〜6時間。私は生徒にとってお父さんよりも長い時間接している相手なんです。引退後も第二の父のように慕ってくれる生徒も多いですし、やはり人間教育をしなければならないと痛感しています。ではどんな人間に成長してほしいか。実は、『この子は将来どうなるんだろう』というような目立つ性格の子でも、それを良い個性として残していくと成績を上げて、最終的には素晴らしい人間になっていくものです。相手は生きているわけですし、指導法に答えはありません。コーチ側も日々成長しなければと思います」

佐藤コーチの選手時代の経験は、どう指導につながっているのか。

「スケートを始めたのは戦後間もなく、日本国内で青少年の遊び場としてのスケート場が再建設された頃です。海外からの情報が閉ざされていましたから、日本は2回転ジャンプが最高。ところが、海外ではディック・バトン選手（アメリカ）が3回転ジャンプを何種類も跳び、3回転時代が到来していました。忘れもしない、スケートを始めて3年目の夏。先生が『3回転ジャンプをやれ』と言うんです。見たこともないものをどうやったら跳べるのか？　手を締めれば良いと言われてやりましたが、ただ怖くって、当然転びました」

海外からの情報がほとんどない時代。試行錯誤しながら技術を磨いていった。

「当時はビデオなどもありませんから、年に1回アメリカから来るアイスショーを観て、その写真をパラパラ漫画に繋いでお手本にするんです。とにかくアメリカを模倣することに熱中していました。でも、家の形を見て、柱を想像するようなもの。基礎が分からない。初の国際大会はオリンピックでしたが、ただ緊張して、ジャンプも何度も転んだのを憶えています。挑戦して壁に当たって悩んで。その連続の中で答えを探しました」

1965年世界選手権でアジア人初の4位と記録を残し、その後引退。指導者の道を選ぶ。

「コーチとして駆け出しだった頃、札幌冬季オリンピックが行われるということで、日本スケート連盟がその前年に、スイスからアーノルド・ゲルシュイラー氏という有名なコーチを招聘（へい）しました。ひと夏、つきっきりで指導法を学んだのですが、新しいことの連続で頭が混乱してしまったんです。それまでアメリカをコピーする練習法でしたが、フィギュアスケート発祥の地であるヨーロッパのスタイルとは基礎が違うのです。何が正しいのか分からなくなりました。しかもゲルシュイラー氏は心理学も取り入れている人で、これも混乱のもとでした。

結局、自分の指導は、遠回りをしながら、変遷してきました。そのおかげで北米とヨーロッパの良いところを合わせることができましたし、選手時代と同じように、手探りで進んだ結果、技術論が確立できたと思います」

北米とヨーロッパの情報が交差し合う時代を迎え、佐藤コーチにはひとつの技術論がまとまった。

「指導法には答えがないですが、教えている技術は一貫しているつもりです。あるレベルより上になると、ジャンプだけでなく滑りを持っている人が結局は上回る。良いスケートができない

photo by AFLO

日本人初の3回転ジャンパーとして、高い技術力を世界に示した

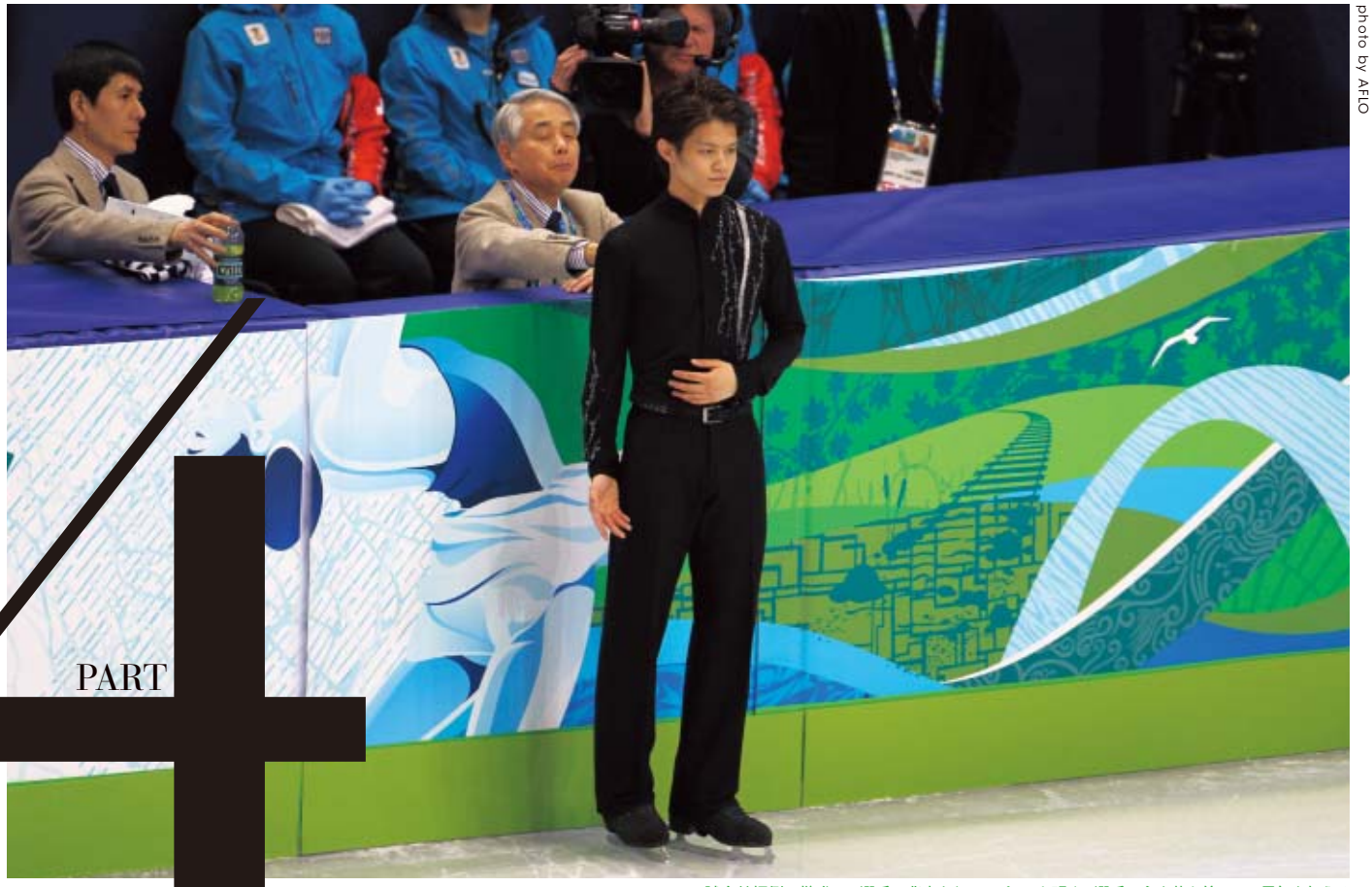


photo by AFLO

試合前恒例の儀式は、選手の背中をなでてポンッと叩く。選手の心を落ち着かせ、勇気を与える

PART 4

今でも悩み迷う日々、指導に答えはない。

と限界があるから、素直なスケートや正しいエッジワークを辛抱強く、ジャンプと並行して教えるのが私の指導法です。もちろん、違う考え方のコーチが教えた選手がチャンピオンになることもあるので、他が間違っていると言うつもりはないです。他のコーチの子が先にジャンプを跳べるようになっても、最後にどこまで追いつき、越えられるかが、私の指導スタイルですね」

海外の練習環境を求める選手も多いなか、佐藤コーチのもとにはトップスケーターも多く集まる。

「昔は、日本は情報が遅れているために海外に行く選手がいましたが、今や、世界ジュニア選手権も世界選手権も男女の金メダルを日本が独占する時代。日本が遅れているとは誰も思っていません。ただ、練習環境という面では海外に分がある。リンクの数、指導者の数、振付師が充実している環境の方が、成長は早い。日本は滑る場所がないので、海外の滑り放題のリンクで毎日切磋琢磨されて、言葉の壁や食事の違いも受け入れれば海外練習もうまく行くでしょう」

環境が整わないと言われる日本から、世界トップ選手が多く出てきたのはなぜか。

「ここ4年間で、中京大と関西大が大学でリンクを作り、中京大のリンクはナショナルトレーニングセンターに指定されました。これは大きなこと。大学の選手は自由に氷に乗れるし、日本スケート連盟の強化選手にとっても練習場所が確保されたことが日本のフィギュアスケートのトップ選手を引き上げました。今回のオリンピックに出た男女のうち、小塚、浅田、安藤の3選手が中京大で、織田、高橋の2選手が関西大。鈴木選手も名古屋が拠点なので中京大のリンクに通えます。浅田選手は、毎日3回、1人だけの貸し切り練習をできる素晴らしい環境でした。それだけ環境が大切ということです。

これからは名古屋まで通えない選手、そしてもっと小さい子ども達が練習する環境が整っていけば、さらに日本は伸びる余地があるでしょう。スポーツは本来、環境に根付いて栄えるもの。寒い地域で氷があるとか、家の近所に屋内リンクがあって、自然と通えることが、競技の発展のために大切なんだと思います」

朝から夜まで毎日氷に乗り、選手の指導にあたる

佐藤信夫
Nobuo Sato

1942年1月3日生まれ。大阪府出身。1960年スコー・バレー冬季オリンピック、1964年インスブルック冬季オリンピックの男子シングル日本代表。日本人初の3回転ジャンプ成功者。1965年、世界選手権で東洋人男子初の4位入賞を果たす。引退後は指導者として、佐藤有香、荒川静香、安藤美姫、村主章枝、中野友加里、小塚崇彦らを育成する。久美子夫人もフィギュアスケートの元オリンピック選手でコーチ、娘の有香さんもプロフィギュアスケーター、コーチ、振付師と多岐にわたり活躍。

放送局などのオフィスが置かれたバンクーバーコンベンションセンター。緑化された屋上はサスティナビリティの象徴

サスティナブル・オリンピック

～未来へつながる大会を～

**世界一暮らしやすい街と言われるバンクーバー。
海と山を臨むその美しい街は、やはり、自然や文化、社会と融和した、
持続可能な（サスティナブル）オリンピックのあり方を模索し、ひとつのモデルケースを示した。**

「環境対策」、「経済貢献」、「社会貢献」が3つの柱

世界の頂点を目指すアスリートたちによる熱戦が繰り広げられたバンクーバー冬季オリンピック。実は、オリンピックは「スポーツ」だけなく、「文化」と「環境」を加えた3本柱をテーマとしている。今回のバンクーバー冬季オリンピックでも、数々の文化プログラムが行われたほか、「サスティナブル（持続可能な）オリンピック」を掲げて環境や社会に配慮したオリンピックのあり方が示された。

バンクーバー冬季オリンピック組織委員会（VANOC）のサスティナブル担当、アン・ダフィー氏は語る。

「まず私たちのオリンピックでのサスティナビリティを定義することから始まりました。そして、環境対策、社会貢献、経済貢献の3つの貢献を結合させたものと定義したのです」

そこで、都市部に住む先住民や低所得者層に対しても恩恵のあるオリンピックを目指した。先住民との融和を重要視し、また低所得者層の雇用機会を創出。こういった環境面以外の取り組みも、未来につながる恩恵と考えた。

ウィスラーの選手村。下水道の排水処理熱を電気に使うなど工夫が凝らされている

建築基準を設定

さらに環境対策については、様々な工夫を凝らした。

「まず設定したのは、新築する建物へのグリーンビルディングガイドラインです。屋上の緑化、廃熱の再利用システムなどの取り組みに応じてポイントが高まるシステム。義務ではありませんでしたが、新たに建築した全施設で基準をクリアしました」

新しい施設の中でもサスティナブルの象徴は、リッチモンドオーバルだ。

「これまで松くい虫の被害によって廃材となっていたパイン材を天井に使いました。廃材を利用しながらも美しい建物が建築できる事例を示したのです。また屋根を伝って溜められた雨水は、トイレの排

Team Japanのサポート拠点
「JOCジャパンハウス」

350人参加のレセプション、国際交流の場に

JOCバンクーバー本部として2月8日～28日、市内のホテル内に「JOCジャパンハウス」を設置。現地での統括拠点、またホスピタリティサービスや記者会見の場として活用した。

まず日本代表選手団の選手村外本部として情報やサポート体制を集約し、事務局を設置。またスポンサーや関係者へのホスピタリティサービス用に開かれたラウンジでは、日本食の提供や、日本代表選手団が出場する試合のテレビ放映が行われた。期間中は1600人を超える選手団関係者らが来場し、応援する人々で賑わった。

また記者会見場等では、期間中に15回の記者会見と、ブルガリア、オーストラリアとのパートナーNOC協定調印式を実施。試合前の決意表明のほか、全メダリスト、フィギュアスケートの男女シングル選手らの会見を行い、600人を超える報道関係者が集まり、世界にニュースを配信する情報拠点となった。

2月21日には、日本領事館と共催でレセプションを開催。27人のIOC委員をはじめ、国際競技連盟（IF）や在バンクーバーの日本人会のメンバーらが来場した。日本代表選手団からも、長島圭一郎、加藤条治、髙橋大輔選手ら37人が参加し、大会後半戦への思いを結集。集まった約350人の参加者らは、貴重な国際交流の場を楽しんだ。

（左）試合前会見やメダリスト会見が開かれ、選手や役員らが胸のうちを語った（下）ラウンジのテレビでは日本代表選手団の映像が放映され、関係者らが応援に集った

スピードスケート会場となったリッチモンドオーバル。天井に注目

（上）アン・ダフィー氏（左）開会の瞬間のカウントダウンクロック。この後カウントは増え未来へつながっていく

意識を持ち、何をすべきかが分かり、そして誇りを持つことが出来る

水やガーデニアの水として再利用。さらにオリンピック終了後、この会場はバスケットボールなら8面、アイスホッケーなら2面といった多機能の運動施設となり、生涯スポーツの場として市民のレガシー（遺産）になるのです」

また、なるべく既存施設を再利用する、森林伐採のエリアを計画より小さくする、製氷の際の廃熱を電気や暖房に再利用できるよう旧施設も改修するなど、考え得るあらゆる工夫を凝らした。

企業・政府も巻き込む

一方、ハード面だけでなく、企業や政府を巻き込んだソフト面でのサスティナビリティにも取り組んだ。

「オリンピックのパートナー企業や政府、納品業者らもサスティナビリティの実行メンバーと考えました。環境保護などの基準を作り、それを実行した企業や組織に対して『サスティナビリティスター』を与え表彰したのです。その結果、62のスターズが生まれました」

例えば、コカ・コーラ社は、ペットボトルを再利用して従業員の制服を作るなどのカーボンオフセット（二酸化炭素相殺）に取り組み、オリンピック大会期間中に消費される、ほぼ100％の容器を回収しリサイクルする計画を立て、スターを獲得。パナソニック社は、「エコなアイデア青少年ビデオコンテスト」を実施し、またエコ活動について紹介するイベント会場を設置するなどのムーブメント推進活動で、スターを獲得した。

ダフィー氏はこう結論する。

「大会期間を通してサスティナブル・オリンピックが実際に示されたことで、国民の意識が変わり、何をすべきか分かり、このオリンピックに誇りを持つことができた。それが私たちのゴールです」

VANOCがサスティナブル・オリンピックに取り組んでから7年。未来につながるオリンピックのひとつの形を世界に示したことで、その思いは結実した。

バンクーバー冬季パラリンピックは3月12日から21日まで、冬季大会史上最多の44カ国から約500人の選手が参加して行われた。選手41人、役員53人からなる日本選手団は、金3個を含む計11個のメダルを獲得し、前回トリノ大会の9個を上回る大健闘。アイススレッジホッケーで銀メダルに輝いた遠藤隆行主将が、最も印象的な活躍をした選手として「ファン・ヨン・デ功績賞」を受賞し閉会式で表彰されるなど、実りの多い大会となった。

バンクーバー冬季パラリンピック
X Paralympic Winter Games 2010

もう一つのチームジャパン、バンクーバーを席捲！

共同通信社　宮田 宏

4年に一度の障害者スポーツ冬の祭典は今回が第10回。バンクーバーでは、ソリに乗って両手にスティックを持ち得点を競う〝氷上の格闘技〟アイススレッジホッケーと、男女混合で争う車いすカーリング、さらにウィスラーではアルペンスキー、クロスカントリースキー、バイアスロンの計5競技、64種目が実施された。スキー系は立位、座位、視覚障害に分かれ、障害の程度に応じた係数をタイムに掛けて争う。車いすカーリングは氷面をこするスイーピングがないなどの特色がある。

以前は障害者のリハビリ的な面が強かったが、近年は競技志向への流れが強まっている。今回の象徴的な存在はクロスカントリースキーのブライアン・マッキーバー選手(カナダ)。重度の視覚障害を持つマッキーバー選手はバンクーバー冬季オリンピック代表にも選ばれていた。パラリンピック経験者がオリンピック代表となるのは冬季では初の快挙で、パラリンピックのレベルの高さの証明になった。オリンピックでは出場機会こそなかったが、今大会で3冠に輝いた。

入場券は冬季最多の23万枚に

「世界で最も住みやすい街」バンクーバーは「世界一、障害者に優しい都市」のひとつでもある。至る所でバリアフリー化が進み、大会中は車いすに乗った各国の選手、役員が自由に街を行き来する姿も目立った。前バンクーバー市長のサム・サリバン氏も車いすの使用者。車いすで地球一周したリック・ハンセン氏はバンクーバーオリンピックの選手村村長を務めた。社会的な理解が高く、多くの日本選手が「人びとが障害者に優しい」と感心する。国際パラリンピック委員会(IPC)によると入場券販売は冬季大会最多の約23万枚にのぼった。

オリンピックとパラリンピックが同一都市で開かれるようになったのは、冬季では1992年アルベールビル大会から。かつてはオリンピックとは別の組織委員会により運営されてきたが、2002年ソルトレークシティー大会からはオリンピック組織委と正式な連携がとられるようになった。IPCのフィリップ・クレーブン会長によると、これまではIPC側の働き掛けによりオリンピック組織委員会がパラリンピックの運営にかかわっていたが、バンクーバー大会では自発的に取り組んだ初のケースとして「今後はバンクーバーのやり方が基準になる」と評価した。

メダル11個、歴史的な快挙も

今大会最大のサプライズはアイススレッジホッケー準決勝で日本が2連覇を狙ったカナダを3−1で破ったことだろう。アイスホッケーを国技とするカナダはオリンピックの男女に続く「3冠」を狙ったが、GK永瀬充選手の再三の好守、FW上原大祐選手の勝ち越し点で夢を砕いた。決勝では09年世界選手権の覇者アメリカに屈したが、銀メダルは歴史的な快挙。開会式旗手の遠藤選手は「カナダで強い日本を見せられて誇りに思う。パラリンピックを機に、この競技の面白さが日本の人に伝わったらうれしい」と誇らしげに語った。

クロスカントリースキー男子立位の新田佳浩選手は2冠を達成し、日本代表選手団主将の責任を果たした。3歳で祖父、達さんが運転するコンバインに巻き込まれ、左前腕を失った。10kmクラシカルで日本に今大会初の金メダルをもたらすと、92歳の今まで責任を感じ続ける岡山の祖父を思い、「やっぱり最初は、じいちゃんに触らせてやりたい」と笑顔。21日の最終日には1kmスプリントを制し、大会を締めくくった。

photo by AFLO

またクロスカントリースキー女子立位でも、20歳の太田渉子選手が1kmスプリントで銀メダル。トリノ大会のバイアスロン銅メダルに続く2大会連続のメダルを手にした。

一方、悪天候で大幅な日程変更があったアルペンスキーでは目標の10個には及ばなかったものの7個のメダルを獲得した。男子スーパー大回転で狩野亮選手が、果敢に攻める滑りで金メダル。小学校3年生のときの交通事故で両脚の機能を失った24歳。アルペンの高速系種目で日本男子が頂点に立つのは初の快挙だ。滑降でも銅メダルを獲得し、閉会式では日本代表選手団の旗手も務めた。「夢のような時間だった」と言う一方で「技術はまだまだ未熟で勉強することが多い。4年後はさらに強い選手になりたい」と成長を期す。また森井大輝選手が男子滑降で銀メダル、スーパー大回転では銅メダルと、狩野選手とともに2度の表彰台に立った。男子大回転では鈴木猛史選手が銅メダルを得た。得意の回転で15位に終わった雪辱を果たし「ほかの大会とは比べものにならないほど重い」と感激した。

5大会連続出場と経験豊富な大日方邦子選手は、安定した滑りで回転、大回転で銅メダルを獲得した。これで通算メダル数は、冬季では日本人最高の10個に達した。上乗せを狙った滑降で転倒して首などを痛め、残る2種目は欠場した。37歳で臨んだ今大会を最後に第一線から退く意向でいたが「不完全燃焼。今後は白紙」と揺れる思いを口にした。

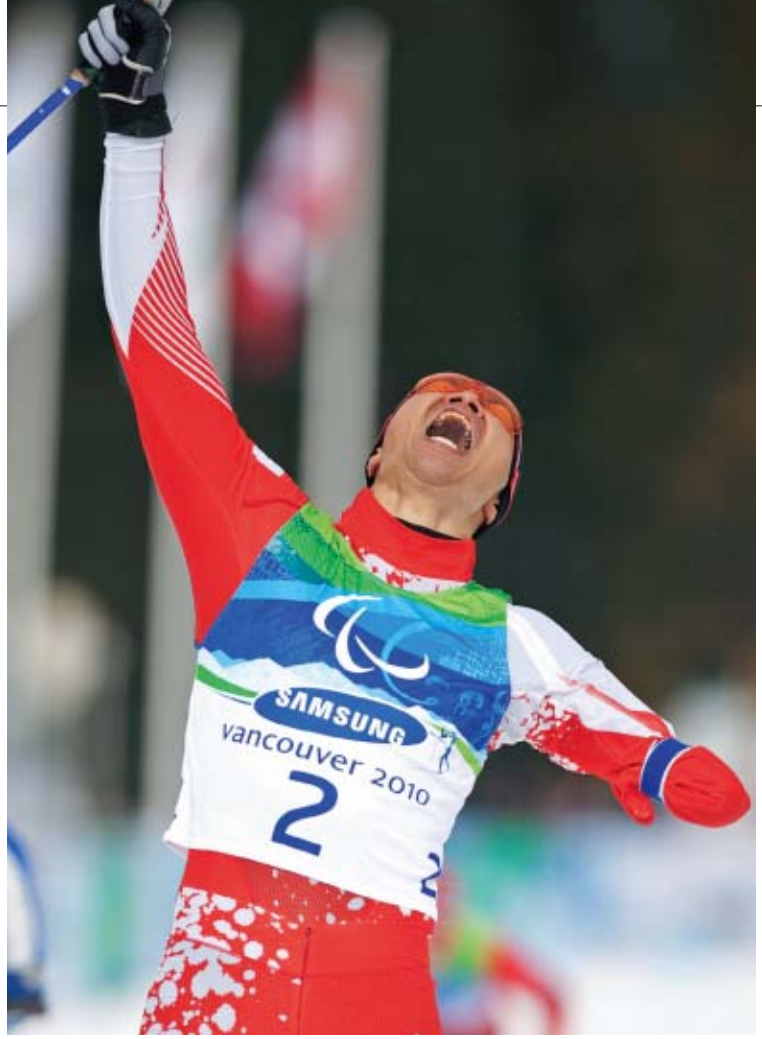
初出場の車いすカーリングは日本史上最年長、75歳の比田井隆選手が話題に。成績は3勝ながら最下位の10位で、他国との経験の差がソチパラリンピックへの課題となった。

●日本チームメダリスト、表彰者一覧

●金メダル（3個）	
狩野　亮	（アルペンスキー男子／スーパー大回転座位）
新田佳浩	（クロスカントリースキー男子／10kmクラシカル立位）
新田佳浩	（クロスカントリースキー男子／1kmスプリント立位）
●銀メダル（3個）	
森井大輝	（アルペンスキー男子／滑降座位）
アイススレッジホッケー日本代表チーム	（アイススレッジホッケー）
太田渉子	（クロスカントリースキー女子／ 1km スプリント立位）
●銅メダル（5個）	
大日方邦子	（アルペンスキー女子／回転座位）
大日方邦子	（アルペンスキー女子／大回転座位）
鈴木猛史	（アルペンスキー男子／大回転座位）
狩野　亮	（アルペンスキー男子／滑降座位）
森井大輝	（アルペンスキー男子／スーパー大回転座位）
●ファン・ヨン・デ功績賞　遠藤隆行	（アイススレッジホッケー主将）

滑降座位で狩野亮選手（左）が銅、森井大輝選手（右）が銀を獲得

男子大回転座位銅の鈴木猛史選手はスーパー大回転、スーパーコンビでも入賞

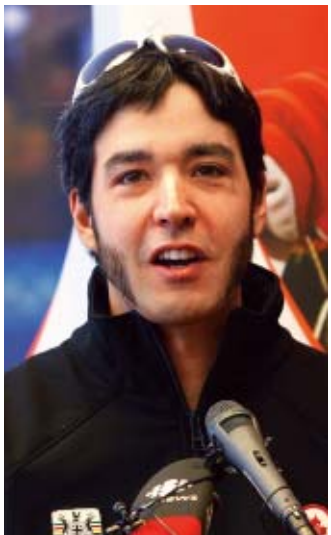


日本選手団主将の新田佳浩選手は、パラリンピックへの4度目の挑戦で2つの金メダルを手に

悲願のメダルを掴み取ったアイススレッジホッケーチーム。その全員が、最高の笑顔をみせた

大日方邦子選手は日本人初の冬季パラリンピック金メダリストでもある（長野大会）

（右）太田渉子選手は日本の女子で最高成績
（上）バンクーバーオリンピックでは、かつてパラリンピック選手だったリック・ハンセン氏が選手村村長を務めた



マッキーバー選手の快挙は多くのパラリンピック選手達に希望を与えた

The Conference for Building up Team JAPAN

【バンクーバー対策プロジェクト】JOC初の合同合宿

集まれ、戦え、チームジャパン!!

昨年、JOCは初の試みとなる冬季全競技のオリンピック代表候補選手やそのスタッフを集めた“合同合宿”を実施した。バンクーバー冬季オリンピックを控えて、この試みの意図はどこにあったのか、その成果をどう捉えているのか、あらためて検証する。

冬季全競技のオリンピック代表候補選手、スタッフを集めての「The Conference for Building up Team JAPAN」と題した合同合宿が行われたのは、2009年5月8日～10日、6月5日～7日の計2回、各3日間のことだった。

参加人数は第1回が選手87名、スタッフ63名、第2回が選手80名、スタッフ56名。トレーニングなどの都合で一部欠席者もいたが、大規模なものとなった。推進役の一人が、バンクーバー対策プロジェクト副委員長を務め、バンクーバー冬季オリンピックでは日本代表選手団の総監督を務めた鈴木惠一氏である。

バンクーバー冬季オリンピックが行われるシーズン開幕を前に、こうしたカンファレンスを行った目的について鈴木氏は、「オリンピックで戦うために、文字通り『チームジャパンになること』にあった」と語る。

その理由をこう説明する。

「簡単に言えば、火事場の馬鹿力が欲しいということです。競技中、ちょっとでも気が抜ければタイムは落ちるものです。その時バックアップとなるのが、皆の声援であり、火事場の馬鹿力を出す要因でもある。それに、オリンピックのような場所では、一人で戦ってもどうにもならないことがありますが、そ↘

6月のカンファレンスに参加した選手、関係者。それぞれの笑顔がこの合宿の意義を物語っている

photo by PHOTO KISHIMOTO/JOC

ういう時こそ皆の力を団結することが必要となります。そのためにはやっぱり『チームジャパン』にならなければいけない。じゃあどうしたら、本当のチームになれるのかと考え続けて、とにかく競技の垣根を越えて、全員が一堂に会してのカンファレンスをやりたい、というところに辿り着いたんですね」

味の素ナショナルトレーニングセンターで開催されたカンファレンスで、選手やスタッフは、用意されたカリキュラムをこなしていった。

カリキュラムの柱の一つとなったのは、異分野から日本を代表する講師を招いての講義である。

例えば5月のカンファレンスでは、脳の働きから能力を最大限に発揮する研究などで知られる日本大学大学院総合科学研究科生命科学専攻教授の林成之氏による「勝負脳の鍛え方」と題した講義が行われた。

6月には、メンタルトレーニングの第一人者として知られる福島大学人間発達文化学類教授の白石豊氏による「プレッシャーとどう戦うか」、棋士の羽生善治氏による「決断力」といった講義が行われた。

「カンファレンスでテーマとしていたのは『軸』ですね。具体的には精神面の柱となる軸です」

参加者は、大部屋で寝食をともにしながら各3日間を過ごした。「高校時代以来ですね」とはじめは戸惑いを見せる選手もいたが、講義などのカリキュラムをこなし、時間をともにする中で、垣根を取り払っていった。

「選手同士が友達感覚で交流を深めていきましたし、コーチはコーチで、こういう指導の仕方もあるんだ、とお互いに情報を交換して共有することができた。あのように関係を築くところを見ると、やはり皆アスリートなんだなと実感しました」

講義や競技の垣根を越えた交流とともに、カンファレンスで鈴木氏が重視したのは↖

彼らに戦う姿勢を植えつけることだった。

「もちろん、お互いに仲良くなるという意味もありましたが、それよりも、考え方を変えて欲しかった。オリンピックは代表になって出ることだけじゃなく、勝つことが大前提なんです。そして試合もそうですが、トレーニングをするにしても強い気持ちが必要です。強い者しか生きられない世界なんだということを分かって欲しかった」

チームジャパンにとって必要なこととは？

5月のカンファレンスの最初の挨拶で、鈴木氏は選手たちに語りかけた。いや、檄を飛ばした。

「これから、バンクーバーへ向けてカンファレンスをやるが、強制で参加させられている、と感じている者もいるかもしれない。強制されて来ていると思うなら、ドアを開けておくから出て行ってくれて構わない。オリンピックで勝ちたいと思う選手だけが必要なんだ。行くだけではダメだ。トリノを思い出してくれ。スピードスケートを例に言えば惨敗という言葉をもらった。ほかのNF（競技団体）もそうだろう。皆それを受け止めないといけない。跳ね返すには『チームジャパン』が、ひとつになるのが大事なんだ」

勝たなければいけない、という方針は、バンクーバーオリンピックの期間中、貫かれた。

ちなみに、6月のカンファレンスに講師として参加したアテネオリンピック陸上競技4×100mリレー銅メダリストの朝原宣治氏は、「夏の競技もできたらいいなあ」と感想をもらしたという。

このように行われたカンファレンスの成果を、今、どう捉えているか。すると、鈴木氏はこんな話をした。

「競技の終わった選手が、他の競技の応援に行くこともあれば、駆けつけることができなくても、選手村で『頑張れよ』と激励することもあったと聞きます。競技にかかわらず、応援する気持ちを持てたということは大きかったし、選手村で生活を共にする仲間が声を掛け合うことが大切なことではないでしょうか。また、トリノでは1個しかなかったメダルが5個になり、入賞の数も21から26に増えた。これはカンファレンスを行ったことへの、ひとつの答えだと思います」

結果からしても、初めての試みは、少なからず功を奏した。今後は、このカンファレンスを夏季競技の選手に対してどんな形で行うか、そしてカンファレンス内容をどう充実させていくかが求められるだろう。

垣根を越えた交流と、勝つ姿勢の共有

鈴木惠一（すずきけいいち）
バンクーバー対策プロジェクト副委員長／バンクーバー冬季オリンピック日本代表選手団総監督

羽生氏の「決断力」から得られたものも少なくない

「勝負脳の鍛え方」をテーマに講義する林氏

朝原氏の講義に、どの選手も興味津々の様子

柔道の塚田真希選手も講師のひとりだった

競技の枠を越えた交流が積極的に行われた

携帯電話番号を交換するシーンもみられた

ラジオで感じるスポーツの躍動感

「MY OLYMPIC」の11年を振り返る

1999年4月から始まったJOC企画のラジオ番組「MY OLYMPIC」は、6度のオリンピックを見てきた長寿番組。アスリートの素顔を引き出し、意外な本音や感動の秘話を届けてきたのは、案内役の蒲田健さんだ。蒲田さんが肌身で感じてきたオリンピック、そしてアスリートの魅力とは…!?

【番組の案内役として】

月曜から金曜まで毎朝、ラジオから聴こえてくるフレーズがある。

「マイオリンピック！　さまざまなスポーツを舞台に選手たちのリアルな鼓動をお届けするマイオリンピック。蒲田健です」

10年以上、この元気な声で、スポーツの魅力を日本に伝えている。

◆　◆

――これまで何人のトップアスリートにお話を聞いたのでしょうか？

蒲田健さん（以下、蒲田）ほとんどのメダリストの方には出演していただいたといっても過言ではないでしょう。1999年に番組がスタートして、1週間に1人、オリンピック期間中には特別企画で多数出演していただくこともあるので、10年間で800人以上のゲストをお迎えしてきました。今後も、メダリストに限らずさまざまなアスリートにお越しいただき、お話を伺っていきたいですね。

最多出演の荒川さん 初回は緊張の面持ち

――何度も出演している方はいらっしゃいますか？

蒲田　過去最多は荒川静香さんだと思います。僕の記憶が正しければ5回出演しています。それから上村愛子さんには4回出ていただきました。

――それは蒲田さんの好みですか？

蒲田　もちろん僕の好みもありますが（笑）。例えば荒川さんが最初に出演したのはまだ早稲田大学の学生の時で、長野冬季オリンピックに出場したオリンピアンだけれど世界チャンピオンにもなっていない頃でした。その次は世界チャンピオンになる直前に四谷の談話室のような場所でインタビューしました。現場に自転車に乗ってきてくれた庶民的な荒川静香の時代ですね（笑）。そして、2004年に世界チャンピオンになった後と、トリノで金メダルを獲った後。最近では今年です。バンクーバー冬季オリンピック直前の特番に出ていただきました。

――5回の間に荒川さんは変わりましたか？

蒲田　むちゃくちゃ変わりましたね。最初の時はアスリートとしてほとんど初めてのインタビューで、「これで私もアスリートとして世に出ていくんだ」という緊張した面持ちで臨んだというような話をこの間話してくれました。今はもう何を聞いても求める以上の完璧な答えを出してくれます。もともと頭の良い方ですが、そこに風格が加わりました。

金メダル直後の録音を消去 井上康生選手に平謝り

――特に印象に残っている選手は誰ですか？

蒲田　2000年のシドニーオリンピックの際は現地取材のチャンスをいただきました。柔道が盛り上がった大会で、特に印象的だったのは井上康生さんですね。金メダルを獲った後にジャパンハウスでの祝勝会でインタビューをしたのですが、インタビュー後にディレクターが真っ青な顔で、「いま聞いた話が消えてしまった。どう

「饒舌（じょうぜつ）じゃなくても、ポロっと出る違う次元の言葉が面白い」

しよう！」

って言い出したんです。

「どうしようったって、いまのは井上康生だぞ！」

って言ったんですけれど、仕方ないからもう一回会いに行き「申し訳ございません」と土下座をしたら、

「そんなことしないでください。もう一回最初からやりますから」

と言ってくれたんです。まだ私も駆け出しの頃だったのでアドリブを効かせられなくて、最初から同じ質問をしたんですよ（笑）。それでも嫌な顔をせず、初めてのように答えてくれました。けて、たまたまマネージャーと一緒に営業に行った時に、番組の担当者と会う機会がありました。「マイオリンピック」は4月から始まることになっていたんですが、そのことを知らずに

「僕は学生の時にボートをやっていて、ソウルオリンピックの予選には出た」

という話をしました。それから

「オリンピックには大きな憧れがあった」

という話もしました。駆け出しの時だったので他に話すこともなかったですからね。そうしたら後日、

「『マイオリンピック』という番組があるから、案内役をやらないか」

さ固めをやられてもおかしくない状況なのにねえ（笑）。真の世界一というのはすごい人物だと思いました。

——現地に行って観戦すると、臨場感あふれる感動も多かったのではないでしょうか？

蒲田　そうなんです。馬術はシドニーオリンピックの時に初めて生で観戦して驚きました。生きている動物と共に競技に出るという、過酷さや躍動感、パワーを感じました。

——「マイオリンピック」の案内役に起用されたきっかけを教えてください。

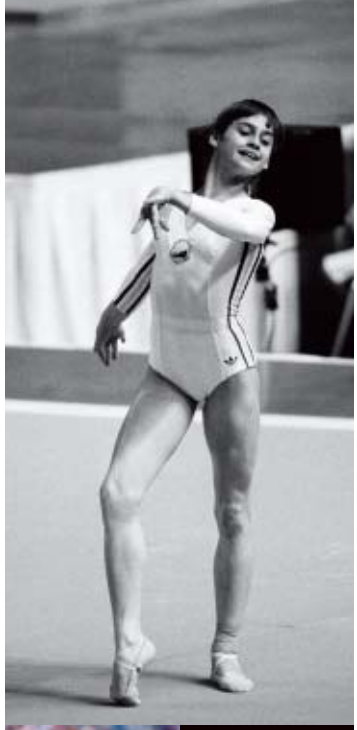
蒲田　1999年からこの仕事を始めと打診があって、本当に棚ぼたですよね。だからスポーツについて話す僕の初仕事が、この番組だったんです。

——記念すべき第1回のゲストはどなただったんですか？

蒲田　伊藤みどりさんです。もう現役ではありませんでしたが、オーラがありました。体は小さい方ですけど、印象はとても強かったです。

トップアスリートの共通点 周囲に感謝できる人

——インタビューの面白さはどこにあり



（上）蒲田さんが最初に観たモントリオールのヒロインといえば、ナディア・コマネチ選手（ルーマニア）。オリンピックの舞台で体操史上初の10点満点を記録した（2段目右）シドニーの柔道金メダリスト井上康生選手は、ハートも金メダル級（2段目左）馬術は蒲田さんが生で観戦し感動した競技だ（3段目）ボート出身の蒲田さんは、日本のボート勢を応援している（下）第1回放送のゲストは伊藤みどりさんだった
photo by AFLO/JOC

<MY OLYMPIC>

TOKYO FM をはじめ、JAPAN FM NETWORK 加盟の FM ラジオ全局の協力を得て 1999 年からスタート。放送時間は毎週月～金の AM6:55 ～ AM7:00（一部放送局で PM11:55 ～ AM0:00 に再放送）

期待の若手のひとりから、ついにはトリノで頂点に登り詰めた荒川静香さん。「マイオリンピック」は、その成長の過程を追いかけ続けてきた。これは長寿番組だからこそできることだ

「一流のアスリートはみな良い人。それがトップに登るための共通項なのでしょう」

ますか？

蒲田　一流の方が一流である次元が垣間見えた時に、それを引き出す面白さがありますね。饒舌じゃなくても、ポロッと出る違う次元の言葉に、素晴らしい魅力を感じます。そのためには、インタビューする側がどのくらい予備知識を持っていくかということと、それを出すタイミングが大事で、肝心な時に「実はあのときってこうでしたよね？」って切り出すと「そうそう」と続く呼び水になります。

――トップアスリートの共通点はありますか？

蒲田　みんな良い人です。これは冗談ではなくて、完璧な共通項だと思います。最初はたまたまだと思っていたんですが、ある時から「これは必然なんじゃないか」と思い始めました。そうでなければトップ・オブ・ザ・トップには登り詰められません。才能だけだったら、県大会優勝くらいはできるかもしれませんが、目をつぶったまま全速力で10kmなんて走れないじゃないですか。50mくらいだったら行けるかも知れませんが、たぶんその違いだと思います。だから必然的にみんな良い人なんですよ。色んな人のお蔭ということが分かっていて、周囲に感謝できる選手が、そこまで登り詰めていると感じますね。

――次のロンドンオリンピックで注目している競技や選手は？

蒲田　僕はボート出身ですから、やはりボートです。武田大作選手は本当に面白くて愛媛の山奥から海まで出てきて、汽船を相手に練習しているんです。個人的な指導者がいないので、全日本選手権の時に地元産のオレンジジュースを何本か持って行き、指導者の人に「ジュースを差し上げますので、僕の漕ぎを見てくれませんか？」

って頼み、そこから10年以上日本一を続けているんですよ（笑）。21世紀でもそういう人間がいるなんて、ある意味ファンタジーだと思います。体もそれほど大きくなくて、僕と同じくらい。番組にも3回ほど出演してもらいました。

【オリンピックファンとして】

続いて、自他共に認めるオリンピックオタクである蒲田さんの経歴と、蒲田さんご自身のマイオリンピックについて伺った。

◆　◆

――低音の響く声が魅力的ですが、ご自身ではどう思われますか？

蒲田　声変わりしていないので小学生からこの声です（笑）。人前で話すとみんなギョッとするので嫌でした。早生まれで体が小さかったのにこの声でしたからね。家でセールスの電話に出ると「奥さまいらっしゃいますか？」

って聞かれ、まだ小学生なのにと思っていました。20歳になるまでは人前で声を発するのが嫌でしたね。

オリンピック記録オタク　記憶の糸が太くなる仕事

――蒲田さんにとってのオリンピックとは何ですか？

蒲田　もともとは憧れというか、見るのがものすごく好きだったんです。最初に記憶に残っているオリンピックは1976年のモントリオールなんですが、コマネチ選手が出て、体操ニッポンが元気な時で、僕は10歳でした。それから大会ごとに観るようになり、僕は記録オタクだったりもするので、資料を買い集めたりもしましたね。だから

蒲田さんは閉会式マニアを自称している。毎回、閉会式には選手達が交流し写真を撮り合う姿や、ゲストのミュージシャンによる演奏を観るのが楽しみなのだとか。ちなみに、バンクーバーの閉会式にはニッケルバック、ニール・ヤング、アヴリル・ラヴィーンらが登場した

It looks back on 11 years of MY OLYMPIC

蒲田 健
Ken Gamada

1966年3月19日生まれ。東京都出身。大学時代はボートの選手として活躍した。1999年から「MY OLYMPIC」の案内役を務め、2000年にはシドニーオリンピック現地レポートを担当。Jリーグのジェフユナイテッド市原・千葉のスタジアムDJをはじめ、テレビ、ラジオなど多方面で活躍中

僕の中では4年ごとに大会についての整理ができているんです。

——今の仕事は天職ですね？

蒲田　オリンピックオタクがオリンピックの番組を持ち、オリンピアンをインタビューしているのですから最高です。とてもラッキーだったと思います。仕事を通してオリンピックの深いところまで知ることもできるし、必然的に魅力は増しますよね。記憶の糸がどんどん太くなる感覚です。

「あんなに自由でいいんだ」閉会式に感動

——閉会式オタクでもあるそうですね。

蒲田　最初に観たモントリオールで最も心を打たれたのは閉会式のシーンなんです。みんな一緒に入場してきて、どの国の選手もみんなが友達という感じで一緒に写真を撮ったりして、あんなに自由でいいんだということに感動しました。選手自身がその場にいることが楽しくてしょうがないんだということも、子どもながらに感じることができたんです。

——シドニーでは閉会式を会場でご覧になったそうですね

蒲田　生で見たら、もう号泣ですね。ライブ感もありますし、いろんな音や匂いの臨場感が全然違いました。閉会式は生で見るものだと思いました。

——2012年のロンドンの閉会式にはどんな期待を？

蒲田　僕はロック好きなので、どんなミュージシャンが出てくるのか楽しみにしています。バンクーバーの時も素晴らしかったので、ロックの本場であるロンドンだったら誰が出るだろう？　という期待が高まります。北京の閉会式に、レッド・ツェッペリンのジミー・ペイジが出てきたほどですからね。

テレビ観戦に大興奮 翌週にはスケート場へ

——バンクーバーはご家族とテレビ観戦をしましたか？

蒲田　僕には長女10歳、次女7歳、長男4歳、次男1歳と4人の子どもがいます。子どもにはあまりテレビを観せていないのですが、バンクーバーの時は毎日夜7時30分からのハイライト番組を観ました。もう家族で大興奮。妻の実家が山形なので長女はスキーをすることもあり、画面に食らいつくようにして「絶対スキークロスの選手になる」と言っていました。次女はフィギュアスケートにはまったので先日、横浜のスケートリンクへ一緒に行ってきました。同じような親子がたくさん滑りに来ていて大混雑でしたけれど（笑）。生まれて初めてのスケートは、なかなか楽しそうでしたよ。

——スポーツを通してお子さんに伝えたいことは何ですか？

蒲田　上の2人は、今、クラシックバレエを習っていますが、プロになるということではなくて、スポーツって語源からして「楽しみ」なので、そこは大切にしてほしいと思います。一方で、もちろん世界のトップになったり、それを仕事にしたりする人もいる訳です。バンクーバーがそんな世界の最高の舞台であることを紹介してあげられる良い機会だったので、毎日、テレビの前で正座して観ていましたね。

——蒲田さんのお子さんたちは、確実にオリンピックオタクを受け継ぎますね。

蒲田　そうでしょうね（笑）。今から楽しみです。

The LEGEND inspired the next generation through his acts

【日本のオリンピズム継承】

古橋廣之進さんが次世代の若者に伝えたもの

**伝説のスイマーであり、
積極的な外交家であり、
人生を諭してくれる好々爺。
古橋廣之進さんが私たちに残してくれた
ものは数知れない。
2009年8月に逝去されるまでの間、
古橋さんが示し続けた
日本のオリンピズムとは何か?
そこで交流の深かった
産経新聞社の金子昌世記者と、
日本水泳連盟の上野広治常務理事に
古橋さんから受け継いだものについて、
お話いただいた。**

Hironoshin Furuhashi

(September 16, 1928 - August 2, 2009)

1928年9月16日生まれ。静岡県浜名郡雄踏町(現・浜松市西区)出身。日本大学法文学部(現・法学部)政治経済学科卒業。 第二次世界大戦終了後、立て続けに世界記録を更新し「フジヤマのトビウオ」の異名で国民的ヒーローとなる。 現役引退後は会社員を経て、日本大学の教授や日本水泳連盟会長、日本オリンピック委員会会長を歴任。 2009年、世界水泳選手権開催中のイタリア・ローマにて逝去。

若き日の古橋さん。その精悍さと向上心は晩年まで変わらなかった

photo by AFLO

photo by AFLO

これぞ“フジヤマのトビウオ”の泳ぎ。その活躍は戦後の日本を元気づけた

【寄稿】

「古橋さんからの伝言」

Message from Mr. Furuhashi

産経新聞運動部記者◉
金子昌世

古橋さんから話を聞くことが楽しくて仕方がなかった。記者クラブ（岸記念体育会館）の仲間3人ほどで勝手に「古橋会」を結成し、機会があれば古橋さんを飲みに誘い、昔話を聞いた。1998年の夏、JOCを担当するようになって以降、そうした関係は10年以上続いた。驚くほどの記憶力で、体験に裏打ちされた言葉で紡がれる世界は、戦争も東京オリンピックも知らない世代には新鮮で、そして示唆に富んでいた。

「フジヤマのトビウオ」

あまりにも有名なニックネームこそ知ってはいたが、戦後の日本を勇気づけた実際の活躍は知るよしもない。ただその一端に触れる機会もあった。いつものように古橋さんを誘い出し、東京・大塚の居酒屋に陣取ったときだった。店にいた年配者の一人が、古橋さんに気づいた。すると次から次へと、古橋さんのもとに店にいたお客さんが集まってきた。

「あの古橋さんですよね。どうか名刺を交換させてください」

隣席に座る若造の私に対しては、

「どんなにすごかったか知らないだろ。一緒に飲めるなんて幸せなんだぞ」

やっかみ半分でからかわれたことを覚えている。

あの世代にとって、まさに「ヒーロー」だった。そんな雲の上のヒーローは、若者に優しかった。古橋さんが日大の教授時代、昼過ぎにプールに併設された準備室に顔を出すと、水泳の授業を手伝っているライフセービング部の学生たちが古橋さんの昼食を作っていた。といっても仕方なしにではない。古橋さんに接したくてたまらないといった雰囲気だった。飲み会の席には、そんな学生たちを連れてきた。

「いろいろ聞いて社会勉強をしなさい」

古橋さんから聞く話は宝の山だった。学生たちでなく、こちらの方が勉強をさせてもらった。東京から兵庫県の宝塚まで先輩と何本も電車を乗り継ぎ、1週間かけてたどり着いたという1946年の第1回国民体育大会のこと。1949年のアメリカ遠征の前に、当時は政府要人ですら対面がままならなかった連合国軍総司令官のマッカーサー元帥に直接「行くからには負けるな。堂々と戦ってこい」と励まされたこと。この遠征で「フジヤマのトビウオ」のニックネームを生むことになる。さらに日本選手団団長秘書として携わった1964年の東京オリンピックの経験、1972年のミュンヘンオリンピックのテロでは現地で日本選手団総務としてその収拾に当たったことなど、語ってくれた話は、自身の体験を通したまさに生の戦後史だった。

幻のロンドンオリンピック

次の2012年ロンドンオリンピックは、戦後初の1948年以来64年ぶりのロンドン開催となる。2005年7月にロンドン開催が決定した際、改めて当時の話を聞かせてもらった。ロンドンは、古橋さんに少なからざる因縁があったからだ。1948年当時は戦勝国の英国でさえ、食料の配給制が続いていたという。それでも過去最多の59カ国・地域が参加し、スポーツの祭典の復興を祝したが、その舞台に敗戦国の日本とドイツの姿はなかった。このとき競技者としてピークだったのが古橋さんだった。さぞや無念だったろうと思うのだが、最初から出場はあきらめていたという。

それでも

「タイムがどんどん縮まっていくことが楽しくてとにかく練習していたよ」

まさしく絶頂期を迎えていた。

「われわれは『プリンス・オブ・ウェールズ』を忘れない」

古橋さんはロンドンオリンピック開催の1カ月ほど前に、こう記された電報が届いたことを聞かされたという。第二次大戦初期、日本軍がマレー沖で撃沈した英国戦艦の名前を記した電報。ロンドンオリンピック参加の道が断たれた瞬間だった。

その前年の8月には、神宮プールで世界記録が誕生していた。日本選手権で、当時日大の学生だった古橋さん自身が400m自由形で4分38秒4という世界新をマーク。日本水泳連盟が国際水泳連盟から除名されて

いたため公認されない幻の記録となったが、日本スポーツ界にとって希望の灯となったことは想像に難くない。

当然、戦後初のロンドンオリンピック開催を前に、水泳関係者は必死に参加の道を探ったという。古橋さんは

「AP通信や進駐軍などは『日本を参加させるべきだ』と支援してくれていた。だが、もともとオリンピックは無理だと覚悟はしていた」

という。結局、オリンピックへの参加は断念せざるを得なかったが、日本水泳連盟は妙案をひねり出す。それが日本選手権をロンドンオリンピックの日程に合わせて開催すること、いわば挑戦状だった。

1948年8月6日、男子1500m自由形決勝。神宮プールは1万7000人の観衆で膨れ上がった。古橋さんは予想通り橋爪四郎さんと一騎打ちを演じ、世界記録を21秒8も短縮する18分37秒0という驚異的な記録で優勝。ロンドンオリンピック優勝のマクレーン（アメリカ）は19分18秒5。圧勝だった。

「失礼ながら、そんなに遅くてどうしてオリンピックで優勝できるのかという思いだった」

と古橋さん。そして再びめぐってくるロンドンでのオリンピックに、

「今度はちゃんと招待されるでしょうから、後輩たちにはロンドンで活躍してほしい」

と話してくれた。

「若力」と浜名湖

古橋さんは常々、気持ちの有り様や大切さを語ってくれた。アメリカ遠征当時の古橋さんの体格は五尺七寸五分（約173cm）、十九貫（約71kg）だったという。海外の強豪に比べれば見劣りし、食糧事情も劣悪な中での活躍。抜群の運動能力があったのは確かだろうが、その能力を生かす上で精神面の強さは欠かせない。そんな古橋さんを育んだ背景には、父親の宇八さんの教えと郷里・浜名湖での少年時代が影響しているように思う。

「五尺八寸、二十四貫。おやじは当時としては大きな人でね。田舎相撲では横綱だった。祭りなんかがあると土俵に上がり、『若力』というしこ名で親しまれていた。蔵に米俵を運び入れるスピードではだれにも負けなかったぐらいだよ」

父親を語る古橋さんの言葉には尊敬の念がこもっていたのを覚えている。9人姉弟の3番目、長男に生まれた古橋さんは宇八さんに厳しくも温かく育てられたという。

「いい跡取りにしようと思っていたんだろう。でも、決して押し付けることはなかった。小さいころに『大きくなったら奉公に行くのがいいか、相撲取りになるのがいいか』と聞かれ、相撲を選んだら、身長と体重を毎月測るんだよ。思うように体重が増えていないと『もっと食べろ』と言い、強くなるからとマムシを捕まえてきては食べさせてくれた。うさぎや鶏も自ら料理したし、着る物なんかもおやじの手作り。強いばかりでなく、器用な人だったんだ」

古橋さんが生まれ育った浜名湖岸は、昔から水泳の盛んな土地柄で、1932年ロサンゼルスオリンピックの宮崎康二選手（100m自由形・800mリレー）、1936年ベルリンオリンピックの寺田登選手（1500m自由形）ら浜名湖育ちのスイマーが世界に羽ばたいていた。小学校4年の時、宇八さんと浜名湖で開催された水泳大会を観戦した古橋さんはものすごい速さで泳ぐ選手に感動を覚えたのだという。この時、宇八さんに

「おまえもあんなに速く泳いでみたいか」

と尋ねられた。これが本格的に水泳を始めるきっかけになった。

すぐに頭角を現し、「豆魚雷」の異名を取った。それでも宇八さんは

「『自分の決めたことはしっかりやれ』と言うだけだった」

という。そんな父親を

「教育熱心で、貧乏なくせに、姉も女学校に通わせた。とにかく弱みを人に見せない。お酒も強くよく飲んだけど、乱れたところを見たことがないんだよ。正義感が強くて頑固だったね」

と振り返った。

日大在学中の1946年6月に、母親が亡くなった時、一番下の妹さんはまだ2歳だったという。古橋さんは大学を諦め、実家に戻る決心をしたが、宇八さんには許されなかった。

「『大学に戻れ』と言うんだ。僕が家計を助けなければやっていけないだろうと言うと『いいから戻れ、だめなら電報を打つ』ってね」

全米選手権をすべて世界新で制する大活躍は、その3年後だった。中学時代の勤労動員先で被った左手中指欠損のハンディを補い、工夫した変則泳法での快挙だった。

魚になるまで泳げ…

1950年の南米遠征時に罹患したアメーバ赤痢が古橋さんの現役生活を縮めることになったが、このアメーバ赤痢には後日談がある。いつだったか、古橋さんが目の検査で病院に行った際、

「昔、赤痢に罹ったことはないですか」

と問われたというのだ。南米遠征から50年以上、完治せずに菌が残っていたのだから、その体力たるや…。

古橋さんから聞いた話は、数限りない。どれもが貴重な財産になっている。2008年、スポーツ選手として初めて文化勲章を受章した際、

「日本ではスポーツの社会的評価が低い。スポーツは社会のためになるんだと証明したかったので、受章は光栄であり、ありがたい」

と語っていた。確かに、古橋さんはこの思いを貫いた方だったと思う。後輩たちには

「さすがはスポーツマンだと、いろいろな手本になるように頑張ってほしい」

とエールを送った。

「現役でいられるのは（長い人生から見れば）一瞬、その後の人生の方が長い。その一瞬に集中しきれないでどうする。その後の人生のためにも集中してやりきってほしい」

とも話していた。

実際、古橋さんは就職の際、

「フジヤマのトビウオという名声がほしいのではない。そこまで努力した古橋が必要なんだ」

と言われたことが決め手になったと語っていた。

「魚になるまで泳げ」という言葉は、そうした思いの表れなのだと思う。精神論のように誤解される向きもあるが、そこまで努力しろ、という意味なのだと受け取っている。気さくで明るくて、話題が豊富で、決して自らの功績を押しつけるような方ではなかった。だから、みんな古橋さんのことが好きだった――。

水泳界にとどまらずスポーツ界全体のことを常に考え、行動していた

photo by PHOTO KISHIMOTO

日本のスポーツ界の発展を願った古橋さんは子どもと接するのも大好きだった

Column

photo by PHOTO KISHIMOTO

［古橋イズムの継承］

～周囲に感謝し、重圧に負けない選手が勝つ～

日本水泳連盟常務理事・競泳委員長　上野広治

上野広治

1989年からジュニア日本代表チームのコーチに参画し、その後ヘッドコーチに。日本水泳陣のチーム力強化を推進。2000年シドニーオリンピック以降のメダルラッシュの基礎を作った。

「速く泳ぐだけなら、魚には勝てない」

私たち競泳にかかわる者にとって、古橋廣之進名誉会長の助言は、何よりも重みのあるものでした。中でも一番心に残っているのは、メダル「0」と惨敗したアトランタオリンピックの翌年、関係者を集めて言った言葉です。

「速く泳ぐだけなら、魚には勝てない」

オリンピックでメダルを獲るために何が必要か探求する必要性を、指導者や選手に問いかけたのです。この言葉は私にとって、オリンピックごとに探求し、目標を立てる礎となっています。

まずシドニー大会に向け、この言葉から「記録面だけでなく“勝負できる選手の育成”」という目標を読み取りました。世界記録保持者が優勝するとは限りません。外国の選手にタッチの差で勝てる精神力を磨くのです。次のアテネ大会では「競技のトップになるとは、成績だけでなく、挨拶、言動、礼儀が大切」という意味を読み取りました。周囲への感謝が出来る人間こそがメダルを獲れると考えたのです。北京大会では、さらに社会貢献できるような「人を磨く」というのが、メダルへの方向性と考えました。この言葉を胸に臨んだ3大会は、連続で複数のメダルを獲ったのです。古橋名誉会長が追求した「古橋イズム」を、私たち水泳関係者は受け継いでいますし、これはスポーツ全般に通ずる精神論なのです。

期待を背負い、重圧に負けない。

選手育成の面では、「期待を背負い、重圧の中で結果を出せる選手」を育てることの大切さを教えられました。社会の中で期待され、それに感謝できる選手はまだ一握りでしょう。例えば北島康介選手は、その期待からの重圧と感謝という精神力を受け継いだからこそ2度の金メダルにつながったと感じています。

IOC会長(当時)故サマランチ氏と。古橋さんの精力的な国際活動が、日本のスポーツ界に数多くのものをもたらした

生涯でなんと15度のオリンピックに選手、コーチ、役員として参加した。アトランタでは選手団団長を務めた

また逆境に耐える精神力も同じことです。「オリンピック前は環境を整えるな」とよく話していましたが、これはオリンピックより悪い環境で練習することで甘えをなくし精神力がつくというもの。逆境を何度も乗り越えた方ですから、その大切さも痛感していたのでしょう。

言葉に重みがあるのは、偉大な成績だけでなく、何事も行動で示す人だったから。まずどんな大会でも朝の予選第1レースからすべて観戦。そんな人は誰もいません。世界のレースを網羅しているから、世界の潮流、水着問題などもいち早くキャッチして、選手と食事に行っては様々なヒントを与えてくれていました。誰に対しても低姿勢で偉ぶらない、人間としての見本だったと思います。

一人で泳いでいるのではない。感謝。

そんな古橋イズムの凝縮といえば、「感謝の心」でしょう。

「一人で泳いで記録を出しているのではない」といつも言っていました。

競技大会は、水泳を好きな方たちが半分ボランティアのような形で運営しているもの。だから古橋名誉会長は、運営役員には上下関係を作らず気持ちよく運営できるよう組織化していましたし、すべての運営役員に対して同じように感謝をしていました。

ローマで行われた世界水泳では、お亡くなりになった前夜も、関係者をねぎらう夕食会を主催していました。すでに体調は悪く、レースの観戦をできなかったというのに。それだけ周囲への感謝の心というのを大切にされる方。最後まで「感謝の大切さ」を示していた姿に、常に日本を背負って泳いでいたのだと改めて感じました。感謝の心が、最終的には競技の強さにつながる。その思いは、確実に私たちが受け止め、次の世代を育てていきたいです。

photo by PHOTO KISHIMOTO

オリンピックに出場したアスリートが参加する、さまざまな市民参加型イベントが展開された

2007年7月、招致活動のロゴが公開された。水引をモチーフとしたもので、コンセプトは「結び」

招致委員会理事の室伏広治氏が、1964年東京大会の聖火台を磨き、招致成功を祈願した

数多くのアスリートが参加して盛り上げたことが、今回の招致活動の特筆すべき点だった

東京オリンピック・パラリンピック招致委員会・河野一郎事務総長に聞く

オリンピック・パラリンピック招致のレガシー

2016年のオリンピック・パラリンピックの開催都市は、東京、リオデジャネイロ(ブラジル)、マドリード(スペイン)、シカゴ(アメリカ)の4都市が最終候補に残り、2009年10月のIOC総会での決選投票で、初の南米開催となるリオデジャネイロに決定した。しかし、その3年半にわたる招致活動の中で、日本にさまざまな遺産を残した。河野一郎事務総長に、活動を振り返ってもらうと共に培われた経験、残されたものについて伺った。

国家財政保証に前例があるということは非常に意義がある

河野さんは多才であり多忙な人である。JOC理事、日本ラグビーフットボール協会理事、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）会長、世界アンチ・ドーピング機構（WADA）ヘルス・メディカル&リサーチコミッティー委員、IRB（国際ラグビー評議会）理事、筑波大学大学院教授などの要職を兼任している。そんな河野さんに招致の推進役として白羽の矢が立ったのが2006年。大役に起用された理由をこう振り返る。

「ちょうど招致委員会が事務総長を探していた2006年10月に、IOCのジャック・ロゲ会長に筑波大学の名誉博士称号を授与し、その記念講演をしていただいたご縁があってのことだと思いました。それから私がWADAなど国際的な活動にかかわっていたこともあったのではないでしょうか。他にやる方がいらっしゃらないのなら、喜んでやらせていただくという思いで大役をお引き受けしました」

「絶対に勝てない」という厳しい評判が多かったのにもかかわらず招致委員会事務総長を引き受けた背景には、1999年のラグビーワールドカップで日本ラグビーフットボール協会の強化推進本部長として、日本代表の団長を務めた経験も影響したという。

「ラグビーと同じで絶対に勝つと決まっている勝負はないんですよ。だからポジティブシンキングでやりました。ラグビーの時は歴代のキャプテンを強化委員として全員チームに加え、競技間連携や情報戦略を行いました。今回の招致活動でも情報戦略を駆使し、オバマ大統領の誘致演説のタイミングなどをつかむことができました」

3年間で「勝つ可能性」の手応えはあったのだろうか？

「当初、勝つ可能性が二割と言われていた時は周囲が見えない状況で、その後、立候補する都市が見えた時点で五分五分になり、それから六割を超えるというところまで来たとは思います。結果的には落選してしまいましたが、現時点でできることはやり尽くした感があります」

決選投票ではまずシカゴが、次に東京が、そしてマドリードが落選し、開催地はリオデジャネイロに決まった。

「落選が決まった後、委員のメンバー全員が同じ部屋に集まって、それぞれの思いと、これからについて話したことが印象深いですね。オリンピアンもパラリンピアンも政治家も、文部科学省や外務省の担当官もみんないました」

今回の招致活動では政府の全面的財政保証の表明がレガシーの一つとなった。

「次にどこが立候補するにせよ、国家財政保証に前例があるということは非常に意義があることだといえます。当時の政局の中で国会採択された点は大きな成果といえるのではないでしょうか」

招致活動を通じて国際人としての実力を発揮

世界の代表的な都市との招致レースにおいて、国際派の河野さんの強みが十二分に生かされた。

「最初のスピーチで、素晴らしい仲間と招致レースをすることができて大変幸せだと発言しました。それを聞いて他国も同様のことを言い出したんです。足を引っ張り合う招致レースもあるのですが、喧嘩別れしない和やかな雰囲気をつくることができたのは非常にうれしかったし、良かったことだと考えています」

さらに河野さんはWADAで培ったネットワークを最大限に活用し、東京への招致キャンペーンを推進した。

「私はWADAの立ち上げから関わっているので、IOCの中に一緒に仕事をした仲間が数人いました。これは他のスポーツ界の人にはないと思いますね。いちばん面白かったのは、招致にかかわっていると言うと、WADAは世界の統括組織なのでメンバーが喜んでくれたことです。ラグビーでもちょうど7人制のキャンペーンを進行していたから、IRBのスタッフもみんな喜んでくれました。実は国外に東京の応援者がたくさんいたんですよ」

JOC理事も務める河野さんは、今回の招致活動を通じてオリンピックに何を感じたのだろう。

「オリンピックを愛している人がたくさんいて、スポーツの頂点に立った人がいる。何より素晴らしいのは、子どもたちがオリンピックに夢を見ることです。だからこそオリンピックをより良い形にしなくてはならないと実感しました」

国の品格と国民の自信を高めるオリンピック

今回の招致活動はオリンピックムーブメントという意味では、世論の盛り上がりがいまひとつだったと言わざるを得ない。これに対して河野さんはオリンピックの意義についてメディアのとらえ方にも課題があると指摘する。

「国策とかオリンピック招致にお金を掛けると言うと、〝国威発揚はいらない〟という論調がメディアから出てきました。しかし、今年の冬季オリンピックでカナダが活躍したことが国威発揚になっていますか？　オリンピックを国策でやるということは、国威発揚ではないんですよ。多くの国、特に先進国が国策としてオリンピック招致や各競技の強化を行う目的は、国民の自尊心を引き上げるということにあります。つまり英語で言うとenhancement。国の価値、国の品格を高めるためにオリンピックを招致するんです。それと同時に国民が自信を持つためのオリンピック招致なのです。オリンピック教育やアンチ・ドーピングなど、スポーツのコアバリューを明確にする時にきていると考えています」

我々はなぜオリンピックに魅かれるのか。そしてなぜオリンピックを招致するべきなのか。日本スポーツ界を代表する国際人から、その答えが聞けたことも招致活動のレガシーのひとつではないだろうか。

オリンピック・パラリンピック招致に参加したアスリートの声

招致活動の感動、そして経験

2016年オリンピック・パラリンピックを東京で――。その思いを胸に、今回の招致活動にはアスリート達が積極的に参加し、またオリンピアンとパラリンピアンが手を取り合いスポーツの素晴らしさを訴えた。招致活動に参加したアスリート達から、生の声を聞いた。

大喝采のプレゼンテーション 涙ぐむIOC委員も

東京招致のひとつの特徴は、計画策定段階からアスリートが参加したこと。選手の立場を考えたコンセプトはIOC委員からも高い評価を受けた。

小谷実可子「招致委員会立ち上げから3年以上参加させていただきましたが、計画策定にアスリートの声を反映できたことは素晴らしいことでした。他国の選手との交流を出来る場所として〝スパ〟を選手村の計画に入れたり、パラリンピアンの方の意見でドアの開閉の向きまで決めたりと、選手第一の計画を策定できたと思います」

小谷さん、荒木田裕子さん、河合純一さんの3人は、2009年10月にコペンハーゲンで行われた最終プレゼンテーションで壇上に立ち、一体となって東京招致をアピールした。

河合純一「最終プレゼンテーションに向けては、現地に着いてからも全員が必死になってリハーサルを何度も行い、アスリートだけでなく、竹田恆和会長や石原慎太郎招致委員会会長、河野一郎事務総長、そして鳩山由紀夫総理まで、皆で一体となって臨む事が出来たのは素晴らしいことでした」

小谷「スピーチするメンバーに団結力があり、シンクロナイズドスイミングでオリンピックに出た時のような一体感でしたよ（笑）」

努力の甲斐あって、最終プレゼンテーションは大喝采を浴びた。涙ぐむIOC委員もいたという。

河合「僕はパラリンピアンの代表としての思いを伝えたつもりです。プレゼンの最後に『僕は目が見えないけれど、目を閉じると7年後に東京でオリンピッ

最終プレゼンテーションを前に、気持ちをひとつにする招致委委員会のメンバーら。向かって右から2人目が荒木田さん、右から3人目が小谷さん、右から5人目が河合さん

ク・パラリンピックが開かれている姿が見える』と言って、その言葉で思いが伝わったのかも知れません」

小谷「私にとっては、現役時代最高の舞台はソウルオリンピックでしたが、今でも韓国語を耳にすると感動で身震いするほどの思い出です。だからこそ2016年、関係者が生涯の思い出に出来るような最高のオリンピックを開きたい、そうであれば、おもてなしの心で世界に誇れるオリンピックを行えるのは日本だ、と伝えました」

荒木田裕子「本当に日本に来て欲しいという思いが集結して、抜群のチームワークでプレゼンを出来たと思います。招致活動に参加したメンバーの間に出来た繋がりは、今でも残りました」

オリンピアンとパラリンピアン その繋がりが一番のレガシー

小谷「パラリンピアンの方とは今まで交流がなかったのですが、お互いの組織は違っても、アスリート同士という意味で繋がりました。パラリンピックを成熟させようという熱い思いが、河合さん達から伝わってきました」

荒木田「そう。スポーツを通じ、努力して自分の限界に挑戦する、という思いが一緒。だから、スポーツの素晴らしさを伝えたい、それを通して努力の大切さを伝えたいという思いを共有できました。パラリンピアンの方々と一緒に活動できたことが、何より一番のレガシーだと思います」

河合「パラリンピアンにとっては、こうしてオリンピアンの方々と繋がり、今後の活動に生かせることが本当に財産です。オリンピックが国境を越えて平和を実現できるなら、障害の壁だって越えられる。オリンピックとパラリンピックの壁を少しでも無くすため、これからも活動していきたいです」

荒木田「実際にこの招致が終わってから、JOCのアスリート専門委員会にパラリンピアンを招いて、意見や情報を交換していき、今後はともにオリンピックムーブメントの推進活動を行っていこうとしています」

スポーツの素晴らしさを発信 オリンピック教育を広める

荒木田「これまでバレーボールの現場の強化が中心で頭が回っていたのが、招致活動に携わるようになりバレーボールの選手に対してオリンピズムを語るようになりました。スイスへ全日本女子チームで遠征に行ったときも、『ローザンヌのオリンピックミュージアムに行こう』と企画したり。バレーボール以外のことを教えて、人間の幅を広げようと考えるようになりました」

招致活動はいったん終わったが、それぞれの活動は今もなお続く。

小谷「日本は、おもてなしの心、食べ物、安全性、国際大会の運営能力。どれをとっても最高のオリンピックを開催できる国。そういった計画を立てアピールしたことで、招致チーム、そして日本そのものを誇りに思えたことが、素晴らしいことだと思います」

河合「僕は、これまで任意団体だった『日本パラリンピアンズ協会』を2月に一般社団法人にし、より積極的な活動を行える体制を作ったところです。パラリンピアンにとっては、本当に残ったものが大きい招致活動でした」

荒木田「スポーツの素晴らしさは、オリンピックや招致都市決定の年だけアピールするものではありません。普段からもっと、オリンピアンやパラリンピアンが自分達の経験を発信し、社会のロールモデルとしてオリンピック教育の先導者になるべきだと思います。そこで今、地元アスリートがそれぞれの地域から発信する活動を目指し、そのネットワーク作りを始めています」

招致活動を通じて芽生えたオリンピックムーブメントは、未来へ受け継ぐためのスタートを切ったと言える。

2009年10月2日、IOC総会で行われた最終プレゼンテーションで、（上）東京からも多くの人々が応援に駆けつけた（中）政権交代直後で多忙の折、鳩山総理も参加（下）日本のプレゼンテーションには会場から大喝采が起きた

東京オリンピック・パラリンピック招致委員会アスリート委員会

荒木田裕子
Yuko Arakida

1976年モントリオールオリンピック女子バレーボールで、金メダルを獲得。現在はアジアオリンピック評議会（OCA）理事、日本バレーボール協会執行役員、JOC理事などを歴任。

小谷実可子
Mikako Kotani

ソウルオリンピックのシンクロナイズドスイミングで、ソロ・デュエットともに銅メダルを獲得。現在はコメンテーターや、日本オリンピアンズ協会理事として、スポーツの振興に尽力。

河合純一
Junichi Kawai

先天性ブドウ膜欠損症のため13歳のときに全盲となり、17歳でバルセロナパラリンピックの水泳に出場。2008年北京大会まで5大会連続出場を果たし、金5個、銀9個、銅7個を獲得。現在は静岡県総合教育センター勤務。

photo by PHOTO KISHIMOTO

2009年10月3～5日の3日間にわたり、第13回オリンピックコングレスが15年ぶりに開催された。オリンピックコングレスは、オリンピック憲章第4条に則り1894年から開かれている会議。今回は1249名のIOC委員、NOC、IF代表者らが出席し、「社会におけるオリンピックムーブメント」をテーマに5つの視点からのプレゼンテーションが行われた。JOC竹田会長はそのうち「デジタル革命」をテーマに話し、デジタル技術は、選手の環境整備を含むオリンピックムーブメントに大変有効なツールであると語った。

第13回オリンピックコングレス at コペンハーゲン

「デジタル革命」をテーマに竹田会長がプレゼンテーション

前回1994年にパリで開催された第12回オリンピックコングレスから、15年ぶりに開催される第13回オリンピックコングレスにおいて、私は、日本オリンピック委員会（JOC）会長、また国内オリンピック委員会連合（ANOC）理事としてスピーチをさせて頂くことを大変光栄に思います。

3日間に渡り開催される本コングレスのメインテーマは、「社会におけるオリンピックムーブメント」であり、私に与えられたスピーチのテーマは、「デジタル革命」です。

今日、このスピーチ内でご紹介する将来のオリンピック競技大会における「アクレディテーションカード（以後「AD」カード）」のシステム等については、ユビキタスの分野で世界的権威でありEUのコンサルタントもされている、東京大学教授工学博士　坂村健先生の協力をいただきました。

私とオリンピックのかかわりは、選手時代、NOC／NF役員またIOC調整委員会委員としての活動などさまざまな立場を経ております。詳しく申し上げると次のとおりです。

◎選手時代：第20回オリンピック競技大会（1972／ミュンヘン）、第21回オリンピック競技大会（1976／モントリオール）の馬術競技に参加

◎NOC／NF役員：JOC会長、日本馬術連盟副会長

◎IOC調整委員会委員：第21回オリンピック冬季競技大会（2010／バンクーバー）、第22回オリンピック冬季競技大会（2014／ソチ）

今日は、これらの経験を踏まえテーマである「デジタル革命」について、プレゼンテーションを進めてまいりたいと思います。

まず、「デジタル技術」に代表される「最先端技術」は、我々人間のライフスタイルをより快適で便利な社会とするための重要なツールであると考えます。

「ユビキタス」の語源は、ラテン語で「至る所に存在する」という意味であり、ユビキタス社会とは、「様々な情報が街の至る所で入手が可能な社会」を意味します。

この「デジタル技術」をオリンピックの運営に応用するとオリンピックに参加する選手・役員、観客等、すべての関係者が恩恵を受けることができます。

では、ご説明いたしましょう。

オリンピック開催期間中には、選手、役員、スポンサー、メディア、観客等、世界中から多数のオリンピック関係者が開催都市を訪れます。

つまり世界中の様々な国の言語、文化、習慣が開催都市に集中します。

オリンピック会場では、ADカードと競技観戦チケットが重要なツールとなり、大半の関係者は、この2点のいずれかを携帯することになります。

現状のADカードと競技観戦チケットの機能は、査証、身分証明であったり、入場確認のツールでありますが、これにデジタル技術を応用しICチップを付属させることでADカードと競技観戦チケットは、様々なことができるようになります。

まず、（既に日本では導入されておりますが）ADカードや競技観戦チケットにICチップを付属させることで公共交通等を利用する際、スムーズに通ることが可能です。

また、ICチップの付属により「デジタル・サイネージ（DS）」と呼ばれるシステムが導入できます。DSを利用することで、知らない都市でも言語の問題がなく、安心して公共交通が使え、迷うことなく競技会場や観光地に行くことが出来ます。さらに競技会場内でも、自分の席までナビが可能です。

DSと呼ばれる装置は、一見したところ、縦置きのプラズマテレビ画面のようですが、DS、いわゆる「電子情報掲示板」には様々な情報を表示することが可能です。

また、ネット経由で最新の情報をアップデートすることも可能なので、DSは、非常に有効なツールです。

DSは具体的にこのように使います。

駅に到着したらDSの前に行き、自身のADカード、競技観戦チケットをかざして下さい。

チケットであれば販売国の言語が自動表示されます。

この言語は変更することも可能であり、変更後は最初からその言語で表示されます。

次に「競技観戦」か「観光」を選びます。

競技観戦を選べば競技会場へ、観光であれば適宜画面が変わります。競技観戦チケットの場合には自動的に読み取って競技会場が表示されます。

次に自分の現在いる駅からの乗り換え情報を含めたルートが表示されます。観光情報も同様の操作

●2009年テーマ
～社会におけるオリンピックムーブメント～

1. 選手
2. オリンピック競技大会
3. オリンピックムーブメントの構造
4. オリンピックと若年層
5. デジタル革命

が可能です。

また、さらに選択画面からは、大会を楽しむ上での競技情報を得ることも出来ます。

オリンピック競技は全ての競技がテレビ放映されるわけではないので、自分の知りたい競技予定・結果についての情報も入手が可能です。

DSの更なる機能をご紹介します。

ADカードまたは競技観戦チケット保持者が競技会場に到着し、入場ゲートを通過すると、その情報が会場責任者の端末に瞬時に伝達されます。これにより会場責任者は、入場者状況を一元管理することができ、空席対策に大きく寄与するのです。

このようにデジタル技術は、ADカード、競技観戦チケットを保持する大会参加者また、運営者にとって大変有益な技術なのです。

続きまして、ここまでオリンピックの運営面からデジタル革命について話してまいりましたが、ここからは、「競技の場における」デジタル革命についてお話をします。

デジタル技術は、運営面だけでなく、競技の場でも大いに活用されております。

いまから、45年前、「1964年に東京で開催された第18回オリンピック競技大会で陸上競技100mにおいて初めて電子タイミングが採用された」と国際陸上競技連盟（IAAF）発行の「IAAF世界記録2007年版」に記載されております。

勝敗を判定するにあたり、選手のパフォーマンスを敏速かつ正確に計測することは、45年が経過した今日でも、大変重要です。

特にゴール付近で繰り広げられる選手の拮抗したパフォーマンスを正確に判定するにはデジタル技術は、不可欠なのです。

現在、「ボート」、「スピードスケートショートトラック」、「自転車競技」等さまざまな競技で採用されている選手のパフォーマンスを判定するシステムの一つに「写真判定」があります。

「写真判定」とは、競技におけるフィニッシュ地点の写真を撮影し選手のパフォーマンスをミリ単位、コンマ単位で計測し、選手間の微細な記録の違いを把握し、勝負を判定することが可能な技術です。

「写真判定」により大会役員は、選手のパフォーマンスを正確に測定することが可能となります。

また、「走高跳、走幅跳、三段跳、棒高跳、円盤投、砲丸投げ」等のフィールド競技では、複数の係員がメジャーをもって距離を計測していますが、この方法は、正確な計測をするのに時間がかかります。

このため、現在では、赤外線を利用した光計測（EDM）システムを利用し、選手が着地した場所、またはハンマー等の器具が落下した地点に「光」を利用して瞬時に距離を正確に計測することができるのです。

さらに、現在では、光計測（EDM）が進化し新しくビデオを導入したVDMというシステムも開発され、試行の段階にあると聞いております。

これは、ビデオ映像をコンピューター画面に表示し、その画像を画面上で計測することで一目で踏み切り板から着地点までの距離を瞬時に判定出来るシステムです。

このようにデジタル技術により選手のパフォーマンスは、正確かつ敏速に測定され勝敗を判断するのに、大変便利です。

デジタル技術を利用した「目」と大会の審判員の「目」の双方が選手間の僅かなパフォーマンスの差を識別することが可能となるのです。

ここまで、オリンピックにおけるデジタル技術の恩恵について述べてまいりましたが、我々、オリンピックファミリーは、これを総括的に考える必要があります。

オリンピックの運営面、競技面にデジタル技術を応用し、システムを構築するためには、多大な経費が必要です。

また、システムを使いこなすにあたり専門家による講習等を開催し、教育活動や普及活動や実施訓練も必要です。

当然、資金面でスポンサーの理解を得てバックアップも必要となります。

最後に、このプレゼンテーションを締めくくるにあたり、私が確信をもって言えることは、デジタル技術がどんなに発達し革命を起こそうとも、我々、オリンピックファミリーは常に一体であり、一丸となって、この技術を選手の環境整備とオリンピックムーブメントに利用する努力を惜しまないということです。

photo by IOC

竹田会長の熱のこもったプレゼンテーション。「デジタル革命」というテーマは、コングレスに出席した1200人を超える各国の関係者たちからも強い関心を集めた

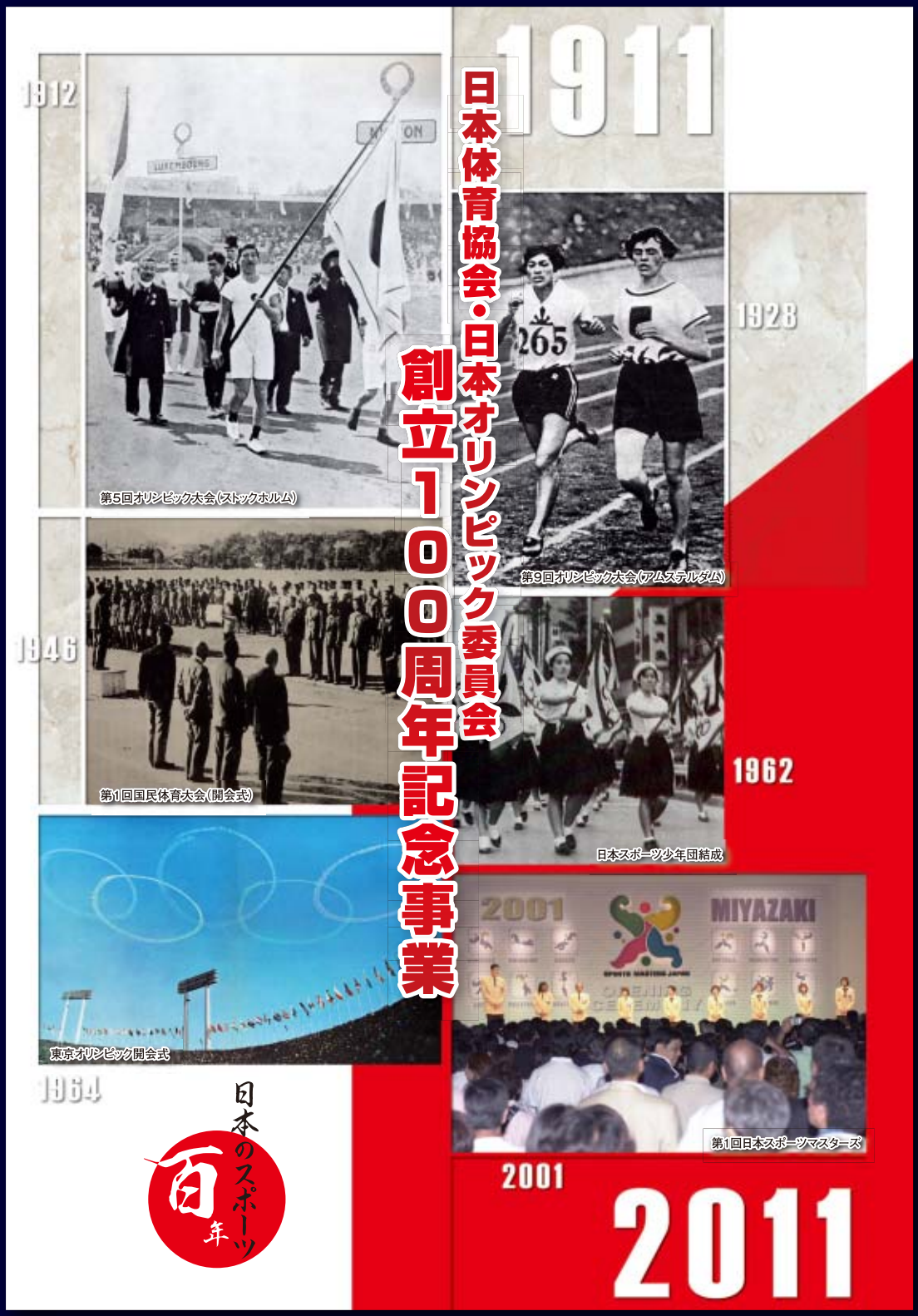
●オリンピックコングレス／過去の開催年とテーマ

1.	1894年	フランス(パリ) オリンピック競技大会の再構築
2.	1897年	フランス(ル・アーブル) スポーツ衛生とその教育
3.	1905年	ベルギー(ブラッセル) スポーツと体育
4.	1906年	フランス(パリ) 文化、芸術とスポーツ
5.	1913年	スイス(ローザンヌ) スポーツ心理学と生理学
6.	1914年	フランス(パリ) オリンピック・レギュレーション
7.	1921年	スイス(ローザンヌ) オリンピック・レギュレーション
8.	1925年	チェコ(プラハ) スポーツ教育学
9.	1930年	ドイツ(ベルリン) オリンピック・レギュレーション
10.	1973年	ブルガリア(ヴァルナ) スポーツと世界平和-オリンピックムーブメント
11.	1981年	ドイツ(バーデンバーデン) スポーツの結束
12.	1994年	フランス(パリ) 100周年記念オリンピックコングレス-結束

photo by IOC

1994年以来、15年ぶりのオリンピックコングレス。ジャック・ロゲ会長が2001年に就任して以降、初めての開催

日本体育協会・日本オリンピック委員会は2011年に創立100周年を迎えます



日本体育協会・日本オリンピック委員会 創立100周年記念事業

創立からこれまでの変遷や実績を踏まえ、国民1人ひとりがスポーツ文化を豊かに享受する「生涯スポーツ社会」の実現、オリンピックムーブメントを通したスポーツによる世界平和の実現を目指して、これからの日本体育協会・日本オリンピック委員会の歩む方向、取り組むべき方策について、シンポジウム等を通して探っていきます。

❖ 記念シンポジウム ❖

【共通テーマ】
日本のスポーツ100年「これまで」と「これから」

福島会場	2010年	10月23日(土)
京都会場	2010年	12月11日(土)
広島会場	2011年	2月26日(土)
東京会場(総括)	2011年	7月15日(金)

❖ 祝賀式典 ❖

東京にて	2011年	7月16日(土)

JOC活動報告〈2009／2010〉

オリンピズムと笑顔の輪を広めるために

JOC Activity Report

JOCの理念

JOCの使命は、全ての人々にスポーツへの参加を促し、健全な肉体と精神を持つスポーツマンに育て、オリンピック運動を力強く推進することにある。オリンピックを通じて、人類が共に栄え、文化を高め、世界平和の火を永遠に灯し続けることこそ、JOCの理想である。

JOCの目的

「オリンピック憲章に基づく国内オリンピック委員会(NOC)として、オリンピックの理念に則り、オリンピックムーブメントを推進し、スポーツを通じて世界平和の維持と国際友好親善に貢献するとともに、わが国のスポーツ選手の育成・強化を図り、もってスポーツ振興に寄与すること」

JOCの活動

JOCでは、オリンピック競技大会及びそれに準ずる国際総合競技大会への選手派遣事業、ならびにオリンピックムーブメント推進を目的とした事業を2本柱として活動を展開している。

日本オリンピック委員会(JOC) ＝ オリンピズム
- 国際総合競技大会への選手派遣事業・競技力向上事業
- オリンピックムーブメントの普及・啓発運動

photo by AFLO

photo by PHOTO KISHIMOTO

photo by PHOTO KISHIMOTO

Chapter 1　国際総合競技大会への選手派遣事業……68
Chapter 2　オリンピックムーブメント普及・啓発事業……70
Chapter 3　選手強化事業……76
Chapter 4　マーケティング事業……79
Chapter 5　役員紹介……80
Chapter 6　オリンピック参加状況……82

国際総合競技大会への選手派遣事業

世界へ挑戦するチャンスをサポートする

Chapter 1

1

5

4

3

2

第25回ユニバーシアード競技大会
（2009年7月1日～12日）

開催地≫セルビア共和国/ベオグラード
実施競技・種目≫12競技203種目
日本選手団≫選手265名、役員109名、
アディッショナルオフィシャル18名、計392名

金 20個
銀 21個
銅 32個

第1回アジアユースゲームズ
（2009年6月29日～7月7日）

開催地≫シンガポール
実施競技・種目≫9競技90種目
日本選手団≫選手38名、役員19名、
アディッショナルオフィシャル3名　計60名

金 5個
銀 6個
銅 4個

JOCが選手団を派遣した国際総合競技大会
（2009年4月～2010年3月）

ロンドンオリンピックへの戦いは始まっている

2009年6月は、第1回ユースオリンピック（2010年8月）のプレ大会として、シンガポールで第1回アジアユースゲームズが行われた。日本からは60名の選手団を派遣し、金メダル5個を獲得するなど活躍。次世代の活躍の場が広がった。

第25回ユニバーシアード競技大会へは、田中英壽団長をはじめとする選手団392名が参加。水谷隼選手（卓球）が主将、入江陵介選手（水泳／競泳）が旗手を務めた。ユニバーシアードは、〝学生のオリンピック〟ともいわれる全世界の学生が集まる総合競技大会。日本は、メダル総数73、総入賞数132。メダル総数は過去最多となる快挙だった。

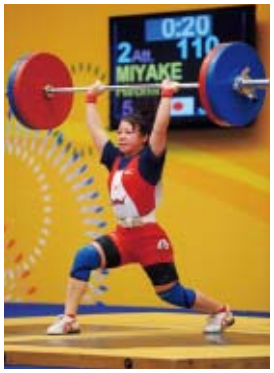
また第5回となる東アジア競技大会は、香港で開かれる初の大規模国際スポーツイベントとなった。日本からは、水野正人団長をはじめ、奥村幸大主将（水泳／競泳）、三宅宏実旗手（ウエイトリフティング）ら選手団544名が参加。オリンピック競技のほか、ボウリング、ダンススポーツなど全22競技262種目が行われた。水泳では、入江陵介選手が背泳ぎ3冠、立石諒選手が平泳ぎ3冠を決め、ともにメドレーリレーでも優勝するなど15の大会新記録を樹立する大活躍をみせた。2012年のロンドンオリンピックに向け、選手の確実な成長と、周囲の的確なサポートを示す大会となった。

**JOCは、数多くの国際総合競技大会に選手団を派遣、
世界への挑戦の場をサポートしている。
2012年ロンドンオリンピックへの戦いはすでに始まり、
またオリンピック競技以外の競技でも、世界トップへの熱い戦いが繰り広げられている。**

photo by AFLO

8

6



1. 東アジア大会、卓球女子ダブルスで福原愛・石川佳純選手組が優勝　2. 柔道勢は東アジア大会で10コの金メダルを獲得　3. ユニバーシアード日本人メダル第1号はフェンシングの中野希望選手　4. 自転車競技・サイクルボールといったユニークな種目も行われる東アジア大会　5. ユニバーシアードの開会式は荘厳な雰囲気　6. ボウリングも東アジア大会の競技の一つ　7. 各大会に多くのオリンピック選手が出場　8. ユニバーシアードでは水泳勢が大活躍した

7

第5回東アジア競技大会
（2009年12月5日～13日）

開催地≫ホンコン・チャイナ／香港
実施競技・種目≫22競技 262種目
日本選手団≫選手378名、役員139名、アディッショナルオフィシャル27名、計544名

金 62個
銀 58個
銅 70個

第3回アジアインドアゲームズ
（2009年10月30日～11月8日）

開催地≫ベトナム／ハノイ・ホーチミン
実施競技・種目≫24競技　219種目
（別に、デモンストレーションで1競技　23 種目）
日本選手団≫選手93名、役員35名、計128名
（デモンストレーション選手1名、役員1名）

金 5個
銀 9個
銅 9個

第1回アジアマーシャルアーツゲームズ
（2009年8月1日～9日）

開催地≫タイ／バンコク
実施競技・種目≫9競技121種目
日本選手団≫選手19名、役員10名、アディッショナルオフィシャル7名、計36名

金 9個
銀 2個
銅 3個

今後の主な国際総合競技大会予定

2010
- 8/14～26 第1回ユースオリンピック競技大会（シンガポール）
- 11/12～27 第16回アジア競技大会（中国・広州）
- 12/8～16 第2回アジアビーチゲームズ（オマーン・マスカット）

2011
- 1/27～2/6 第25回ユニバーシアード冬季競技大会（トルコ・エルズルム）
- 1/30～2/6 第7回アジア冬季競技大会（カザフスタン・アスタナ／アルマティ）
- 8/12～23 第26回ユニバーシアード競技大会（中国・深圳）
- 未定 第4回アジアインドアゲームズ（カタール・ドーハ）

2012
- 1/13～22 第1回ユースオリンピック冬季競技大会（オーストリア・インスブルック）
- 7/27～8/12 第30回オリンピック競技大会（イギリス・ロンドン）
- 未定 第3回アジアビーチゲームズ（中国・ハヤン）

2013
- 10/6～15 第6回東アジア競技大会（中国・天津）
- 未定 第27回ユニバーシアード競技大会（ロシア・カザン）
- 未定 第26回ユニバーシアード冬季競技大会（スロベニア・マリボル）
- 未定 第5回アジアインドアゲームズ（カタール・ドーハ）

2014
- 2/7～23 第22回オリンピック冬季競技大会（ロシア・ソチ）
- 9/19～10/4 第17回アジア競技大会（韓国・インチョン）
- 未定 第2回ユースオリンピック競技大会（開催地未定）
- 未定 第4回アジアビーチゲームズ（フィリピン・バラケイ）

スポーツの楽しさ、素晴らしさを日本中に広げる

――お二人がオリンピックデーラン(以下、デーラン)のアンバサダーになった経緯を教えてください。

黒木　僕はシドニーオリンピックに参加した時に、スポーツを通じて人生を勉強できる場がたくさんあると思いました。デーランに参加される方、特にお子さんに対して微力ではありますが、何かを感じてもらえたらと思って参加しました。

大林　現役時代から長年、お手伝いさせていただいてきましたが、2009年から正式にアンバサダーになり大変光栄に思っています。

手を握って走る触れ合いが楽しい

――実際に参加して印象に残っていることは何ですか?

黒木　最初はのんびり会話をしながら走るのかと思っていたんですが、本気で自分と向き合って走っている子どもがいたんです。その真剣さに触れた時に、参加者とコミュニケーションを図るだけでなく、「頑張れ」と声を掛ける大切さも感じました。

大林　手を握って走ったりする触れ合いも楽しいですし、「頑張って」と言った瞬間に急に力強く走り出す子もいて、私の小さな力で子どもたちが変わる瞬間は嬉しいし、私が歩んできた証が生かされるのは幸せです。

黒木　小学4年と小学1年ぐらいの姉妹のことが印象に残っています。妹が走れなくて、泣きべそをかいていたらお姉ちゃんが「ひとりじゃないんだよ。助け合って最後まで頑張ろう」と妹の手を引いて走り、2人とも達成感のある笑顔でゴールしたんです。この経験が将来、必ず役に立つと思い感動しました。

――お互いの印象を聞かせてください。

黒木　大林さんは「私、体が弱っているから」と言いながら僕より速いんですよ(笑)。

大林　そんなことありません、むしろ逆です(笑)。

黒木　スーパースターでありながら、参加者の皆さんと一緒に走り、バレーボールをやっている人に丁寧に指導している姿を見た時に、次世代のために尽力している人だと感じました。

大林　黒木さんは熱い方なので、今までのデーランと雰囲気が変わってきたかもしれません。力強い言葉に影響力があるので、一緒にやっていて頼もしいです。

触れ合うことにも全力!「元気になってもらいたい」

――黒木さんはデーランを通じて子どもたちに伝えたいモットーがあるそうですね。

笑顔で子ども達を励ましながら走る黒木さん

オリンピックデーラン

一緒に走り、励まし合った先に、感動がある。

～2人のアンバサダーが感じたこと～

JOCが1987年から実施している
オリンピックデー記念事業「オリンピックデーラン」。
2009年からは、黒木知宏さんと大林素子さんが
オリンピックデーラン・アンバサダーに加わり、
全国各地でのイベントで参加者とともに汗を流している。
野球とバレーボール、それぞれの道を究めた2人が、
デーランを通じて伝えたい
〝スポーツの素晴らしさ〟とは何だろうか。

「頑張れ」と声をかけて走り出す子がいる。私の歩んだ証を生かせる場です。(大林)

JOCでは、スポーツの素晴らしさや感動を身近に感じてもらおうと、様々なオリンピックムーブメント普及・啓発事業を行っている。オリンピアンとの交流を通してスポーツの素晴らしさを伝える「オリンピックデーラン」、音楽とスポーツを融合させた「オリンピックコンサート」、オリンピアンがロールモデルとなる環境活動など、未来を担う子ども達の心身の育成もJOCの重要な役割だ。

苦しいことを乗り越える、その感動を伝えていきたいです。（黒木）

黒木　はい。ひとつは「1日1回全力を出す」です。スポーツでなくても、その意識が大切だと思うんです。1日1回全力を出すことを心がけていれば、どこかで出そうとしますよね？　デーランでは、走ること以外にも少しでも多くの人と触れ合うことに全力を出すという達成感もありました。もうひとつは「最後まで諦めない」。ゴールテープを切る喜びや苦しいことを乗り越えた感動を伝えていきたいですね。

――オリンピックの思い出を教えてください。

黒木　シドニーで投げた時は震えました。オリンピック日本代表チームに初めてプロ野球選手が加わって日の丸を背負って投げたわけですが、勝たなければいけない使命感で前日は眠れませんでした。でも、応援してくれる方々が選手とひとつになって同じボールを追いかけオリンピックを肌で感じていると思うと、夢や希望を与えられる場所に僕らはいる、だから真剣に一生懸命やる姿を見せなくてはいけないと思いました。

大林　私は3大会に出ましたが、最初のソウルが4位、バルセロナが5位、アトランタが9位。日本女子はソウルの前のロサンゼルスまではメダルを獲っていましたし、当時はそれが当たり前。だから現役時代は常に戦いでした。試合に勝った時や自分のスパイクが決まった時は嬉しいですが、それは一瞬なんです。

――今後はどのようにオリンピックと関わっていきますか？

大林　今はキャスターの仕事をさせていただいているので、オリンピックでバレーボールがメダルを獲る瞬間に解説をするのが最大の夢です。オリンピックは私にとって、取材の積み重ねを出せる最高の場だと思います。

黒木　スポーツの素晴らしさを小さな子どもから大人まで色々な方に感じて欲しいです。そして、オリンピックの時だけではなく、常にスポーツをしたり観戦したりして盛り上がって欲しいですね。スポーツを通じて多くの方に元気になってもらうPR活動という気持ちで関わっていきたいです。

「オリンピックデーラン」って何？

「オリンピックデーラン」は、6月23日のオリンピックデーを記念して国際オリンピック委員会（IOC）と各国・地域のオリンピック委員会により開催されているスポーツイベント。日本では1987年にスタートし、今年で24年目となる。一般参加者がオリンピアンと交流しながら一緒に走ることで、スポーツの楽しさやオリンピックの基本精神を肌で感じ、理解することを目的としている。延べ参加者数は50万人を超えた。2010年度は6月13日に大阪大会で幕開けし、全国8カ所で開催予定。各大会の詳細はJOC公式サイト内で発表される予定。

2010年オリンピックデーラン・アンバサダー

- 荻原健司（スキー・ノルディック複合）
- 荻原次晴（スキー・ノルディック複合）
- 千葉真子（陸上競技・長距離）
- 中村真衣（水泳・競泳）
- 大林素子（バレーボール）
- 黒木知宏（野球）

2010年オリンピックデーラン開催予定地一覧

開催予定日	大会名	開催地
6月13日(日)	大阪大会	大阪府
7月10日(土)	喜多方大会	福島県
9月12日(日)	士別大会	北海道
9月19日(日)	青森大会	青森県
10月24日(日)	神戸大会	兵庫県
10月31日(日)	長野大会	長野県
11月14日(日)	ひたちなか大会	茨城県
2011年1月9日(日)	和歌山大会	和歌山県

オリンピックデーラン≫ http://www.joc.or.jp/event/dayrun/

参加者と手をつないで走る大林さん（右）と中村真衣さん

黒木知宏
Tomohiro Kuroki

1973年12月13日生まれ。社会人野球で活躍後、1995年に千葉ロッテマリーンズ入団。マリーンズのエースとして、1998年には最多勝・最高勝率のタイトルを獲得。2000年シドニーオリンピックにも出場した。2007年12月に引退。ニックネームは「ジョニー」。

大林素子
Motoko Obayashi

1967年6月15日生まれ。神戸親和女子大学発達教育学部ジュニアスポーツ教育学科客員教授、スポーツキャスター、タレント。女子バレーボール選手時代は、1988年ソウルオリンピック4位、1992年バルセロナオリンピック5位、1996年アトランタオリンピック9位。

photo by PHOTO KISHIMOTO

2

3

1

photo by AFLO

1.「オリンピアンふれあい大運動会」では、オリンピアンとともに、玉入れ競争、大玉ころがしリレー、シッポ取り競争の3競技が行われた　2. オリンピアンが指導するスポーツ教室。レスリング教室では、吉田沙保里選手が手取り足取り指導　3. オリンピアンによるトークショーでは現役時代の経験談やスポーツの楽しさ、努力することの大切さなどが話された

老若男女がオリンピアンとともにスポーツと触れ合った一日

昨年度まで行われてきた「オリンピックフェスティバル」は、2009年度から会場を味の素ナショナルトレーニングセンターに移し、文部科学省、（財）日本体育協会、（財）日本レクリエーション協会、（独）日本スポーツ振興センター、（特非）日本オリンピアンズ協会、読売新聞社とともに、新たな事業「スポーツ祭り2009」として開催した。

西が丘サッカー場で行われた開会式には約2000人が参加。吉田沙保里選手による「スポーツ祭りの火」の点火や、準備体操が行われた。「オリンピアンふれあい大運動会」では中村真衣さん（水泳）や荻原健司さん（スキー）、荻原次晴さん（同）や大林素子さん、黒木知宏さん、柴田亜衣さん（水泳）ら12人のオリンピアンと366人の小学生が5チームに分かれ点を競い合った。

また「オリンピアンふれあいジョギング」には、小学生以上の老若男女1330人が20人のオリンピアンとともに約2kmコースの完走を目指した。

一方、各施設内ではオリンピアンが指導するスポーツ教室も開催。憩いの広場は、北区や板橋区の皆さんによるダンスや吹奏楽団などのイベントで賑わった。延べ1万3000人がオリンピアンとともに汗を流し、思い出深い一日となった。

JOC ジュニア作文オリンピック、11 人が表彰

21 世紀を担う青少年を対象に、「スポーツ」をテーマとした作文コンテストを実施。552 人の応募から入賞者 11 人が表彰された。12 歳未満の部のゴールドメダル賞は、地域の少年野球団で数少ない女子選手として活躍する神奈川県の石川妃悠さん。12 歳以上 18 歳以下の部の同賞は、08 年全日本ジュニア新体操選手権大会で個人総合優勝した後、ケガのリハビリに挑んでいる愛知県の佐々木アヤ香さんが選ばれた。

「スポーツ祭り2009」実施プログラム一覧

1 オリンピアンふれあい大運動会
2 オリンピアンふれあいジョギング
3 キッズ・スポーツ科学ランド
4 体力テスト
5 スポーツ教室17種目（陸上競技、水泳、サッカー、テニス、ボクシング、バレーボール、体操、新体操、トランポリン、レスリング、ウエイトリフティング、ハンドボール、卓球、フェンシング、柔道、バドミントン、アーチェリー）
6 親子でアスリート食体験
7 レッツ・チャレンジ！ おもしろスポーツ
8 ボート体験コーナー
9 おもしろ自転車コーナー
10 憩いの広場

スポーツ祭り 2009

オリンピアンと触れ合い、夢あふれる思い出の日

～スポーツの秋、1万3000人の笑顔が輝いた～

2009年10月12日「体育の日」、
「スポーツ祭り2009」が秋晴れの空のもと催された。
東京都北区にある味の素ナショナルトレーニングセンター、
国立スポーツ科学センター、
そして西が丘サッカー場の広い敷地をふんだんに使い、
20種類以上のスポーツイベントを同時開催。
延べ1万3000人がオリンピアンとともに汗を流し、
夢のような一日を過ごした。

環境活動

スポーツを通して環境の大切さを伝える

～美しい地球を守るために～

IOCは1990年代、オリンピックムーブメントに、
従来の「スポーツ」「文化」の他に、新たに「環境」を加えた。
以来、IOCのスポーツと環境委員会をリーダーとして、
NOC（国内・地域オリンピック委員会）は、
環境保全・啓発活動を推進している。
http://www.joc.or.jp/eco/

（左）温暖化防止を訴えるポスター（右）福岡で開催された「第5回JOCスポーツと環境・地域セミナー」。パネリストたちによる講演や、JOCスポーツ環境アンバサダーの塚原光男さんと岩崎恭子さんによるトークショーが行われた

スポーツにとって、環境保全は重要なテーマになっている

JOCは2001年より「スポーツ環境専門委員会」を設置し、加盟団体と共に環境活動の啓発・実践活動を推進。2003年にNOC中で初めて環境マネジメントシステム国際規格ISO14001に認証登録した。また、環境啓発のために、毎年ポスターとパンフレットを作成し、年度の活動をまとめた報告書を各団体に配布しているほか、公式サイトに「スポーツと環境」のページを制作。2004年からは加盟団体の担当者を対象として「スポーツと環境・担当者会議」を、2005年からは各地域のスポーツ指導者のための「JOCスポーツと環境・地域セミナー」を開催。スポーツ現場での環境保全・啓発活動の取り組みについて情報交換を行っている。

さらに2008年には、競技毎に実践的な取り組みを提示したIOC発行の『IOCスポーツと環境・競技別ガイドブック』を翻訳しマニュアルを独自に制作。「Think Globally Act Locally（地球規模で考え、足もとから行動する）」というスローガンを制定した。

加えて、環境省が推進しているCO2削減に向けた具体的な行動を提案し、その実践を広く呼びかける運動「チャレンジ25」にも参加。環境省との連携による環境保全・啓発活動とも連携している。

JOCスポーツ環境アンバサダー一覧（五十音順）

岩崎恭子（水泳・競泳）	荻原健司（スキー・ノルディック複合）	瀬古利彦（陸上競技・長距離）	原田早穂（水泳・シンクロナイズドスイミング）
大林素子（バレーボール）	黒岩敏幸（スケート・スピード）	塚原光男（体操）	松岡修造（テニス）
岡田武史（サッカー）	小林孝至（レスリング）	中村淳子（柔道）	八木沼純子（スケート・フィギュア）

JOC公式サイト／JOCメールマガジン／広報誌「OLYMPIAN」

JOCオリンピック・アスリート情報を適切に伝える

～プロモーション活動も大切な役割～

JOCでは、オリンピックムーブメント推進を目的に、
オリンピック競技大会および関連する情報の提供・発信元として、
JOC公式サイトとJOCメールマガジン、
広報誌『OLYMPIAN』を制作している。
http://www.joc.or.jp/

公式サイトでは、オリンピック競技大会やオリンピックに関連する最新情報を掲載。『OLYMPIAN』では、より詳しい競技・アスリート情報を提供している

Webや紙媒体を利用した積極的な情報の発信

JOC公式サイトは、「オリンピック」「競技情報」「選手インタビュー」「オリンピズムとは」「選手強化」「国際総合競技大会」「JOC」という各カテゴリに沿って、これまでのオリンピックの歴史や大会情報、味の素ナショナルトレーニングセンターでのチームジャパン情報、JOCの活動や選手強化情報等を随時公開している。

また、2008年度からは毎月下旬に「JOCメールマガジン」の配信が始まった。2009年度からはサイト内にオリンピアンの卵達の日々の活動や、オリンピアンの最新の様子を紹介する「チームジャパンダイアリー」がスタート。オリンピックおよびアスリート情報を配信し、オリンピックムーブメントの推進に努めている。

広報誌『OLYMPIAN』はJOC発行のオフィシャルマガジン。2008年度より年1回発行している。全国の高等学校、スポーツに関連のある学部を持つ大学などに寄贈、また希望者には有償にて販売している。

photo by AFLO/JOC

「オリンピックコンサート2009」では北京オリンピックの映像をドラマティックに大型スクリーンに映し、バンクーバー冬季オリンピックに向けて思いをひとつにするコンサートとなった

オリンピックコンサート

音楽もスポーツも最高の瞬間を観客と分かち合うもの

～三村奈々恵さんが語る「オリンピックコンサート2009」～

2009年6月14日に東京・渋谷のNHKホールで行われた
「オリンピックコンサート2009」にゲスト出演した、
マリンバの世界的奏者である三村奈々恵さん。
スポーツの映像と音楽がコラボレーションしたオリンピックコンサートに、
今までにない魅力を感じたという。

オリンピックコンサートは6月23日のオリンピックデーを記念して毎年6月に行われている。オリンピックデーランは世界中で行われているが、オリンピックコンサートは日本独自で実施。「映像と音楽で蘇るスポーツの感動」をテーマに、クラシックコンサートの形式をとりつつステージ上の大型スクリーンにオリンピック映像を流し、曲間にオリンピアンによるトークを交えることで、スポーツと音楽を融合させ、クラシックファンだけでなく誰もが親しめるコンサートである。

観客の気持ちが力に感動的なコンサート

このオリンピックコンサートに、ソリストとして初出演したのが、マリンバ奏者の三村さんだ。

「広いNHKホールでしたが、観客の皆さまがオリンピックを固唾を飲んで見守るのと同じように、マリンバの音色に集中して耳を傾けてくれていたんです。マリンバという楽器は初めて聴く方が多かったと思いますが、応援するような気持ちで聴いて下さっているのが分かり、本当に心地よく演奏することができました。オリンピックコンサートの一番の魅力は、その温かい雰囲気ではないでしょうか」

三村さんは1曲目にオーケストラと共に軽快な『道化師のギャロップ』と『剣の舞』をメドレーで演奏、2曲目はオペラの『カヴァレリア・ルスティカーナ』の間奏曲をゆったりとしたマリンバ・ソロにアレンジした。2曲目を勝負と考え、あえてソロのバラードを選んだという。

「実はバラードのようなマリンバの音色だけが響く曲の方が、エネルギーがたくさん必要で、それ

オリンピックコンサートとは

近代オリンピックの復興と、国際オリンピック委員会（IOC）の創設が決議された1894年6月23日のオリンピックデー。これを記念して、JOCが1997年から開催している文化イベントで、クラシック音楽とオリンピック映像を融合させたコンサートだ。2009年度は「あの感動をもう一度、挑戦ニッポン！～2016年東京へ！～」をテーマに、過去のオリンピックの名場面映像をバックに、全13曲が演奏された。オリンピアンもゲストとして参加し、曲の間に楽しいトークを披露。また、さまざまな演出によりオリンピックを身近に感じてもらいながら、オリンピックムーブメントの普及・啓発を行っている。

2009年は、柴田亜衣さん（水泳／競泳）が初の司会に挑戦。ゲストの小谷実可子さんらとトークショーを繰り広げた

観客の温かい空気に背中を押されたという三村さん。3m弱も横幅のあるマリンバを、時に力強く、時にしなやかに演奏し、観客の心をつかんだ

「応援を味方に、お客様から元気をもらえるコンサート」

だけ観客の方にも伝わるんです。フィギュアスケートなどもきっと同じだと思いますが、奏者とお客様が共に集中しているので、3階席のいちばん上の方にいる方の様子までヒシヒシと伝わってくるんです。奏者のエネルギーがお客様に伝わって巡り、自分に返ってくる。だから、選手の方々が声援を味方にして力を発揮するという話をよく聞きますが、このコンサートでも同じことが言えました。私もお客様から元気をもらえる、素晴らしいオリンピックコンサートでした」と振り返る。

スポーツで身につけたことがマリンバの演奏の土台に

三村さんは、身体を大きく使ったダイナミックな演奏で観客の心を奪った。

「マリンバは全身を使って演奏する、とてもアクティブな楽器です。大きなもので横幅は3m弱もあり、それに重たいマレットというバチを片手に2本ずつ持って、反復横跳びをするように演奏する。体の前側の筋肉も足もパンパンになり、スポーツをしているようです（笑）。32年間演奏し続けているので、演奏で使う背中の僧帽筋や腕の筋肉が異常に発達しています」

そんな演奏を支えているのは、子どものころから続けてきたテニス、スキー、水泳などのスポーツだ。

「いま学生にマリンバを教えていますが、手首のスナップを使えない子がたくさんいるんです。私は手首のスナップやボールを打つときの全身の使い方、また打つ瞬間に余計な力を入れないことなど、スポーツを通じて体に染み込んだものが生きていることに気がつきました。スポーツを小さいころからさせてくれた父にとても感謝しています」

初めてのオリンピックコンサート参加となった三村さん。普段とは違う演出を通して、改めて音楽の魅力を感じられたという。

「オリンピックコンサートは、ステージの雰囲気も華やかで、柴田亜衣さんが司会をし、ゲストにオリンピアンの方が来場するなど、お祭りのようでした。音楽とスポーツの異文化交流ですね。結果として、コンサートを通じて、スポーツと音楽はとても似ていると感じ、初心を思い出すきっかけになりました。音楽もスポーツも、最高の瞬間を観客と分かち合うもの。だからこそ、スポーツも生で観戦した時の躍動感は素晴らしいですし、音楽もライブで聴いた時の感動は大きいものですね」

オリンピックコンサートは、スポーツと音楽が融合した新たな魅力を追求し続けている。

三村奈々恵
Nanae Mimura

1974年生まれ、長野県茅野市で育つ。国立音楽大学を首席で卒業、ボストン音楽院で修士号を取得。卓越したテクニックと情感あふれるサウンドが評価され、史上3人目の「アロージ賞」（スイス）を受賞。ニューヨークの「カーネギーホール」でデビューリサイタルを行い、国際アーティストとして活躍中。

国際大会で活躍できる選手を育てる

JOCは、加盟競技団体に所属の若手指導者をスポーツ指導者海外研修員として海外に派遣し、その専門とする競技水準の向上に関する具体的な方法等について研修させるとともに、海外の選手強化対策、指導者養成の実態について調査・研究に当たらせ、将来我が国のスポーツ界を担う指導者として育成する事業を行っている。

海外研修員は、次の条件すべてを満たす者の中から選考される。

(1) 帰国後すぐに、本会の強化スタッフとして推薦でき、競技団体における指導者として活躍できること
(2) 渡航先の研修施設の受け入れの保証があること
(3) 勤務先等の所属長より渡航の承諾を受けていること
(4) 外国での研修に耐えうる語学力を有すること
(5) 当該年度の8月末日までには渡航先に出発できる見込みがあること

海外研修員には長期派遣者（研修期間2年以内）と短期派遣者（同1年以内）があり、原則として1カ所において集中的に研修する。

平成21年度には、長期派遣者3名と短期派遣者6名の合わせて9名を派遣し、国際舞台で活躍できる人材の育成を図っている。平成22年度は短期派遣者3名を派遣する。

スポーツ指導者海外研修

http://www.joc.or.jp/foreign_trainee/

平成22年度 スポーツ指導者海外研修事業研修員

高岡寿成(たかおか・としなり)／陸上競技
研修地≫アメリカ(マンモスレイク)
高地トレーニングなどの科学的なトレーニングの実践及びレース戦略について学ぶ

三原孝博(みはら・たかひろ)／卓球
研修地≫中国(河北省)
若年層からトップまでの育成方法について学び、次世代を支える指導者としての資質を磨く

小舘　操(こだて・みさお)／バイアスロン
研修地≫オーストリア(ザルツブルク)
スキー技術、射撃技術、指導法を習得し、バイアスロン連盟組織のあり方についても学ぶ

アスリートプログラム

http://www.joc.or.jp/official/

photo by PHOTO KISHIMOTO

JOCではオリンピック競技大会で実施される正式競技の日本代表として参加可能な者をオリンピック強化指定選手として認定し、その自覚を促すとともに、効果的な強化活動の展開を図ることを目的にオリンピック強化指定選手制度（アスリートプログラム）を制定している。

実施している事業内容は次の通り。

(1) 定期的な健康診断や体力測定
(2) 当該競技団体への強化スタッフの配置
(3) 上記強化スタッフ連絡会議の開催
(4) 国内外の強化合宿、海外遠征
(5) その他、強化に必要な諸事業

強化指定選手は、当該競技団体から推薦されたものの中から、次の3つの条件のひとつ以上を満たした選手が認定される。

(1) 当該競技団体がオリンピック競技大会の候補選手として決定した者
(2) オリンピック競技大会参加標準記録の突破、及び地域予選会、世界ランキング等により参加資格を獲得した者
(3) 当該競技団体が将来特に有望であると認定した者

なお各競技・種目ごとの人数は、原則としてオリンピック競技大会参加可能数の2倍以内とする。

また強化指定選手のうちオリンピック競技大会でメダルの獲得など入賞が期待される者は、エリート、ユースエリートとして認定され、エリートに対しては専任の強化スタッフが配置される。

強化指定選手、強化スタッフは、ともに本会会長名により認定、委嘱を行い、その期間は原則としていずれも当該年の4月1日から翌年3月31日までの1年間とする。但し、この期間中であっても、事情に応じて4半期毎に新たに追加、あるいは解除することができる。

JOCでは、国際大会で活躍できる選手を育てるため、多方面からの選手強化事業に取り組んでいる。「味の素ナショナルトレーニングセンター」や「アスリートプログラム」で選手の練習環境を支援するほか、「スポーツ指導者海外研修」では若手指導者を海外に派遣し、スポーツ界を担う人材を育成。オリンピックや国際競技大会で素晴らしいパフォーマンスを行えるよう、支援している。

アンチ・ドーピング

http://www.joc.or.jp/anti_doping/

JOCは、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）とともに、世界ドーピング防止規定（WADA規定）の署名当事者として、積極的にアンチ・ドーピングの普及・啓発活動に取組んできた。

ドーピングは、選手の健康を害するばかりか、スポーツの理念や価値を損ない、青少年に悪影響を与える行為であり、国際的にも、2005年10月、第33回国際連合教育科学文化機構（ユネスコ）総会において採択された「スポーツにおけるドーピングの防止に関する国際規約（規約）」が世界190カ国以上で締結され、ドーピング防止活動に取り組まれている。

JOCでは、2007年5月、国内ドーピング防止機関として国の指定を受けたJADAと協力し以下の活動を実施している。

（1）競技団体及び選手への居場所情報に関する啓発活動
（2）国際総合競技大会への選手派遣にあわせたドーピング検査の実施
（3）WADA関連会議への出席及び情報収集
（4）その他、JADAの諸活動に関わる協力

次世代アスリート特別強化推進事業

JOCでは、文部科学省の次世代アスリート特別強化推進事業を受託し、オリンピック競技大会で活躍できる競技者の育成強化を推進するため、メダル獲得に向けた国際競技力向上方策（中・長期的な強化プラン）を促進させている。

本年度は、競技団体評価ランク特A、A、Bの19団体（夏季のみ）のうち、希望のあった18団体の強化活動全般を統括するナショナルコーチ18名、アシスタントナショナルコーチ23名の計41名を任命した。

ナショナルコーチ

吉村和郎（柔道）、上野広治（水泳）、髙田裕次（レスリング）、渡辺守成（体操）、尾縣貢（陸上競技）、原博実（サッカー）、中村健次（セーリング）、成田明彦（バレーボール）、右近憲三（テニス）、前原正浩（卓球）、班目秀雄（自転車）、江村宏二（フェンシング）、朴柱奉（バドミントン）、D.マックスラート（ボート）、飯島健二郎（トライアスロン）、山中学（ホッケー）、篠宮稔（ウエイトリフティング）、岸髙清（ライフル射撃）

アシスタントナショナルコーチ

平井伯昌（水泳）、佐藤満、吉田栄勝（レスリング）、バツラー・セルギー、山﨑浩子（体操）、上田栄治、佐々木則夫（サッカー）、田名部雅子（セーリング）、瀬戸山正二（バレーボール）、増田健太郎、谷澤英彦（テニス）、倉嶋洋介、渡邊隆司（卓球）、村田正洋（自転車）、A.ゴルバチェク、V.ルカシェンコ（フェンシング）、米倉加奈子、リオニー・マイナキー（バドミントン）、坂本剛健（ボート）、山倉紀子、尾内香（トライアスロン）、高橋章（ホッケー）、佐々木廣郎（ライフル射撃）

JOCコーチ会議

JOCコーチ会議では、オリンピックに向けての強化策や取り組みについて、JOC加盟競技団体強化担当者、JOC強化スタッフらを招集し情報交換を行っている。

平成22年度は、4月27日、約300名が参加し、味の素ナショナルトレーニングセンターで開催。（1）バンクーバー冬季オリンピックにおける勝因・敗因を検証し、ソチ冬季オリンピックへ繋げる（2）ロンドンオリンピックへ向けた課題と方策を明確にし、強化策を再構築する——の2つのテーマについて話し合った。

味の素ナショナルトレーニングセンター

味の素ナショナルトレーニングセンターは、日本のトップレベル競技者専用トレーニング施設として 2008 年1月供用開始。隣接する国立スポーツ科学センターと連携を図りながら、国際競技力の向上に取り組んでいる。

施設概要

最先端の設備と機能を備えたトレーニング施設として、国際舞台の頂点を目指すアスリートのトレーニングを支えている。

1.屋内トレーニングセンター

国際競技ルールに準拠した各競技施設。デジタルハイビジョンカメラと大型スクリーンが設置され、パフォーマンス分析を行うことが可能。

2.アスリートヴィレッジ

258 名が宿泊可能。栄養管理食堂「SAKURA　Dining」では栄養士が常駐し、選手に最適な食事バランスをアドバイスしている。長期・短期問わず様々な合宿に対応可能。2011 年春には約 200 名を収容できる南棟も完成予定だ。

3.陸上トレーニング場

屋根付きの 400 mトラックのほか、傾斜走路、砂場走路などを設置。

4.屋内テニスコート

全米オープン、全仏オープンのサーフェスを再現した2種類のコートを設置。

JOCスポーツアカデミー事業

中長期的な視野での日本の国際競技力向上を目指し、若手育成、指導者養成、引退後のキャリア支援の3つの面から「JOCスポーツアカデミー事業」を展開している。①「JOCナショナルコーチアカデミー」では、国際的競技水準を踏まえた戦力・強化指導を行い、国際舞台で活躍できるアスリートを生み出すコーチを養成。②「JOCエリートアカデミー事業」ではオリンピックをはじめとした国際競技大会で将来活躍できる選手を恒常的に育成するために、トップアスリートとして必要な競技力、人間力の向上を図る。③「JOCキャリアアカデミー事業」では、現役引退後の不安を取り除くことで競技に集中できるようサポートし、また選手、コーチの人的資源を社会に還元していくことを目指している。

JOC キャリアアカデミーでは、引退後の進路相談などを受け付けている

拠点ネットワーク・情報戦略事業

国内各競技団体、競技施設、JOC パートナー都市、国立スポーツ科学センター等の各種団体・施設との連携を促進し、ネットワーク化。相互の人材交流や情報交換を展開する。

NTC競技別強化拠点

味の素ナショナルトレーニングセンター内では対応できない屋外系競技、海洋・水辺系競技、冬季競技、高地トレーニングについては、既存の施設を国が「NTC競技別強化拠点」として指定。JOCは指定施設に対して、医・科学面でのサポートや情報のネットワーク構築等、高機能化のための支援を行う他、各施設担当者を招いての研修会等を実施している。

ワールドネットワーク(ラフバラ大学)

国外の強化拠点整備の一環として、イギリス・ラフバラ大学と提携。2012 年のロンドンのオリンピックに向けた日本選手団の事前合宿や人的交流等、さまざまな面での日英相互協力が可能になった。

ラフバラ大学は英国イーストミッドランド地方レスター州の北部にある

1

2

3

4

5

6

1. 味の素ナショナルトレーニングセンターの外観　2. 陸上トレーニング場　3. 卓球場には実際のオリンピックや各国際大会で使用されるものと同様の卓球台が設置されている　4.2011 年に完成予定のアスリートヴィレッジ南棟　5. 栄養管理食堂「SAKURA Dining」では選手に合った食事を選べる　6.JOC ナショナルコーチアカデミーではトップアスリートを指導するコーチの養成を行う

Chapter 4

マーケティング事業

JOCの理念を円滑に実現するための活動

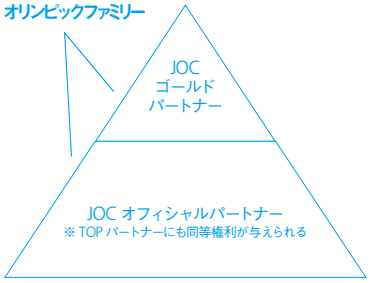
Vision
マーケティングの目的

JOC では、「オリンピックを通じて、人類が共に栄え、文化を高め、世界平和の火を永遠に灯し続ける」という JOC の理念を実現するために、オリンピックをはじめとする国際総合競技大会（※）への日本代表選手団の派遣、オリンピックムーブメントの推進、そして選手の育成・強化事業に取り組んでいる。こうした活動に必要となる資金、専門的なノウハウ等をご提供いただき、JOC、日本代表選手団及び日本のオリンピックムーブメントの推進を支えていただくための仕組みが、JOC のマーケティング活動である。

※ JOC が管轄している国際総合競技大会／オリンピック競技大会、アジア競技大会、ユニバーシアード競技大会、東アジア競技大会　等

Programs
マーケティングプログラムの種類

JOC では、日本国内において、スポンサーシッププログラム、ライセンシングプログラムをはじめとするさまざまなマーケティングプログラムを実施している。主なマーケティングプログラムは以下のとおりとなっている。



2009～2012
JOCパートナーシッププログラムの構造

1. 主なスポンサーシッププログラム

○ 2009 ～ 2012 JOC パートナーシッププログラム
2009 ～ 2012 JOC パートナーシッププログラムは、複数階層によるスポンサーシップ制を採用し、JOC ゴールドパートナーと JOC オフィシャルパートナーの 2 つのパートナー制によって構成される。

・JOC ゴールドパートナー
JOC パートナーシッププログラムにおける国内最高位のパートナー。JOC・日本代表選手団に関する権利、パートナータイアップに関する権利、パートナーリコグニションに関する権利、ホスピタリパッケージに関する権利、パートナーサービスに関する権利、共同事業開発プログラムに関する権利のスタンダードプログラムに加え、ゴールドパートナー特典権利である、シンボルアスリートの肖像使用権等が付与されている。

・JOC オフィシャルパートナー
JOC・日本代表選手団に関する権利、パートナータイアップに関する権利、パートナーリコグニションに関する権利、ホスピタリパッケージに関する権利、パートナーサービスに関する権利、共同事業開発プログラムに関する権利を有する。

○ TOP パートナープログラム
国際オリンピック委員会の主導により実施されているオリンピックに関する最高位のスポンサーシッププログラム。全世界で、オリンピックに関するマーク類及び参加している選手団に関する知的財産等を契約した商品・サービスに関して使用することができるプログラム。日本国内においては、オフィシャルパートナーと同等の権利を有する。

2. ライセンシングプログラム（商品化プログラム）

○ JOC オフィシャルライセンシングプログラム
日本国内で、契約した商品に JOC のマークを使用して販売することができる商品化プログラム。

JOCのマーケティング
http://www.joc.or.jp/aboutjoc/marketing/

Rights
マーケティングに活用する権利

JOC のマーケティング活動への協賛を通してご支援いただいている企業に対し、JOC マーク、公式呼称、選手の肖像、オリンピック日本代表選手団に関する映像等をはじめとする JOC が所有・管理する以下のような知的財産の使用を承認し、JOC、日本代表選手団及び日本のオリンピックムーブメントの推進を支えていただいている。

1. 主なスポンサーシッププログラム

○ JOC のマーク
・第 2 エンブレム
・スローガン「がんばれ！ニッポン！」
・JOC コミュニケーションマーク
・オリンピック日本代表選手団公式応援マーク 等

○公式呼称
（JOC 及び日本代表選手団との関係を表す呼称）
例：JOC オフィシャルパートナー
　　オリンピック日本代表選手団を応援しています
　　JOC 公式ライセンス商品　等

2. シンボルアスリートの肖像

・JOC が管轄するシンボルアスリートの肖像
（容姿、氏名、イラスト、通称、サイン等）

3. 日本代表選手団に関する映像

・オリンピックをはじめとする国際総合競技大会
・JOC の所有する動画及び静止画像

JOC 第2エンブレム

第21回オリンピック冬季競技大会
（2010/バンクーバー）
日本代表選手団公式応援マーク

がんばれ!ニッポン!
スローガン「がんばれ!ニッポン!」

平成21・22年度

(財)日本オリンピック委員会役員紹介

Chapter 5

笠谷幸生
理事

かさや・ゆきお
1943年8月生まれ。選手強化本部副本部長、強化育成専門委員会副委員長、㈶全日本スキー連盟常務理事、第21回オリンピック冬季競技大会(2010／バンクーバー)日本代表選手団副団長、第11回(1972／札幌)スキー・ジャンプ70m級金メダリスト、会社役員。

河野一郎
理事

こうの・いちろう
1946年11月生まれ。アンチ・ドーピング委員会委員長、㈶日本アンチ・ドーピング機構会長、㈶日本ラグビーフットボール協会理事、国際ラグビーボード理事、第28回オリンピック競技大会(2004／アテネ)日本代表選手団本部役員他、大学教授。

佐藤征夫
理事

さとう・ゆきお
1944年6月生まれ。法務専門委員会委員長、㈶全日本剣道連盟常任理事、国際剣道連盟事務総長、大学特任教授。

澤木啓祐
理事

さわき・けいすけ
1943年12月生まれ。選手強化本部副本部長、情報・医・科学専門委員会委員長、㈶日本陸上競技連盟専務理事。

猪谷千春
理事／IOC委員

いがや・ちはる
1931年5月生まれ。(財)日本体育協会顧問、(特非)日本オリンピックアカデミー会長、㈳日本トライアスロン連合名誉会長、国際トライアスロン連合副会長、第7回オリンピック冬季競技大会(1956／コルチナ・ダンペッツォ)スキー・アルペン銀メダリスト、団体役員。

岡野俊一郎
理事／IOC委員

おかの・しゅんいちろう
1931年8月生まれ。㈶日本アンチ・ドーピング機構副会長、㈶日本サッカー協会名誉会長、東アジアサッカー連盟名誉会長、第1回アジア冬季競技大会(1986／札幌)日本代表選手団団長、会社役員。

尾﨑正則
理事

おざき・まさのり
1945年7月生まれ。総務委員会副委員長、事業・広報専門委員会委員長、国際専門委員会副委員長、㈶日本ソフトボール協会専務理事。

木村興治
常務理事

きむら・こうじ
1940年12月生まれ。総務委員会委員長、国際専門委員会委員長、㈶日本卓球協会副会長、国際卓球連盟副会長、大学非常勤講師。

板橋一太
常務理事

いたばし・いちた
1944年12月生まれ。スポーツ環境専門委員会委員長、財務専門委員会副委員長、ナショナルトレーニングセンター委員会副委員長、団体役員。

青木　剛
理事

あおき・つよし
1947年1月生まれ。総務委員会副委員長、マーケティング委員会委員長、㈶日本水泳連盟副会長、第26回オリンピック競技大会(1996／アトランタ)・第29回(2008／北京)日本代表選手団本部役員。

荒木田裕子
理事

あらきだ・ゆうこ
1954年2月生まれ。アスリート専門委員会委員長、㈶日本バレーボール協会執行役員、アジアオリンピック評議会(OCA)理事、OCAアスリート委員会委員長、第29回オリンピック競技大会(2008／北京)日本代表選手団本部役員、第21回オリンピック競技大会(1976／モントリオール)バレーボール女子金メダリスト、団体役員。

市原則之
専務理事

いちはら・のりゆき
1941年10月生まれ。㈶日本ハンドボール協会副会長、第29回オリンピック競技大会(2008／北京)日本代表選手団副団長、第15回アジア競技大会(2006／ドーハ)日本代表選手団総監督、第3回東アジア競技大会(2001／大阪)日本代表選手団団長、大学特別客員教授。

田中英壽
常務理事

たなか・ひでとし
1946年12月生まれ。日本ユニバーシアード委員会委員長、表彰専門委員会委員長、㈶日本相撲連盟副会長、国際相撲連盟会長、第25回ユニバーシアード競技大会(2009／ベオグラード)日本代表選手団団長、大学役員。

上村春樹
常務理事

うえむら・はるき
1951年2月生まれ。選手強化本部本部長、ナショナルトレーニングセンター委員会副委員長、㈶全日本柔道連盟会長、第29回オリンピック競技大会(2008/北京)日本代表選手団総監督、第21回オリンピック競技大会(1976／モントリオール)柔道無差別級金メダリスト、団体役員。

竹田恆和
会長

たけだ・つねかず
1947年11月生まれ。㈶日本体育協会理事、(特非)日本オリンピアンズ協会会長、㈳日本馬術連盟副会長、IOC第22回オリンピック冬季競技大会(2014／ソチ)調整委員会委員、アジアオリンピック評議会(OCA)理事、国際オリンピック委員会連合(ANOC)理事、国際馬術連盟名誉副会長、会社役員。

福田富昭
副会長

ふくだ・とみあき
1941年12月生まれ。ナショナルトレーニングセンター委員会委員長、味の素ナショナルトレーニングセンターセンター長、㈶日本レスリング協会会長、国際レスリング連盟副会長、第29回オリンピック競技大会(2008／北京)日本代表選手団団長、第15回アジア競技大会(2006／ドーハ)日本代表選手団副団長他、会社役員。

水野正人
副会長

みずの・まさと
1943年5月生まれ。IOCスポーツと環境委員会委員、第5回東アジア競技大会(2009／香港)日本代表選手団団長、IOCオリンピックオーダー受章(2001)、会社役員。

平成22年4月末現在

相澤隆也
監事

あいざわ・たかや
1946 年 3 月生まれ。(財) 日本体育協会評議員、㈶全日本ボウリング協会専務理事、団体役員。

岩楯昭一
監事

いわだて・しょういち
1942 年 3 月生まれ。㈶日本自転車競技連盟会長、団体役員。

藤原庸介
理事

ふじわら・ようすけ
1953 年 6 月生まれ。事業・広報専門委員会副委員長。

森　喜朗
理事

もり・よしろう
1937 年 7 月生まれ。㈶日本体育協会会長、㈶日本ラグビーフットボール協会会長、元内閣総理大臣、衆議院議員。

平岡英介
理事

ひらおか・えいすけ
1948 年 3 月生まれ。総務委員会副委員長、財務専門委員会委員長、法務専門委員会副委員長、㈳日本ボート協会副会長、会社役員。

福井　烈
理事

ふくい・つよし
1957 年 6 月生まれ。強化育成専門委員会副委員長、JOC ゴールドプラン委員会副委員長、㈶日本テニス協会常務理事、プロテニス選手。

野上義二
理事

のがみ・よしじ
1942 年 6 月生まれ。国際専門委員会副委員長、㈶日本ラグビーフットボール協会評議員、会社役員。

橋本聖子
理事

はしもと・せいこ
1964 年 10 月生まれ。(財) 日本スケート連盟会長、第 21 回オリンピック冬季競技大会（2010 ／バンクーバー）日本代表選手団団長、第 16 回（1992 ／アルベールビル）スケート・スピードスケート銅メダリスト、第 21 回（2010 ／バンクーバー）日本代表選手団団長、参議院議員。

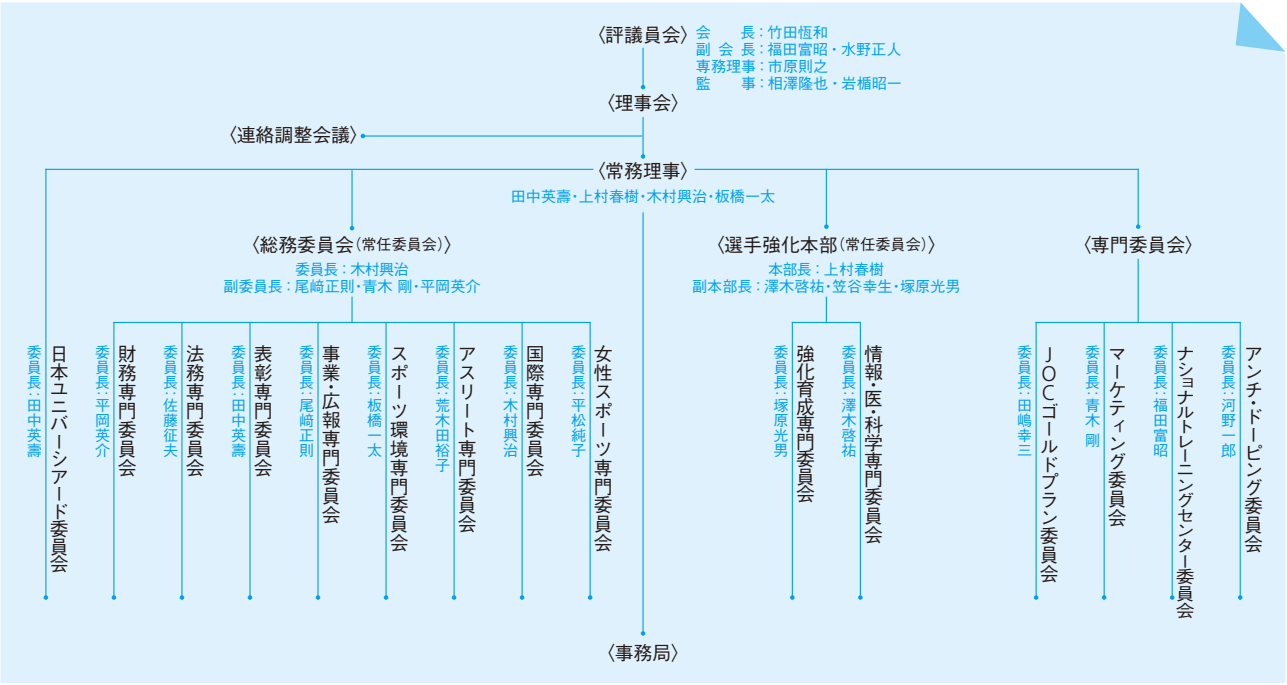
田嶋幸三
理事

たしま・こうぞう
1957 年 11 月生まれ。JOC ゴールドプラン委員会委員長、スポーツ環境専門委員会副委員長、㈶日本サッカー協会専務理事、第 29 回オリンピック競技大会（2008/北京）日本代表選手団本部役員、団体役員。

塚原光男
理事

つかはら・みつお
1947 年 12 月生まれ。選手強化本部副本部長、強化育成専門委員会委員長、表彰専門委員会副委員長、㈶日本体操協会副会長、第 19 回オリンピック競技大会（1968 ／メキシコシティー）、第 20 回（1972 ／ミュンヘン）、第 21 回（1976 ／モントリオール）体操競技金メダリスト他、会社役員。

平成21・22年度　JOC 組織機構図



JOC activity report

Chapter 6

オリンピック　日本の大会参加状況

夏季大会

回（開催年）	開催地（国）	開催期間	実施競技数	実施種目数	参加国（地域）数	参加選手数	日本の参加者数 役員	選手 男子	選手 女子	計	日本の参加競技数	日本のメダル獲得数 G	S	B	団長	主将	旗手
1（1896）	アテネ（ギリシャ）	4.6～4.15	9	43	14	241	—	—	—	—	—	—	—	—			
2（1900）	パリ（フランス）	5.14～10.28	18	95	24	997	—	—	—	—	—	—	—	—			
3（1904）	セントルイス（アメリカ）	7.1～11.23	17	91	12	651	—	—	—	—	—	—	—	—			
4（1908）	ロンドン（イギリス）	4.27～10.31	22	110	22	2,008	—	—	—	—	—	—	—	—			
5（1912）	ストックホルム（スウェーデン）	5.5～7.27	14	102	28	2,407	2	2	0	4	1	0	0	0	嘉納治五郎		
6（1916）	ベルリン（ドイツ）ー中止																
7（1920）	アントワープ（ベルギー）	4.20～9.12	22	154	29	2,626	3	15	0	18	3	0	2	0	嘉納治五郎		
8（1924）	パリ（フランス）	5.4～7.27	17	126	44	3,089	9	19	0	28	4	0	0	1	岸　清一		
9（1928）	アムステルダム（オランダ）	5.17～8.12	14	109	46	2,883	13	42	1	56	6	2	2	1	山本忠興	高石勝男	中沢米太郎
10（1932）	ロサンゼルス（アメリカ）	7.30～8.14	14	117	37	1,332	61	115	16	192	9	7	7	4	平沼亮三		織田幹雄
11（1936）	ベルリン（ドイツ）	8.1～8.16	19	129	49	3,963	70	162	17	249	13	6	4	10	平沼亮三		大島鎌吉
12（1940）	東京（日本）ー返上　ヘルシンキ（フィンランド）ー中止																
13（1944）	ロンドン（イギリス）ー中止																
14（1948）	ロンドン（イギリス）	7.29～8.14	17	136	59	4,104	—	—	—	—	—	—	—	—			
15（1952）	ヘルシンキ（フィンランド）	7.19～8.3	17	149	69	4,955	31	61	11	103	12	1	6	2	田畑政治	古橋廣之進	沢田文吉
16（1956）	メルボルン（オーストラリア）	11.22～12.8	16	145	67	3,155	45	101	16	162	12	4	10	5	田畑政治	竹本正男	笹原正三
	ストックホルム（スウェーデン）	6.10～6.17	1	6	29	159	3	2	0	5	1	0	0	0			
17（1960）	ローマ（イタリア）	8.25～9.11	17	150	83	5,338	52	147	20	219	16	4	7	7	春日　弘	糸山隆司	小野　喬
18（1964）	東京（日本）	10.10～10.24	19	163	93	5,151	82	294	61	437	20	16	5	8	大島鎌吉	小野　喬	福井　誠
19（1968）	メキシコシティー（メキシコ）	10.12～10.27	20	172	112	5,516	32	153	30	215	17	11	7	7	大庭哲夫	菅原武男	遠藤幸雄
20（1972）	ミュンヘン（西ドイツ）	8.26～9.11	23	195	121	7,134	37	144	38	219	19	13	8	8	青木半治	中村祐造	篠巻政利
21（1976）	モントリオール（カナダ）	7.17～8.1	21	198	92	6,084	55	152	61	268	19	9	6	10	河野謙三	加藤沢男	猫田勝敏
22（1980）	モスクワ（ソビエト）	7.19～8.3	21	203	80	5,179	—	—	—	—	—	—	—	—			
23（1984）	ロサンゼルス（アメリカ）	7.28～8.12	23	221	140	6,829	77	178	53	308	18	10	8	14	柴田勝治	山下泰裕	室伏重信
24（1988）	ソウル（韓国）	9.17～10.2	25	237	159	8,391	78	188	71	337	20	4	3	7	柴田勝治	斎藤　仁	小谷実可子
25（1992）	バルセロナ（スペイン）	7.25～8.9	28	257	169	9,356	114	181	82	377	21	3	8	11	古橋廣之進	古賀稔彦	中田久美
26（1996）	アトランタ（アメリカ）	7.19～8.4	26	271	197	10,318	189	160	150	499	23	3	6	5	古橋廣之進	谷口浩美	田村亮子
27（2000）	シドニー（オーストラリア）	9.15～10.1	28	300	199	10,651	171	158	110	439	24	5	8	5	八木祐四郎	杉浦正則	井上康生
28（2004）	アテネ（ギリシャ）	8.13～8.29	28	301	201	10,625	201	141	171	513	26	16	9	12	竹田恒和	井上康生	浜口京子
29（2008）	北京（中国）	8.8～8.24	28	302	204	10,942	237	170	169	576	26	9	6	10	福田富昭	鈴木桂治	福原　愛

冬季大会

回（開催年）	開催地（国）	開催期間	実施競技数	実施種目数	参加国（地域）数	参加選手数	日本の参加者数 役員	選手 男子	選手 女子	計	日本の参加競技数	日本のメダル獲得数 G	S	B	団長	主将	旗手
1（1924）	シャモニー・モンブラン（フランス）	1.25～2.5	6	16	16	258	—	—	—	—	—	—	—	—			
2（1928）	サン・モリッツ（スイス）	2.11～2.19	4	14	25	464	1	6	0	7	1	0	0	0			
3（1932）	レークプラシッド（アメリカ）	2.4～2.15	4	14	17	252	5	17	0	22	2	0	0	0			
4（1936）	ガルミッシュ・パルテンキルヘン（ドイツ）	2.6～2.16	4	17	28	646	14	33	1	48	3	0	0	0			
5（1948）	サン・モリッツ（スイス）	1.30～2.8	4	22	28	669	—	—	—	—	—	—	—	—			
6（1952）	オスロ（ノルウェー）	2.14～2.25	4	22	30	694	5	13	0	18	2	0	0	0			
7（1956）	コルチナ・ダンペッツオ（イタリア）	1.26～2.5	4	24	32	821	7	10	0	17	2	0	1	0	竹田恒徳		
8（1960）	スコー・バレー（アメリカ）	2.18～2.28	4	27	30	665	11	36	5	52	3	0	0	0	木原　均	猪谷千春	上野純子
9（1964）	インスブルック（オーストリア）	1.29～2.9	6	34	36	1,091	13	42	6	61	4	0	0	0	木原　均	長久保文夫	菊地定夫
10（1968）	グルノーブル（フランス）	2.6～2.18	6	35	37	1,158	16	53	9	78	4	0	0	0	西田信一	佐藤和夫	金入孝明
11（1972）	札幌（日本）	2.3～2.13	6	35	35	1,006	20	70	20	110	6	1	1	1	柴田勝治	鈴木恵一	益子峰行
12（1976）	インスブルック（オーストリア）	2.4～2.15	6	37	37	1,123	15	51	6	72	6	0	0	0	山田正彦	笠谷幸生	鈴木正樹
13（1980）	レークプラシッド（アメリカ）	2.13～2.24	6	38	37	1,072	23	46	4	73	6	0	1	0	伴　素彦	久保田知男	若林　修
14（1984）	サラエボ（ユーゴスラビア）	2.8～2.19	6	39	49	1,272	30	32	7	69	5	0	1	0	竹田恒徳	出口弘之	高橋忠之
15（1988）	カルガリー（カナダ）	2.13～2.28	6	46	57	1,423	33	37	11	81	5	0	0	1	堂垣内尚弘	黒岩　彰	橋本聖子
16（1992）	アルベールビル（フランス）	2.8～2.23	7	57	64	1,801	42	42	21	105	5	1	2	4	堤　義明	佐々木一成	川崎　努
17（1994）	リレハンメル（ノルウェー）	2.12～2.27	6	61	67	1,737	45	49	16	110	5	1	2	2	南洞邦夫	橋本聖子	三ヶ田礼一
18（1998）	長野（日本）	2.7～2.22	7	68	72	2,176	147	100	66	313	7	5	1	4	八木祐四郎	荻原健司	清水宏保
19（2002）	ソルトレークシティー（アメリカ）	2.8～2.24	7	78	77	2,399	109	61	48	218	6	0	1	1	竹田恒和	原田雅彦	三宮恵利子
20（2006）	トリノ（イタリア）	2.10～2.26	7	84	80	2,508	126	59	53	238	6	1	0	0	遅塚研一	岡崎朋美	加藤条治
21（2010）	バンクーバー（カナダ）	2.12～2.28	7	86	82	約2,600	111	49	45	205	6	0	3	2	橋本聖子	岡部孝信	岡崎朋美

OLYMPIAN 2010　平成22年5月17日発行　発行／財団法人 日本オリンピック委員会
〒150-8050 東京都渋谷区神南1-1-1　岸記念体育会館内　TEL 03-3481-2238　FAX 03-3481-0977
URL http://www.joc.or.jp　e-mail olympian@joc.jp
©JAPANESE OLYMPIC COMMITTEE　無断転載禁止

PHOTO：フォートキシモト・アフロスポーツ

日本中に感動をよんだバンクーバーオリンピックが幕を閉じました。
皆さまのあたたかいご声援が日本選手団の最大の、そして最高の力となりました。ありがとうございました。
私たちは、2012年ロンドンオリンピックへむけて、感謝の気持ちと自分の夢を忘れず走り続けます。
引き続き、あたたかいご声援をお願いいたします。

財団法人日本オリンピック委員会

夢があるから人は強くなれる。

オリンピック日本代表を応援するパートナー企業のみなさまです。

パートナー企業からの協賛金は、オリンピックをはじめ国際競技大会で活躍を期待される日本選手の育成・強化や、オリンピック・ムーブメント推進のために活用されています。

JOCゴールドパートナー

Asahi　NTT docomo　東京海上ホールディングス　TOYOTA　日本生命　YAHOO! JAPAN　AJINOMOTO

JOCオフィシャルパートナー

MIZUNO　DESCENTE　asics　KONAMI　Kubota　ExcelHuman　丸大食品　JAL　ANA　LOTTE　日清オイリオ　エステティック TBC　読売新聞　全農　Daiwa House　NISSIN 日清食品ホールディングス

JOCメディアパートナー

日テレ　TBS　フジテレビ　tv asahi

ワールドワイドパートナー

Coca-Cola　acer　Atos Origin　GE　OMEGA　Panasonic　SAMSUNG　VISA　TV TOKYO

OLYMPIAN 2010

平成22年5月17日発行　発行／財団法人日本オリンピック委員会
〒150-8050 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育会館内
TEL.03-3481-2238　FAX.03-3481-0977

がんばれ！ニッポン！®

KEIRIN

この事業は、競輪の補助金を受けて実施したものです。
http://ringring-keirin.jp